

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 60

陣山北山麓遺跡
奥迫遺跡
上長野A遺跡

昭和59年度圃場整備に
伴う確認調査

1985年3月

岡山県教育委員会

序

本報告書には、圃場整備事業実施計画に伴う陣山北山麓遺跡（作東町）、奥迫遺跡（矢掛町）、上長野A遺跡（鏡野町）の3遺跡の確認調査結果を収めました。

ここに収めました3遺跡の確認調査は、いずれも圃場整備事業の実施に先だって埋蔵文化財の保護、保存の資料を得て、圃場整備事業との調整を図ることを目的として、昭和59年度国庫補助事業として行われたものであります。

調査の結果、陣山北山麓遺跡では弥生時代中期から室町時代までの集落址約3,000m²を、奥迫遺跡では縄文時代早期から中世～近世までの集落址約50,000m²を、上長野A遺跡では縄文時代から室町時代までの集落址約10,000m²を確認することができました。

これらの成果を収めた本報告書が、文化財の保護、保存のため活用され、また、地域の歴史を研究する資料として役立てていただければ幸いと存じます。

最後に、発掘調査ならびに報告書の作成にあたって、岡山県文化財保護審議会委員をはじめ、関係町の教育委員会および同文化財保護審議委員ならびに土地所有者等関係各位から賜りました多大な御指導と御協力に対し、厚く御礼申しあげます。

昭和60年3月

岡山県教育委員会

教育長 宮地暢夫

じんやまきたさんろく
陣山北山麓遺跡

例　　言

1. 本書は岡山県教育委員会が昭和59年度国庫補助を受けて実施した「陣山北山麓遺跡」
の発掘調査概要報告書である。
2. 遺跡は英田郡作東町土居上町に所在する。
3. 発掘調査は岡山県古代吉備文化財センター職員松本和男が担当し、専門委員の指導、
助言を得て昭和59年11月7日から昭和60年2月28日まで実施した。
4. 発掘調査は作東町役場、作東町教育委員会、地権者等関係各位より絶大なる援助を
受けた。特に発掘作業に従事していただいた土居地区有志の方々には大変お世話にな
りました。記して謝意を表わします。
5. 遺物の整理は岡山県古代吉備文化財センターで松本が行った。なお、遺物、実測図、
写真等は文化財センター（岡山市西花尻1325-3）において一括保管している。
6. 本報告書の執筆、編集は松本が行った。調査にあたっては堀川純氏（岡山理科大学
蒜山研究所）、報告書作成にあたっては、写真撮影をセンター職員井上弘、実測を竹
本聰美の協力を得た。
7. 本書に使用したレベル高は仮原点からの高さである。方位は第2～4図が真北、他
は磁北である。
8. 本書第2図に使用した地形図は建設省国土地理院発行の25,000分の1地形図（佐用、
上月、林野、真加部）を複製したものである。

目 次

例 言

目 次

第1章 地理的・歴史的環境.....	7
第2章 調査の経緯.....	10
第3章 発掘調査の概要.....	13
トレンチ調査の概要.....	13
遺物.....	18
第4章 まとめ.....	22

図 目 次

第1図 遺跡位置図.....	7
第2図 周辺遺跡分布図.....	8
第3図 万能屹と陣山北山麓遺跡（北西から）.....	9
第4図 遺跡周辺地形図（ $S=\frac{1}{2,500}$ ）.....	11
第5図 トレンチ位置図.....	13
第6図 T-4、5、18、20実測図（ $S=\frac{1}{80}$ ）.....	15
第7図 T-21、22、23実測図（ $S=\frac{1}{80}$ ）.....	16
第8図 T-28、32実測図（ $S=\frac{1}{80}$ ）.....	17
第9図 T-32内住居址出土遺物（ $S=\frac{1}{4}$ ）.....	17
第10図 トレンチ内出土遺物（ $S=\frac{1}{4}$ ）.....	19
第11図 トレンチ内出土遺物（ $S=\frac{1}{4}$ ）.....	20
第12図 トレンチ内出土遺物（ $S=\frac{1}{4}$ ）.....	21
第13図 園場整備予定地区内における遺跡範囲（ $S=\frac{1}{2,500}$ ）.....	23

図 版 目 次

図版1 (1) 陣山北山麓遺跡遠景（北西から）

- (2) 阵山北山麓遺跡近景（東から）
- 図版2 (1) 調査事務所と旧出雲街道遠景（南から）
(2) 発掘調査風景（北から）
- 図版3 (1) T-16埋めもどし作業風景（東から）
(2) T-4土層断面（北東から）
- 図版4 (1) T-18遺構全景（南東から）
(2) T-18土層断面（北東から）
- 図版5 (1) T-20全景（南から）
(2) T-21全景（北から）
- 図版6 (1) T-22遺構全景（北西から）
(2) T-22土層断面（西から）
- 図版7 (1) T-23全景（西から）
(2) T-32全景（北西から）
- 図版8 出土遺物

第1章 地理的・歴史的環境

陣山北山麓遺跡の所在する作東町は英田郡の東部にあり、東の町境である万能峠、杉坂峠を越えると兵庫県上月町にいたる。北は大原町、勝田町、南は英田町、西は美作町に接し、約110km²の面積を有する。

作東町は岡山県東部を南流する吉井川支流の吉野川中流域に形成された南北に細長い町である。

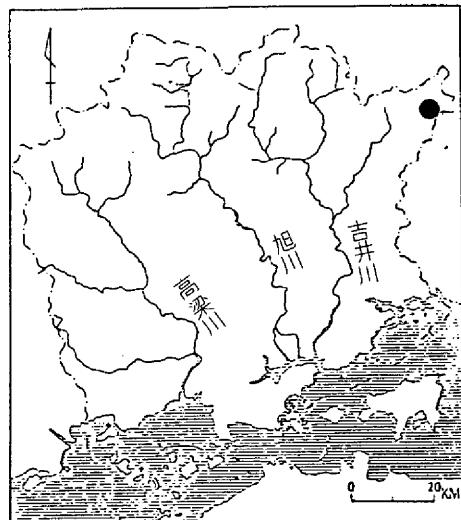
主要な集落の大部分は吉野川、山家川などの河岸段丘沿いと谷底平野部にあり、町の中心集落は吉野川と山家川との合流地点である江見地区である。

陣山北山麓遺跡は作東町福山を水源とする流程約6kmの山家川右岸にあり、山家川に沿う旧出雲街道の宿場町である土居の約1km程上流に位置する。遺跡は通称陣山（標高約255m）山麓北側と旧出雲街道に利用された万能峠との間にあり、弥生時代から中世の集落址と考えられている。

作東町内において現在知られている最も古い遺物は高本遺跡出土の縄文時代晚期の土器である。弥生時代前期の遺跡は確認されていないが、中期以降になると山裾に大規模ではないが認められる。本遺跡周辺においては土居神社付近一帯（櫛原遺跡）において確認されている。古墳時代になると県内各地域では数多くの古墳が各水系、平野を見下す丘陵に認められるのが一般的であるが、本町では古墳は極めて少なく、低丘陵上に3~4か所の古墳群が知られているのみである。充分な遺跡分布調査がなされていないためこの時期の遺跡が少ないが、今後さらに増加することが予想される。

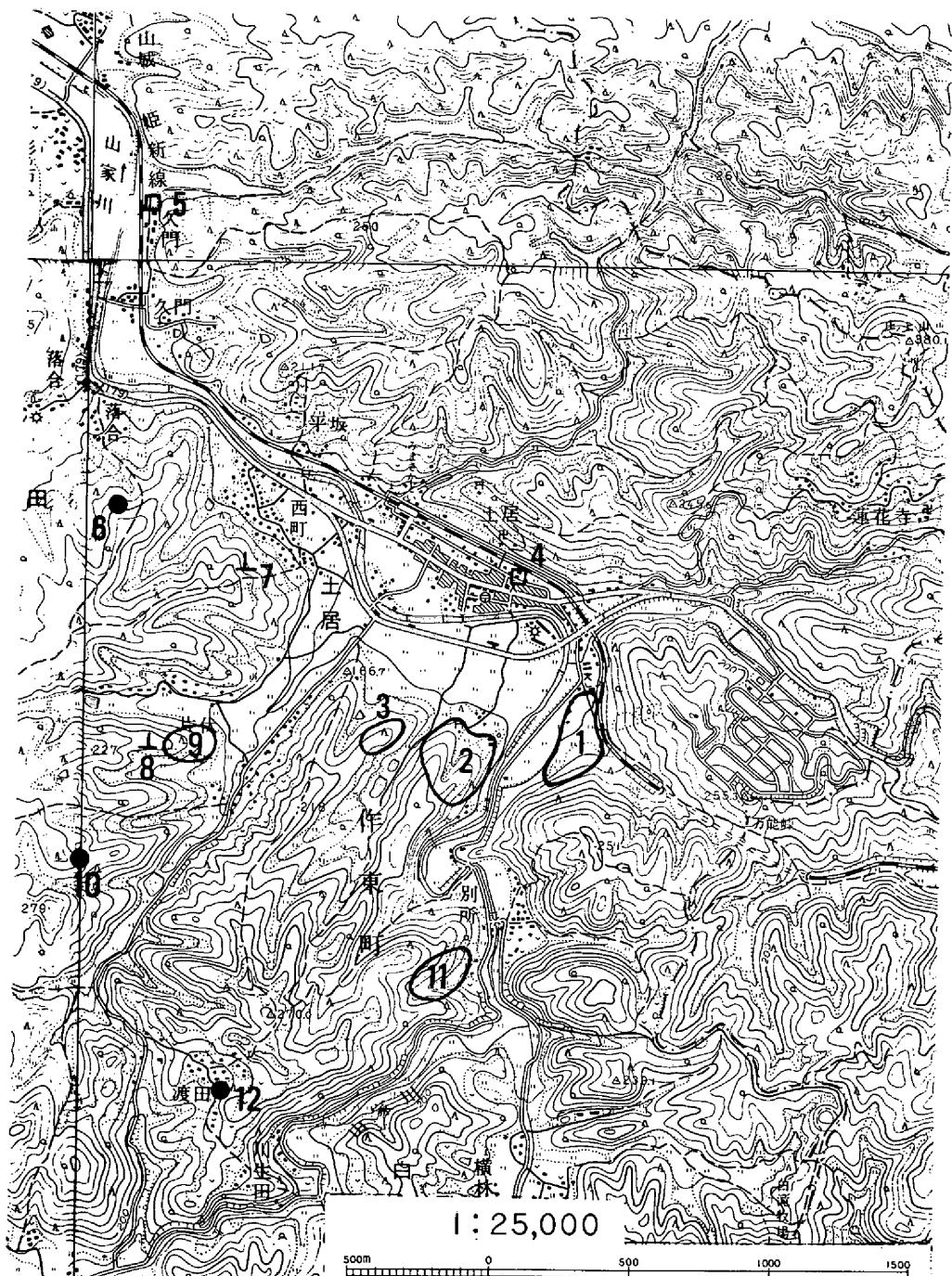
歴史時代で特に注目される遺跡として寺院址、官衙そして古道があげられる。本町には奈良時代前期の寺院址が4か所存在し、姫路から米子（出雲往来）、鳥取（因幡往来）に通ずる分岐点として交通の要衝であった江見には江見廃寺、吉野川と山家川の合流地点から約1.5km上流に竹田廃寺、さらに約1kmの位置に土居廃寺がある。このルートは江見から山家川沿いに溯れば万能峠を越えて佐用郡上月町に至るのである。また、土居から福山、河会へ、あるいは八塔寺へ抜けるルートがある。

江見廃寺から約4km程の吉野川上流に大海廃寺がある。ここからは作東町五名で東に進み、鉱で北に進むと上月町に至るルートと大原町中町から佐用町上石井に出て、佐用川沿いに佐用町



第1図 遺跡位置図

陣山北山麓遺跡



- | | | | |
|------------|---------|--------|----------|
| 1. 陣山北山麓遺跡 | 4. 土居廃寺 | 7. 墳墓 | 10. 古墳 |
| 2. 榆原遺跡 | 5. 竹田廃寺 | 8. 墳墓 | 11. 散布地 |
| 3. 春日山遺跡 | 6. 古墳 | 9. 日枝宮 | 12. 渡田1号 |

第2図 周辺遺跡分布図

陣山北山麓遺跡

へ至るルートも播磨へ通じるのである。これに対して吉野川を溯れば大原町、西粟倉村を通り坂根から志戸坂峠を越えて因幡国府へ通じるルートがある。さらに後醍醐天皇配流伝説等がみられる江見から杉坂峠越えルートは幕山川沿いに佐用町に至る道路でもあった。このように作東町は隣国への重要な交通の要路であるとともに、現在の交通路がそのまま古代の道路に復原されるのである。

官衙遺跡としては高本遺跡がある。2度にわたる発掘調査によって政庁周囲の建物遺構を検出しており、英田郡衙の可能性をますます強くさせている。

また、『靈異記』にもみられるように本地方が鉄の生産地として記載されていることからみて、鉄関係の遺跡が確認されることが予想される。

このように陣山北山麓遺跡が所在する作東町は歴史時代に特徴のある重要な遺跡が存在し、美作国東部において極めて大切な位置を占めていたと考えられるのである。

註1

井上弘、山崎康平、岡田博『高本遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 8 岡山県教育委員会 1975年

昭和59年度に圃場整備事業に伴って発掘調査を実施。報告書は昭和59年度に刊行。



第3図 万能丸と陣山北山麓遺跡（北西から）

第2章 調査の経緯

陣山北山麓遺跡は弥生時代から中世の複合遺跡である。

土居廃寺、竹田廃寺周辺に「土地改良事業」の計画があることを昭和58年に作東町教育委員会から連絡を受けたため、県文化課、町役場、町教育委員会の三者で現地踏査を行い、工事範囲、内容等についての協議を行った。その結果、本遺跡は土地改良事業の計画範囲内であるため早急に遺跡の規模、性格等を確認し、遺跡の保護、保存対策を講じる必要性が生じたため、県教育委員会では昭和59年度国庫補助を受けて発掘調査を実施することとなった。

発掘調査は岡山県文化財保護審議会専門委員の指導、助言を得て岡山県古代吉備文化財センターが昭和59年11月7日から昭和60年2月28日まで実施した。調査にあたっては作東町役場、同町教育委員会をはじめ地権者等関係各位には多大の御協力を得た。また、発掘作業に従事していただいた地元有志の方々にも協力を得た。記して厚く御礼申し上げます。

調査体制

専門委員

鎌木義昌（岡山理科大学教授、岡山県文化財保護審議会委員）

近藤義郎（岡山大学教授、岡山県文化財保護審議会委員）

水内昌康（岡山県文化財保護審議会委員）

岡山県古代吉備文化財センター

所長 松元昭憲 次長 橋本泰夫 総務課長 佐々木清 調査課長 河本 清

文化財保護主査 松本和男（調査担当）

日誌抄

昭和59年

10月30日 発掘器材の搬入

T-7～10の発掘。

11月7日 トレンチ設定作業。T-1・2の発掘。

町教委（谷口氏）の来跡。

11月13日 遺跡全景、調査風景の写真撮影。

T-5・9・10の発掘。T-11の草刈り。

8日 T-2～5の発掘。

14日 T-11・12の発掘。トレンチの設定。

9日 T-5～7の発掘。

15日 遺物の整理。

10日 T-7・8の発掘。

19日 T-13～15の発掘。

12日 トレンチ設定作業。T-10の草刈り。

20日 T-15～17の発掘。

陣山北山麓遺跡



第4図 遺跡周辺地形図 ($S = \frac{1}{2,500}$)

陣 山 北 山 蔓 遺 跡

- 11月21日 T-15・17~19の発掘。
- 22日 T-18~20の発掘。
- 27日 T-20の発掘。
- 28日 T-20・21の発掘。トレンチの設定。
- 12月 3日 T-2・21の発掘。
- 4日 T-1・2・16の断面写真撮影。T-21~23の発掘。
- 5日 T-22~24の発掘。T-1~3の断面実測。
- 6日 T-6~9の断面写真撮影と実測。
T-18の遺構検出。
- 7日 T-3・5の発掘。
- 8日 T-4・5の断面写真撮影と実測作業。
- 10日 T-10~15の断面写真撮影と実測。
T-6の埋めもどし作業。
- 11日 遺物洗い。図面整理。
- 12日 T-17の断面写真撮影と実測。T-1・8の埋めもどし。
- 13日 T-25・26の発掘。T-20の柱穴掘り下げ。T-19の平、断面写真撮影と実測作業。
- 14日 T-27の発掘。T-12の埋めもどし。
- 15日 T-27の発掘。T-21の平、断面写真撮影。T-13・14の埋めもどし。
- 17日 T-27の断面実測。T-25・27の埋めもどし。
- 18日 図面整理
- 19日 T-28の発掘。T-20・21・26の断面実測。T-23の柱穴掘り下げ。T-26の埋めもどし。
- 20日 T-20・21・23・24・26の平、断面実測とレベリング。T-28の発掘。
- 12月21日 T-18の遺構発掘。T-28の断面写真撮影と実測。T-5・24の埋めもどし。
- 24日 T-22の遺構発掘。T-7・9・19の埋めもどし
- 25日 T-18・22の遺構発掘。T-22の平、断面写真撮影。T-20・23の埋めもどし。
- 26日 T-18の遺構発掘と写真撮影。T-20・21の埋めもどし。
- 27日 T-18の平、断面実測とレベリング。
危険防止柵の設置。発掘器材の洗浄。
- 昭和60年
- 1月 8日 T-18の排水作業。T-10・11の埋めもどし。文化庁河原主任調査官、岡山県文化財保護審議委員の来跡。
- 9日 T-22の壁内遺物取り上げ。
T-11・18・22の埋めもどし。
- 10日 T-4・18・22の埋めもどし。
- 11日 T-15・16の埋めもどし。
- 12日 T-3の埋めもどし。レベル高の移動。
- 16日 T-2の埋めもどし。
- 17日 T-29・30の発掘、T-17の埋めもどし。
- 18日 T-29・30の発掘。
- 19日 T-29・31の発掘。
- 21日 T-32・33の発掘。
T-29・30の断面実測と写真撮影。
- 22日 T-32の住居址発掘、写真撮影及び平、断面実測。T-31・33の断面写真撮影と実測。
- 23日 T-31~33の埋めもどし。
- 24日 発掘器材の洗浄と撤収。
- 25~2月 28日 調査概報の作成。

第3章 発掘調査の概要

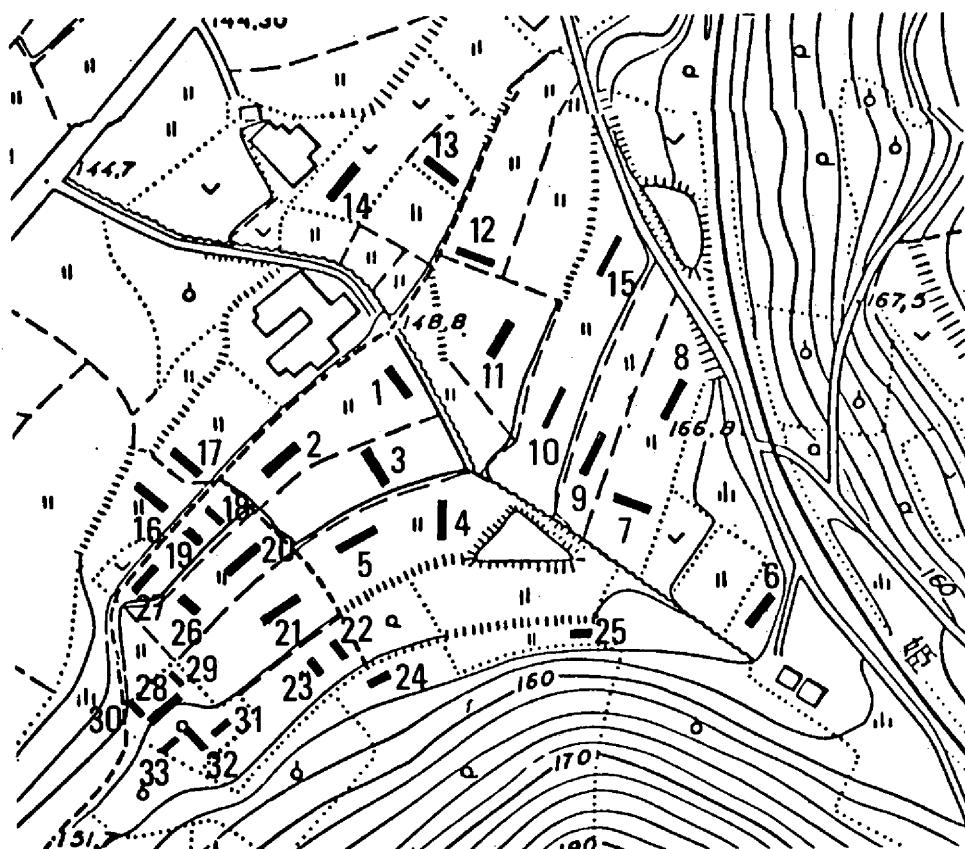
トレンチ調査の概要

発掘調査は圃場整備を計画している範囲内に限定されているため、現地踏査を行い、土器片の散布が認められた通称陣山（標高255m）の山麓北側一帯を調査対象地区とした。この地区は北に面した緩斜面と南に面した緩斜面があり、その間には谷水田が存在する。

発掘調査は $2 \times 10\text{m}$ 、 $2 \times 5\text{m}$ を基本として調査可能な地点に33ヶ所設定して実施した。検出した遺構は全て完掘することを原則とし、遺構を検出できない場合は基盤層ないし自然堆積を確認した。

その結果、遺構が全く存在しない地区、包含層だけの地区、削平されてしまっているが遺構が存在する地区、遺構が完全に残されている地区などに細別することができる。

ここでは、包含層と遺構検出が行われたトレンチの代表的なものの概要を記したい。



第5図 トレンチ位置図

陣 山 北 山 麓 遺 跡

T-4 (第6図)

調査区のほぼ中央部に位置し、北に傾斜する水田に設定したトレンチである。この地点より南側は急激に高くなった畑地、原野が認められる。表土面から基盤層までは45~90cmを測り、北から南に傾斜する旧地形を呈していた。断面観察では4層に区分される水田造成層が認められたが、遺構は存在しなかった。

出土遺物としては弥生式土器、須恵器、備前焼などがあるが、いづれも第3層の茶褐色土層から出土している。なお、トレンチの北側寄りは地山面が一段と高くなっているため遺構の存在が予想される地区である。

T-5 (第6図)

T-4の西側に設定したトレンチである。表土面から基盤層までは約12cmを測り、ほぼ水平の堆積層が3層確認できたのみで、遺構は存在しなかった。

出土遺物としては第3層の茶褐色粘質土層から古墳時代後期の須恵器、糸切り底の須恵質椀、土師器、中世の土鍋、青磁片がある。

T-18 (第6図)

調査区のほぼ西端近くに位置し、この地点から北側は急激に低くなり、北へ約150m程で旧河道に達する。表土面から基盤層までは約70~100cmを測り、北西に傾斜する旧地形を呈している。断面観察では5層に区分される。2~4層は水田造成土層であり、5層は旧表土層である。確認された遺構は柱穴だけであるが、いづれも基盤層で検出されている。これらの遺構は出土遺物からみて弥生時代後期前半のものと推察される。出土遺物としては弥生式土器、備前焼がある。なお、T-16、17の調査状況からみてこの地区が本遺跡の北限と考えられる。

T-20 (第6図)

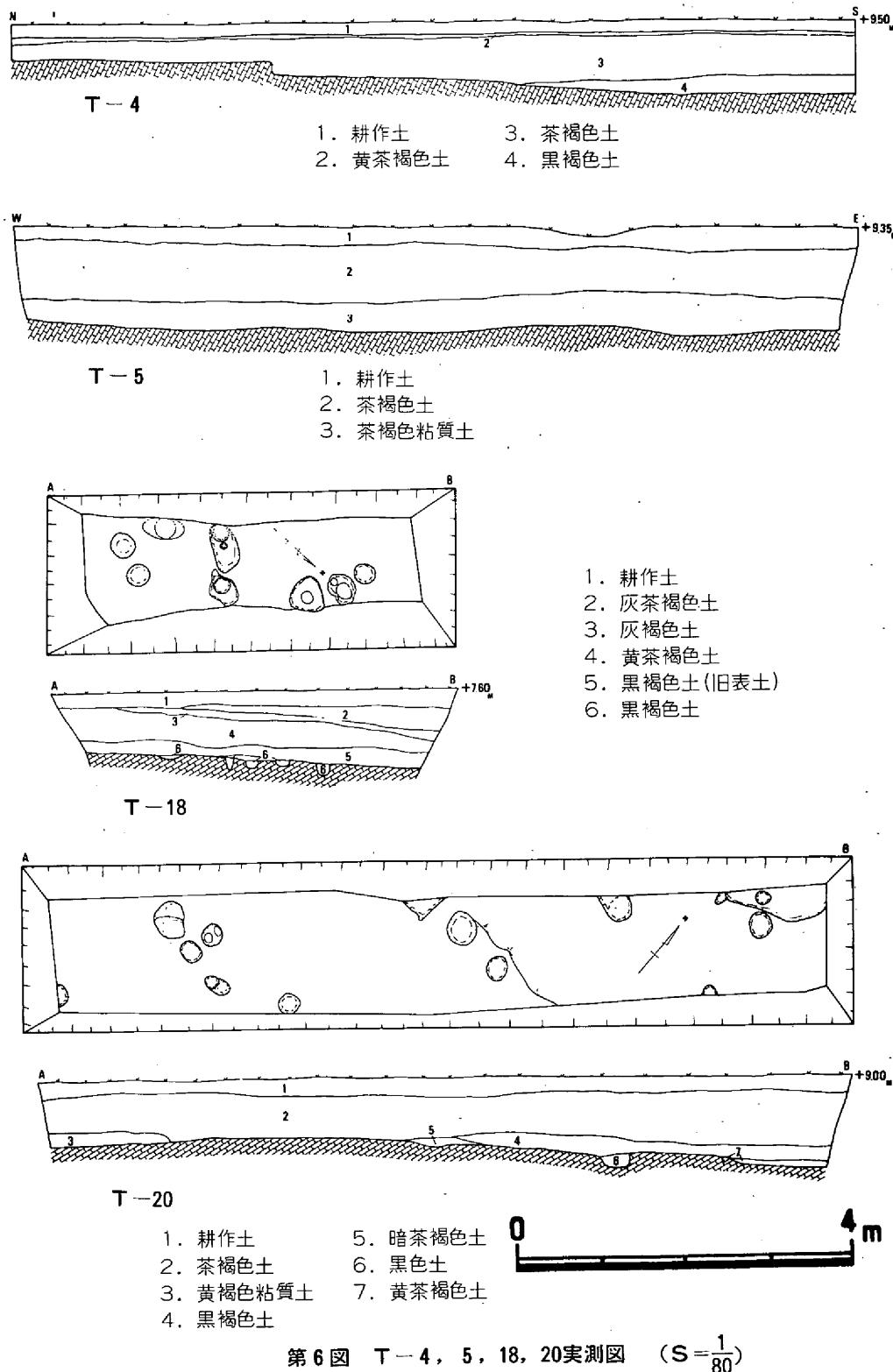
T-18の南で、約150m程高い階段状の旧畑地に設定したトレンチである。表土面から基盤層までは約70~110cmを測り、南西から北東に傾斜する旧地形を呈している。断面観察では7層に区分されるが、第2、3層は水田造成土層、第4層は包含層である。遺構は基盤層で検出されたが、いづれも柱穴だけである。柱穴内から出土遺物がないため時期は不明である。

出土遺物としては弥生式土器、土師器、底部に糸切り痕のある須恵質皿、青磁片などがある。

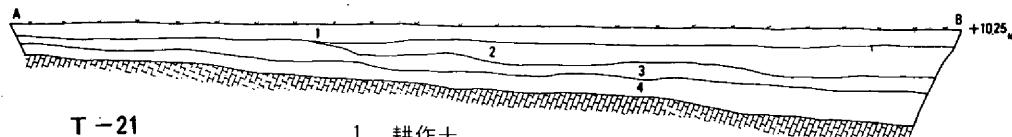
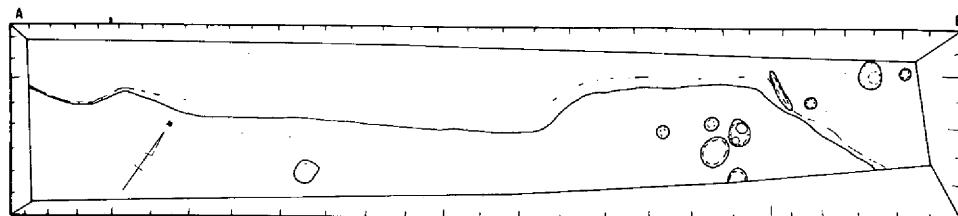
T-21 (第7図)

調査地区のほぼ南西に位置し、T-20と22の中間に設定したトレンチである。表土面から基

陣山北山麓遺跡

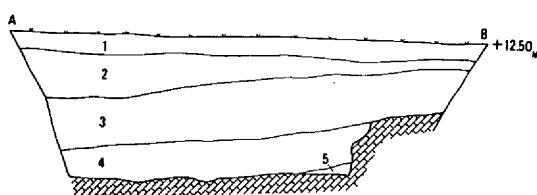
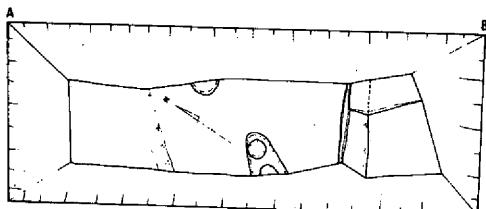


陣山北山麓遺跡



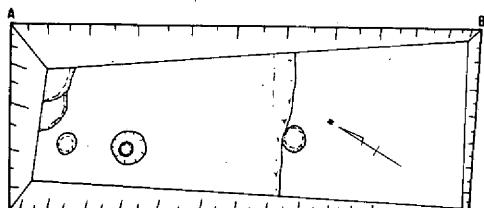
T-21

1. 耕作土
2. 黃茶褐色土
3. 黑褐色土
4. 暗茶褐色土

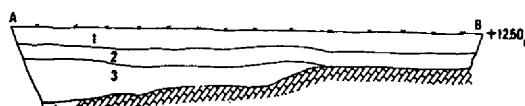


1. 耕作土
2. 灰茶褐色土
3. 茶褐色土
4. 暗茶褐色土
5. 暗褐色粘質土

T-22



1. 耕作土
2. 黃茶褐色土
3. 暗茶褐色土
4. 暗褐色土



T-23



第7図 T-21, 22, 23実測図 ($S = \frac{1}{80}$)

陣山北山麓遺跡

盤層までは約30~100cmを測り、南西から北東に傾斜する旧地形を呈している。断面観察では4層に区分されたが、第2~4層までは水田造成土層であった。遺構は基盤層で検出されたが、いづれも柱穴だけであった。柱穴内から出土遺物がないため時期は不明である。

出土遺物としては弥生式土器、須恵器が水田造成土層内から検出されている。

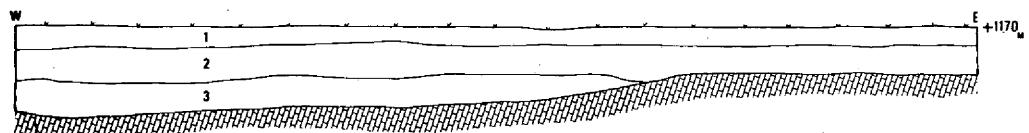
T-22(第7図)

調査地区のほぼ南端に設定されたトレンチである。通称陣山の北側山麓に位置し、現状は畠地である。表土面から基盤層までは約70cm程である。旧地形は南東から北西に傾斜している。断面観察では5層に区分されたが、第2、3層は水田造成土層であった。遺構は基盤層で住居址が検出された。平面プランは不明であるが、床面からの壁高は約50cm程あり保存状態は極めて良好である。調査範囲内には浅い凹みと深い柱穴が2本検出されている。遺物は床面で出土していないため決定できないが、上層から弥生時代中期末、後期前半の遺物が出土していることから、後期前半の遺構と推察される。

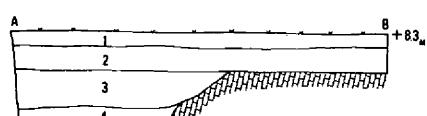
その他の出土遺物としては土師器、須恵器、古銭(開元通宝)が水田造成土層内から出土している。

T-23(第7図)

T-22の西隣りに設定したトレンチである。T-22では表土面からマイナス約70cmのところ



- 1. 耕作土
- 2. 黄褐色粘質土
- 3. 黒褐色土(旧表土)



- 1. 耕作土
- 2. 茶褐色土
- 3. 茶褐色土
- 4. 暗茶褐色土
- 5. 黒褐色土



第8図 T-28, 32実測図 ($S = \frac{1}{80}$)

第9図 T-32内住居地出土遺物 ($S = \frac{1}{4}$)

陣 山 北 山 瓢 遺 跡

で住居址を確認したため、このトレンチでは旧地形と遺構密度がどのようにになっているかを確認するために設定した補助トレンチである。

表土面から基盤層までは約40～100cmを測り、旧地形は南東から北西に傾斜する。断面観察では4層に区分されるが、2・3層は水田造成土層である。遺構は柱穴と土壤状のものが基盤層で検出された。時期は出土遺物がないため不明である。出土遺物としては弥生式土器、須恵器、土師器、勝間田焼、中世の土鍋等がある。

T-28（第8図）

調査区の西端に設定されたトレンチである。現状は竹林となっているが、以前は畠地であった地区である。表土面から基盤層までは約50～100cmを測り、南東から北西に旧地形は傾斜している。断面観察では3層に区分されたが、第2層は造成土、第3層は旧表土である。遺構は検出されなかったが、第3層で弥生時代中期末葉の土器が出土している。

T-32（第8・9図）

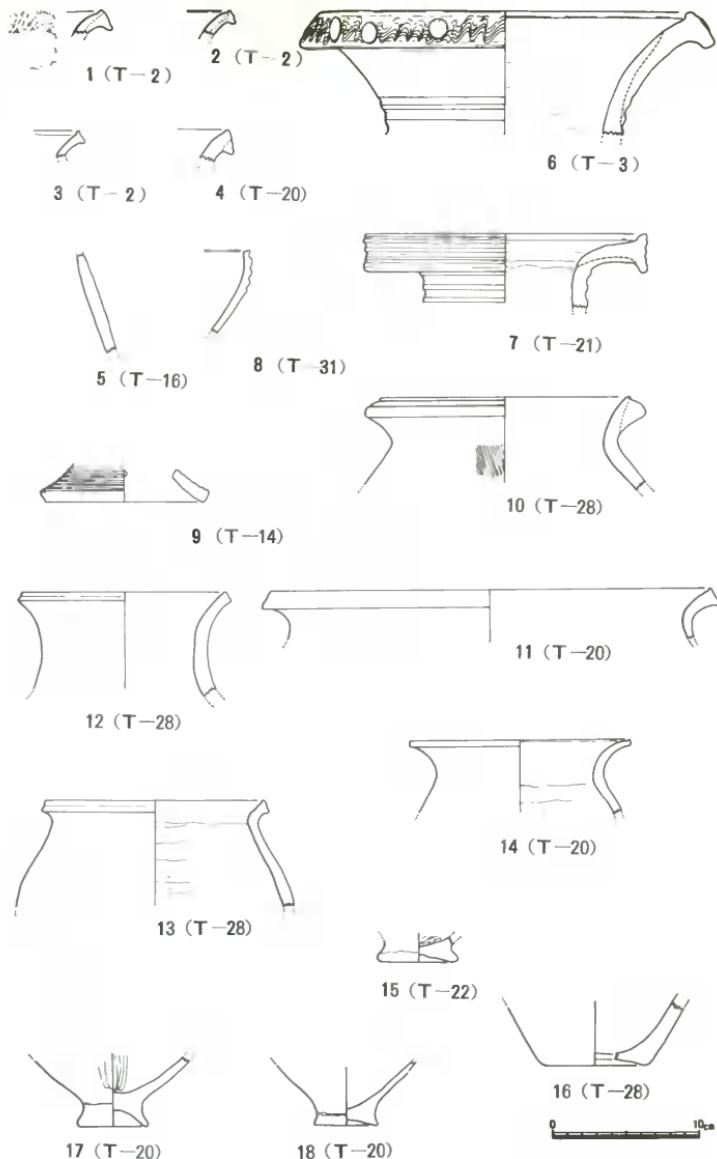
T-28の南で、一段高い竹林に設定したトレンチである。表土面から基盤層までは約40cmを測る。断面観察では5層に区分されるが、3～5層は竪穴住居址内の埋土層である。遺構は住居址が基盤層で検出されている。住居址の一部しか検出していなかったため正確な平面プランはわからないが、円形プランと推察される住居址である。床面から壁高は約60cmあり、周囲には幅約30cm、深さ約20cmの壁帶溝がめぐっている。調査範囲内には柱穴がない。遺物は床面近くで弥生時代中期末葉の土器（第9図）が出土しているため、これらの遺物からみて弥生時代中期末の住居址と考えられる。

遺 物（第10～12図）

遺物は耕作土、造成土、旧表土、遺構内と各層から出土しているが、その大部分は造成土層内からである。特に遺物が多く出土したトレンチはT-2～5、18～22・28・29・32である。T-2～5、20～22では水田造成土層内から、T-18では遺構内から、T-28・29・32では旧表土層で遺物を出土し、各地点で出土状況が異なる。ここでは、発掘調査によって出土した代表的な遺物を一括して説明を加えることにする。

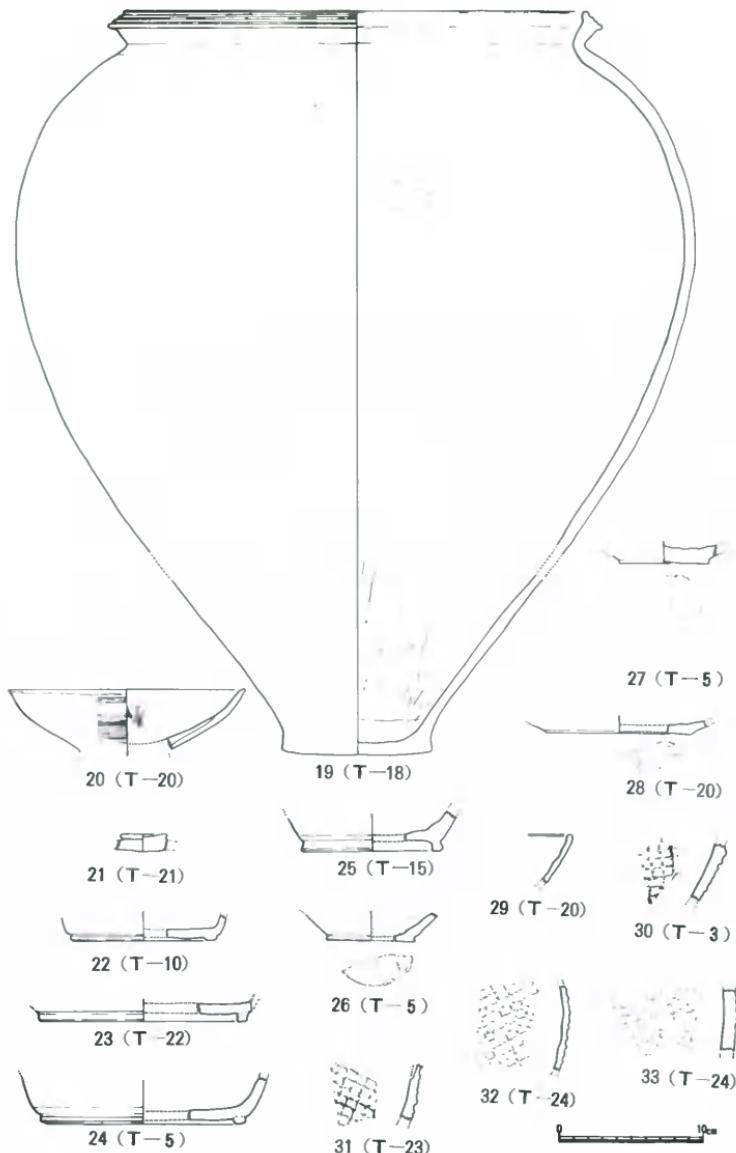
今回出土した遺物は弥生時代中期中葉頃から室町時代と考えられるものである。（第10～12図）1～19は弥生時代の土器である。1～10・19は弥生中期、11～18は弥生後期である。中期の土器としては甌（1～4・10・19）、壺（5～7）、高杯（8・9）がある。5は胴部破片で、表面には8条の櫛描波状文などが施文されている。6はT-3から出土した壺形土器であ

陣 山 北 山 龍 遺 跡

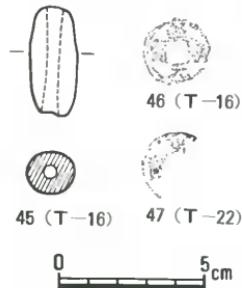


第10図 トレンチ内出土遺物 ($S = \frac{1}{4}$)

陣 山 北 山 龍 遺 跡



第11図 トレンチ内出土遺物 ($S = \frac{1}{4}$)

第12図 トレンチ内出土遺物 ($S = \frac{1}{2}, \frac{1}{4}$) 44 (T-18)

る。口縁端部外面には櫛描波状文がめぐり、その上に円形貼文がみとめられる。頸部には浅い凹線が3条みられる。19は完全に復元できる瓊形土器である。口径31.3cm、底径10.3cm、器高約54cmを測る。口縁端部には浅い凹線が3条みとめられる。器壁外面は刷毛後、ヘラミガキされ、内面には胴部約 $\frac{2}{3}$ までヘラケズリが施されているが、上部は指ナデ整形である。なお、外表面は黄褐色を呈し、粗砂を含むが燃成は良好である。後期の土器としては壺(11・13・14・16)、鉢(15・17・18)、壺(12)がある。20は古墳時代の土師器(高杯)、21~25が奈良時代の須恵器(高台付椀)、26~29が平安時代の須恵質椀、30~40は鎌倉時代のものである。30~33は勝間田焼、34は羽釜(土師器)、35~40は土鍋である。41~43は輸入陶磁器である。いづれも青磁である。44は備前焼擂鉢である。内面に7条のカキメが認められる。45は土錘。46は熙寧元宝、47は開元通宝である。いづれも北宋銭である。

第4章 まとめ

陣山北山麓遺跡の立地する作東町は出雲往来、因幡往来の交通の要衝であるとともに、奈良時代以降は『盡異記』にもみられるように鉄の生産地として著名な地域でもあった。さらに、奈良時代前期の寺院址が1町に4ヶ所（江見廃寺、大海廃寺、竹田廃寺、土居廃寺）も集中すること^(註1)、英田郡衙と推察される官衙跡（高本遺跡）が確認されたことや古道がほぼ完全に復元された歴史的環境をもつ地域なのである。このような歴史的環境を充分に配慮しながら、圃場整備地区内の確認調査を実施した。

調査対象地域は山麓斜面一帯であるため、遺跡地図と分布調査によってトレンチ位置を設定した。トレンチは合計33ヶ所設定された。その結果、計画予定地内には約3,000m²におよぶ遺跡の存在が明らかにされたが、（第13図）計画地外にも遺跡はさらに拡大されるものと思われる。ここでは確認調査の結果をもとに判明した各トレンチについて説明を加え、まとめとしたい。

トレンチ調査の結果、遺構が存在したもの、包含層だけのもの、遺構が全く存在しないものに大別される。遺構が存在することを確認したのは、T-18、20~23、32の6ヶ所である。（第6~8図）これらのトレンチはいづれも陣山の北側山麓に位置し、遺跡範囲を明瞭に物語る。検出された遺構は竪穴住居址と柱穴である。竪穴住居址は弥生中期末と後期前半のものが確認されたため、ほぼこの時期から山麓一帯に集落址が形成されたと推察される。包含層だけであることを確認したのは、T-2~5、18~22、28、29、32の12ヶ所である。しかしながら、本遺跡の包含層は決してプライマリーなものではなく、水田もしくは畠地開墾、造成によって形成された土層内に遺物が含まれているため呼称したものである。したがって、同一層内に各時代の遺物が混在した状況を呈している。遺構、包含層が全く存在しないを確認したのはT-1を含め、主に姫新線沿いである。谷中央部はT-6~10で確認したが、いづれも湿地帯であり、厚い造成土の堆積層が確認されたのみで、遺構は全く存在しなかった。

今回の調査で弥生時代の集落址を中心として約3,000m²の遺跡をほぼ確認できた。しかし、奈良時代を中心とする遺跡は把握することができなかった。恐らく、地形的にも位置的にも主要な遺構は存在しない地域であったと推察される。

今後は、この調査結果にもとづいて協議が行われるが、今後の協議結果と町当局の文化財への対応が注目される。

註

(註1) 4ヶ所とも軒丸瓦、軒平瓦が出土しているが、かならずしも寺院址とは断定できないものも存在するが、ここではとりあえず全て寺院址としておく。

陣 山 北 山 麓 遺 跡



第13図 圃場整備予定地区内における遺跡範囲 ($S = \frac{1}{2,500}$)

陣山北山麓遺跡

図版 1



(1) 陣山北山麓遺跡遠景（北西から）



(2) 陣山北山麓遺跡近景（東から）

陣 山 北 山 龍 遺 跡

図版 2



(1) 調査事務所と旧出雲街道遠景



(2) 発掘調査風景（北から）

陣 山 北 山 龍 遺 跡

図版 3



(1) T-16 埋めもどし作業風景（東から）



(2) T-4 土層断面（北東から）

陣山北山麓遺跡

図版4

(1)

T-18
遺構全景（南東から）



(2) T-18土層断面（北東から）



陣 山 北 山 龜 遺 跡

図版 5



(1) T-20全景 (南から)



(2) T-21全景 (北から)

陣 山 北 山 龍 遺 跡

図版 6

T—22
遺構全景（北西から）



(2) T—22土層断面（西から）

陣 山 北 山 篦 遺 跡

図版 7



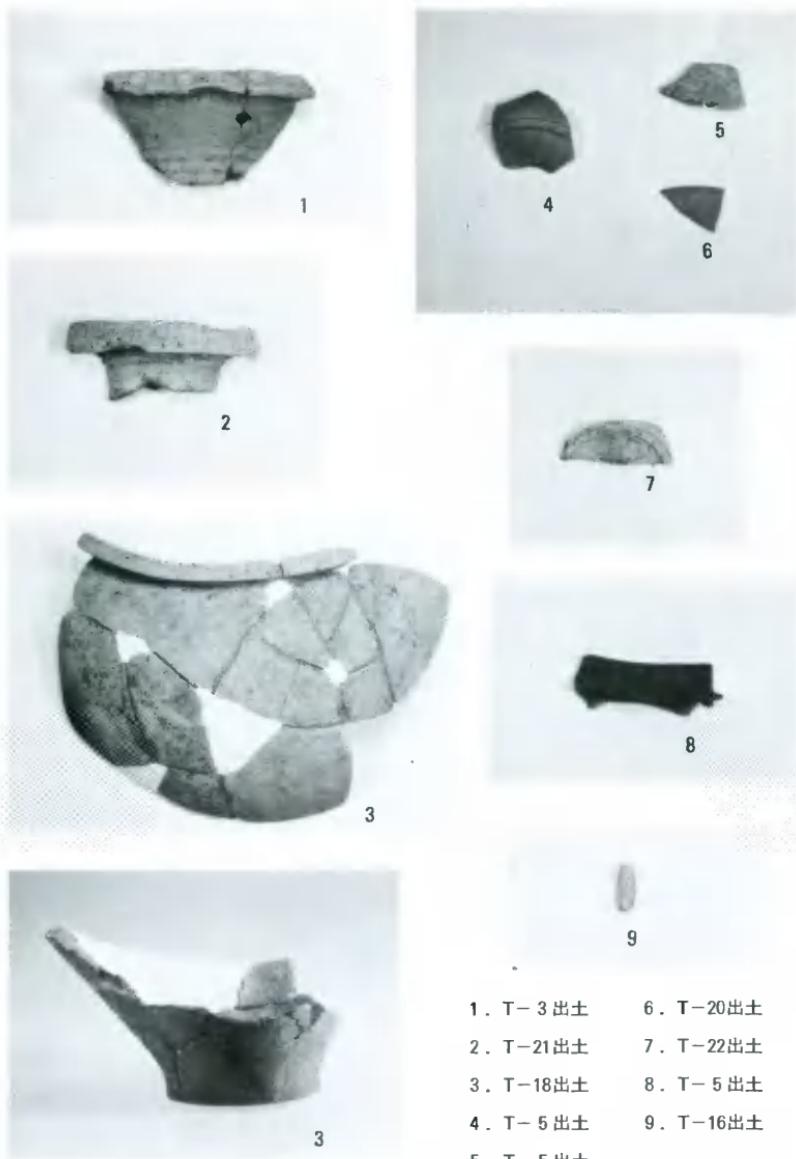
(1) T-23全景 (西から)



(2) T-32全景 (北西から)

陣山北山麓遺跡

圖版 8



- | | |
|-----------|-----------|
| 1. T-3出土 | 6. T-20出土 |
| 2. T-21出土 | 7. T-22出土 |
| 3. T-18出土 | 8. T-5出土 |
| 4. T-5出土 | 9. T-16出土 |
| 5. T-5出土 | |

おく ざこ
奥 迫 遺 跡

例　　言

1. 本書は岡山県教育委員会が昭和59年度国庫補助を受けて実施した「奥迫遺跡」の発掘調査の概要報告書である。
2. 遺跡は小田郡矢掛町矢掛・東三成に所在する。
3. 発掘調査は文化課職員が担当し、昭和59年8月（東土井）を光永真一、昭和59年10月（東土井）、11・12月（奥迫ほか）までを高畠知功が実施した。
4. 本書の執筆・編集は高畠が行った。報告書作成にあたっては竹本聰美（土器実測）、山田雅子（石器実測）、岡本香織、前原節子の協力を得た。遺物、記録類は岡山県古代吉備文化財センターに保管している。
5. 本書に使用したレベルの数値は海拔高である。方位は第1図から第7図までが真北であり、他は磁北である。
6. 本書第2図に使用した地形図は建設省国土地理院発行の25,000分の1地形図（矢掛）を複製したものである。

目 次

序

例 言

目 次

第1章 地理的・歴史的環境	37
第2章 調査の経緯	39
第3章 発掘調査の概要	42
第1節 遺跡の位置	42
第2節 調査の方法と概要	42
第4章 まとめ	71

図 目 次

第1図 遺跡位置図	37	第21図 東土井T-40 (1/60)	51
第2図 周辺遺跡分布図 (1/25,000)	38	第22図 東土井T-44 (1/60)	51
第3図 矢掛・東三成地区トレーニング位置図	41	第23図 奥迫T-53 (1/60)	52
第4図 奥迫・西土井・東土井調査区 (1/5,000)	43	第24図 西土井T-67 (1/60)	52
第5図 赤岸・八反田・木舟・尾中 ・大里調査区 (1/5,000)	44	第25図 西土井T-69 (1/60)	52
第6図 横ノ本・門田・鎧物師・沖ノ後 ・窪田調査区 (1/5,000)	45	第26図 西土井T-70 (1/60)	53
第7図 行部・尾土中・小源治調査区 (1/5,000)	46	第27図 木舟T-77 (1/60)	53
第8図 東土井T-1 (1/60)	47	第28図 木舟T-78 (1/60)	53
第9図 東土井T-5 (1/60)	47	第29図 木舟T-78' (1/60)	54
第10図 東土井T-9 (1/60)	47	第30図 宮ノ前T-78" (1/60)	54
第11図 東土井T-13 (1/60)	48	第31図 尾中T-78''' (1/60)	54
第12図 東土井T-14 (1/60)	48	第32図 沖ノ後T-82 (1/60)	55
第13図 東土井T-16 (1/60)	48	第33図 窪田T-85 (1/60)	55
第14図 東土井T-18 (1/60)	49	第34図 窪田T-88 (1/60)	55
第15図 東土井T-21 (1/60)	49	第35図 門田T-93 (1/60)	56
第16図 東土井T-4 (1/60)	49	第36図 横ノ本T-97 (1/60)	56
第17図 東土井T-11 (1/60)	49	第37図 谷田T-100 (1/60)	56
第18図 東土井T-17 (1/60)	50	第38図 大里T-102 (1/60)	56
第19図 東土井T-27 (1/60)	50	第39図 大里T-103 (1/60)	57
第20図 東土井T-38 (1/60)	50	第40図 宮ノ前T-104 (1/60)	57
		第41図 宮ノ前T-104' (1/60)	57
		第42図 赤岸T-105 (1/60)	58
		第43図 赤岸T-105' (1/60)	58
		第44図 尾中T-105" (1/60)	58

第45図 尾 中T-105'' (1/60)	59	第57図 赤 岸T-117 (1/60)	63
第46図 尾 中T-106 (1/60)	59	第58図 八反田T-117' (1/60)	63
第47図 尾 中T-106' (1/60)	59	第59図 八反田T-117'' (1/60)	63
第48図 八反田T-107 (1/60)	60	第60図 小源治T-119 (1/60)	64
第49図 八反田T-107' (1/60)	60	第61図 小源治T-120 (1/60)	64
第50図 尾 中T-108 (1/60)	60	第62図 大 窪T-122 (1/60)	64
第51図 尾 中T-108' (1/60)	61	第63図 上 原T-125 (1/60)	65
第52図 八反田T-110 (1/60)	61	第64図 上 原T-126 (1/60)	65
第53図 尾土井T-111 (1/60)	61	第65図 市 場T-127 (1/60)	65
第54図 尾土井T-112 (1/60)	62	第66図 出土遺物 (1)	68
第55図 行 部T-115 (1/60)	62	第67図 出土遺物 (2)	69
第56図 尾 中T-116 (1/60)	62	第68図 出土遺物 (3)	70

図 版 目 次

図版 1	1 矢掛・東三成地区圃場整備予定農地 航空写真(南より)	6 奥 迫T-62 (東から) 7 西土井T-66 (南西から)
図版 2	1 東三成の条里 (南から) 2 茶臼山城の壕跡 (北東から)	8 西土井T-67 (南東から)
図版 3	1 東三成全景 (南東から) 2 小谷川河道痕跡 (北から)	図版 7 1 西土井T-69 (西から) 2 木 舟T-78' (南西から) 3 宮ノ前T-78'' (北東から)
図版 4	1 東土井遺跡 (北から) 2 奥迫遺跡 (南西から)	4 沖ノ後T-82 (南西から) 5 窪 田T-85 (東から)
図版 5	1 東土井T-1 (南から) 2 東土井T-5 (南西から) 3 東土井T-16 (西から) 4 東土井T-18 (西から) 5 東土井T-27 (南から) 6 東土井T-32 (南西から) 7 東土井T-34 (西から) 8 東土井T-39 (北から)	6 窪 田T-88 (東から) 7 門 田T-93 (南西から) 8 谷 田T-100 (北西から)
図版 6	1 東土井T-46 (北から) 2 奥 迫T-51 (南東から) 3 奥 迫T-52 (南東から) 4 奥 迫T-53 (東から) 5 奥 迫T-53 (北東から)	図版 8 1 赤 岸T-105 (東から) 2 赤 岸T-105' (北西から) 3 尾 中T-105'' (東から) 4 尾 中T-105''' (南東から) 5 尾土井T-112 (北西から)
		6 大 窪T-122 (南東から) 7 上 原T-125 (東から) 8 市 場T-127 (北西から)
		図版 9 1 出土遺物 (1) 図版10 2 出土遺物 (2)

表 目 次

表- 1	トレンチ調査一覧表.....	66
------	----------------	----

第1章 地理的・歴史的環境

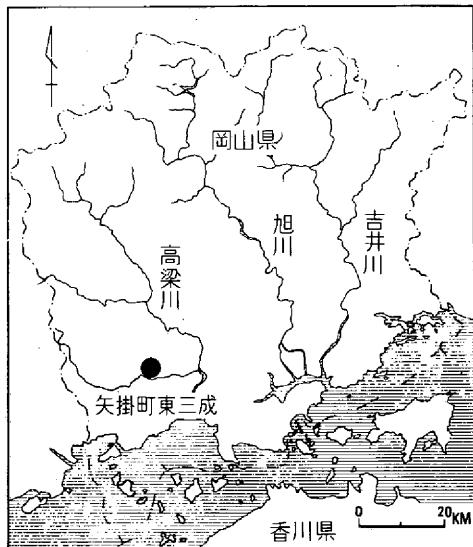
遺跡の所在する小田郡矢掛町は岡山県の南西部に位置し、近世宿駅の本陣が置かれた矢掛を中心として、東西に幅約11.5kmで北に狭く、南に広い形状を呈しており、4市3町に接している。東は鷲峯山を境として真備町と総社市に接し、西は井原市、南は阿部山・遙照山・弥高山を境として浅口郡鴨方町・金光町、倉敷市、笠岡市、北は竜王山で小田郡美星町と接している。

これらの山塊より流出する大渡川、大谷川、道々川、江良川等の支流をまとめて町内ほぼ中央部を東西に貫流する小田川は、矢掛を「へ」の字形の屈曲点として東流し高梁川にそそぐ。

小田川を中心とする沖積作用によってできた平野と、各支流の扇状堆積による低地が小田、浅海、本掘、西川面、東川面、矢掛、里山田、中、東三成、横谷等に存在し、現在もこれらの

低地を多くの人々が生活の場として利用、活用している。

矢掛町内において、現在知られている最も古いものは奥迫あるいは若林から出土したと伝えられている弥生時代中期の中でも古い様相をもつ壺形土器がある。弥生時代中期になると、矢掛若林・奥迫・宮下、東三成土井、里山田、中白江、江良、浅海毎戸等において土器・石器の類が認められる。弥生時代後期では遺跡数が増加をしており、集落・墓地等の遺構の存在が明確になり、遺物の量も多く認められる。古墳時代では視覚的にとらえることの可能な古墳（墓）



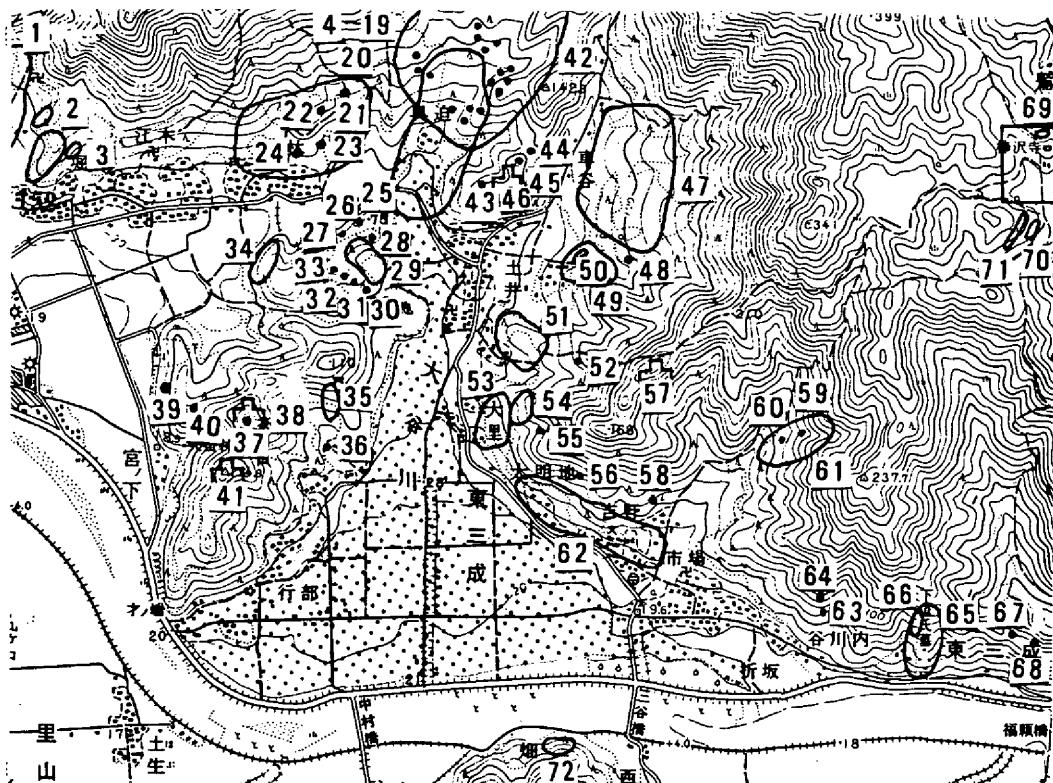
第1図 遺跡位置図

が圧倒的である。その分布は約60ヶ所におよび、なかでも横穴式石室を内部主体とする後期古墳約37ヶ所が最も多い、総数約160基を数える。

古代小田郡の範囲として、「和名類聚抄」によれば備中国小田郡として、實成（美奈利）、みなり
はやし 拝慈（波也之）、草壁（久佐加倍）、小田（乎多）、甲努（加布乃）、魚緒（伊保須奈）、うま
家（无未也）、出部（伊都部）の八郷より成っている。前述した扇状堆積による平野部がこれらの郷に匹敵する可能性がある。

奈良時代では国指定史跡である下道氏墓所が東三成谷川内に所在する。江戸時代では元録12年（1699）に和銅元年の銘が刻字された吉備真備祖母の銅製骨蔵器が発見されている。

奥迫遺跡



第2図 「周辺遺跡分布図」(1/25,000)

- | | | | |
|---------------|----------------|------------------|----------------|
| 1. 散布地(奈良～中世) | 19. 奥迫14号墳 | 37. 古墳(前方後円墳) | 55. 古墳(横穴式石室) |
| 2. 経塚か | 20. 若林古墳群 | 38. 城址 | 56. 古墳? |
| 3. 散布地(弥生) | 21. ハ1号墳 | 39. 古墳? | 57. 要ガイ山城址 |
| 4. 奥迫1号墳 | 22. ハ2号墳 | 40. 蝶の頭古墳(シスト) | 58. 国勝寺裏古墳 |
| 5. ハ2号墳 | 23. ハ3号墳 | 41. 茶臼山城址 | 59. 的場2号墳 |
| 6. ハ3号墳 | 24. ハ4号墳 | 42. 奥迫古墳群 | 60. 的場1号墳 |
| 7. ハ4号墳 | 25. 中山1号墳 | 43. 古墳(前方後円墳) | 61. 古墳群 |
| 8. ハ5号墳 | 26. ハ2号墳 | 44. 古墳(円墳) | 62. 散布地(古墳～中世) |
| 9. ハ6号墳 | 27. ハ3号墳 | 45. 古墳(シスト) | 63. 谷川地2号墳 |
| 10. ハ6'号墳 | 28. 古墳(横穴式石室) | 46. 城址 | 64. 谷川地1号墳 |
| 11. ハ7号墳 | 29. 散布地(古墳～中世) | 47. 土井遺跡 | 65. 散布地(弥生中期) |
| 12. ハ8号墳 | 30. 中山4号墳 | 48. 古墳? | 66. 吉備氏墓所 |
| 13. ハ8'号墳 | 31. ハ5号墳 | 49. 散布地(須恵器) | 67. 古墳? |
| 14. ハ9号墳 | 32. ハ6号墳 | 50. 中世墓地 | 68. 古墳? |
| 15. ハ10号墳 | 33. ハ7号墳 | 51. 散布地(弥生～古墳) | 69. 中世墓地 |
| 16. ハ11号墳 | 34. 古墳? | 52. 古墳? | 70. 中世墓地 |
| 17. ハ12号墳 | 35. 中世墓地 | 53. 大里散布地(室町～戦国) | 71. 中世墓地 |
| 18. ハ13号墳 | 36. 古墳(横穴式石室) | 54. 中世墓地 | 72. 散布地(弥生) |



昭和59年度圃場農地の確認調査対象部分を表わす

まいど

また、浅海毎戸遺跡では土師器杯身底部に「馬」の字が刻まれており、駿家郷の関連より古代山陽道の駅家の可能性を持つ。

戦国時代には県南西部の要所として拠点的に城跡が認められ、町内には17の城跡が周知されている。とりわけ庄氏一族の主城である猿掛城の本丸は備中南部最大の規模を誇るものである。

うまや

第2章 調査の経緯

昭和58年8月23日付けで井笠地方振興局長より文化財保護法第57条の3にもとづく事例の協議文書が矢掛町教育委員会から岡山県教育委員会へ進達される。

内容は、昭和59年度に矢掛町東三成部分(88.2ha)の区画整理を目的とする県営圃場整備事業を実施するにあたり、農地内に含まれる旧山陽道、条里遺構、東土井遺跡、奥迫遺跡の取扱いについてである。

数回の会議を持ち、岡山県教育委員会は工事施行前に遺跡全体の規模、性格等を明らかにして遺跡の保護・保存を講ずる基礎資料を得るために、昭和59年度国庫補助を受けて発掘調査を実施するに至る。

発掘調査は昭和59年8月1日から60年1月7日まで実施した。調査にあたっては矢掛町教育委員会、矢掛町文化財保護委員、矢掛町産業課をはじめ地権者等関係各位には多大のご協力を得た。また発掘作業にあたっては地元住民の方々にご協力を得た。記して厚くお礼申し上げます。

調査体制

岡山県教育庁文化課

松元昭憲 課長
逸見英邦 課長代理
河本 清 課長補佐
遠藤勇次 主任
松本和男 文化財保護主任
岡田 博
高畠知功
二宮治夫
光永真一 文化財保護主事(調査担当)

岡山県古代吉備文化財センター(昭和59年11月1日開設)

松元昭憲 所長
橋本泰夫 次長
佐々木清 総務課長
河本 清 調査課長
古瀬 宏 主任
遠藤勇次 "
橋原充二 主事
松本和男 文化財保護主査
岡田 博 "
高畠知功 "
二宮治夫 "
光永真一 文化財保護主事

発掘作業員

浅野彌平 稲田清子 江尻勝美 江尻賢二 江尻唯志 岡野 清 川上直一 川上直吉
小塚千代子 田尻 行 田中忠夫 中村楽代 難波忠平 新谷熊一 西田 寿 森脇浅市
森脇恵三郎 山部 馨

日 誌 抄

昭和59年

- 8月 1 日(火) 器材搬入。T-1~2掘り下げ。
2 日(木) T-1~2写真撮影。T-3~5掘り下げ。
3 日(金) T-3~4・6~7写真撮影。T-5~8掘り下げ。
6 日(月) T-5~8~9掘り下げ。
7 日(火) T-5~8~11掘り下げ。T-5~8~9写真撮影。
8 日(水) T-10~11~13写真撮影。T-11~14掘り下
げ。
9 日(木) T-12写真撮影。T-14~16掘り下げ。
10 日(金) T-14~15写真撮影。T-15~18掘り下げ。
13 日(土) T-32~33掘り下げ。
15 日(月) T-32~35掘り下げ。
16 日(火) T-31~33~35掘り下げ。
17 日(水) T-37~40掘り下げ。
18 日(木) T-35~38~43掘り下げ。
19 日(金) T-41~42~46掘り下げ。T-27~40~44実測。
20 日(土) T-34~36掘り下げ。T-27~40柱穴掘り下げ。
T-34写真撮影。
22 日(月) T-27~41~42~47掘り下げ。T-38実測。道
具の整理。
9月 17 日(金) T-17~18掘り下げ。
20 日(月) T-16~18写真撮影。T-18~20掘り下げ。
21 日(火) T-18~20写真撮影。T-21~22掘り下げ。
22 日(水) T-22写真撮影。T-23~24掘り下げ。
24 日(木) T-21~23~24写真撮影。器材撤収。
28 日(木) 各トレーナー平面図作成。
29 日(金) 各トレーナー平面面図作成。
10月 11 日(木) 器材運搬。作業道具小屋を造る。
T-25~27掘り下げ。
12 日(金) T-28~31掘り下げ。
23 日(火) 通年施行地域の発掘調査結果につき、井笠
地方振興局、矢掛町産業課、矢掛町教育委
員会、岡山県教育委員会の四者による協議。
26 日(金) 作物取り上げ後にT-48の立会。
11月 5 日(月) 作業小屋移転。奥迫より調査開始
T-49~52~54~55掘り下げ。
6 日(火) T-52~59掘り下げ。写真撮影。
7 日(水) T-52'~58~60~61~63~65掘り下げ。
8 日(木) T-51~62~66掘り下げ。T-53実測写真撮
影。
9 日(金) 発掘器材運搬。
12 日(月) T-70~77掘り下げ。
13 日(火) 南に下がりながら進行させていた調査を変
更する。昭和60年度圃場整備地域「沖ノ後・
窪田」へ移動。T-79~80掘り下げ。奥迫埋
め戻しを開始する。
14 日(水) T-69~76写真撮影。T-51~52~52'の埋め
戻し。T-80~81掘り下げ。西土井実測。

16 日(金) T-82~87掘り下げ。この地区は湧水が多
い。奥迫埋め戻し。

19 日(月) T-87~92掘り下げ。奥迫・西土井の埋め
戻し。

20 日(火) T-88~93掘り下げ。T-82'掘り下げ。沖
ノ後の埋め戻し開始。

21 日(水) T-92~95掘り下げ。T-93までの写真撮
影。

22 日(木) T-96~100掘り下げ。沖ノ後の埋め戻し。

27 日(火) T-77~78~103~104掘り下げ。T-80~84~
90埋め戻し。

28 日(水) T-77~104~106掘り下げ。T-102~103実
測。鎧物師の埋め戻し。

29 日(木) T-104'~105'~105"~106~108~117掘り下げ。
T-77~78~104~105実測。

30 日(金) T-78'~104'~108~117掘り下げ。T-77~
104~105~105"~106~110写真撮影。T-104~
105"~105"~106~110~117実測。

12月 3 日(月) T-78'~78"~107~117'掘り下げ。T-108実
測。大谷川左岸地域の埋め戻し終了。

4 日(火) T-78"~107~108~118掘り下げ。奥迫T-
58より埋め戻し南下。

5 日(水) T-107'~109~115~118掘り下げ。T-78"~
78"~107~117'実測。T-65付近より西土
井まで埋め戻し。

6 日(木) T-107'~108'~112~115~117'掘り下げ。
T-78"~107"~115~117実測。T-107'~109~
115~118写真撮影。

7 日(金) 埋め戻し。

10 日(月) T-111~112~116掘り下げ。T-106'~104"
写真撮影。

12 日(水) 埋め戻し。

13 日(木) T-105"~121~122~124~125掘り下げ。
T-78"~104"付近埋め戻し。

17 日(月) T-121~122~127掘り下げ。

19 日(火) T-119~127の排水、実測、写真撮影。

20 日(水) T-112'掘り下げ。T-88実測。T-110付
近埋め戻し。レベリングの準備。

21 日(木) 埋め戻し。

22 日(金) 茶臼山城の壕内T-123~124埋め戻し。

24 日(月) 尾中を中心に埋め戻し。

25 日(火) T-128~129掘り下げ、写真撮影、実測。
T-85~88埋め戻し。

26 日(水) T-128~129埋め戻し。発掘道具の整備・か
たづけ。

昭和60年

1月 7 日(月) 現場撤収

21 日(月) 東三成の確認調査結果につき、井笠地方振
興局、矢掛町産業課、矢掛町教育委員会、
岡山県教育委員会による協議。



第3章 発掘調査の概要

第1節 遺跡の位置

遺跡は小田郡矢掛町矢掛、東三成に所在する。小田川の北岸に形成された沖積地と山麓および扇状地からなり、従来より周知されていた奥迫・土井遺跡等も含まれている。他に旧山陽道、条里遺構等の存在が古くから取り上げられていた地域でもある。

東西、北面に山々を控え、南面に小田川を望む約 2×2 kmの三角形状の平野が対象地にあたり、その三角形の頂点より中央を貫流して大谷川が小田川に注いでいる。真北を基準にして大きな枠目が整然と並び、現状での条里を良好に温存している。現在の集落はそれらの山麓周縁にまとまって認められ、遺物の散布などからも遺跡と重複するものと考えられる。旧山陽道は下道氏の墓所、東三成市場の集落、大谷川橋、そして、茶臼山の南端を廻り北上したと考えられており、東三成の平野部を横断している。

現状も大部分が田圃として機能しているが、大谷川、小田川沿いの一部に新興の宅地が増え始めている。

第2節 調査の方法と概要

今回の発掘調査は圃場整備事業が計画されている範囲内、および周知の遺跡を中心に実施した。

まず、通年施行域である農地北部の東土井地区よりトレーニングを開始し、北端の奥迫より池ノ内、西土井と南下する。急遽来年度の実施地域が具体化し、南東端に近い沖ノ後に移動して大谷川東岸を北上する。再び宮ノ前より大谷川西岸を南下して行部にて試掘を終了する。

トレーニングは 2×5 m、 1.5×4 m を基調とし、東土井地区に 2×5 mのトレーニングを48本、奥迫地区より行部地区に 1.5×4 m のトレーニングを95本、総数143本を実施した。約1,050 m²の面積になる。

通年施行地域である東土井地区 (5.3 ha) に関しては調査結果に鑑み、遺構が検出された場所については、現状の田面レベルを変えることなく、周囲の田面レベルの計画変更でもって整備を了解した。

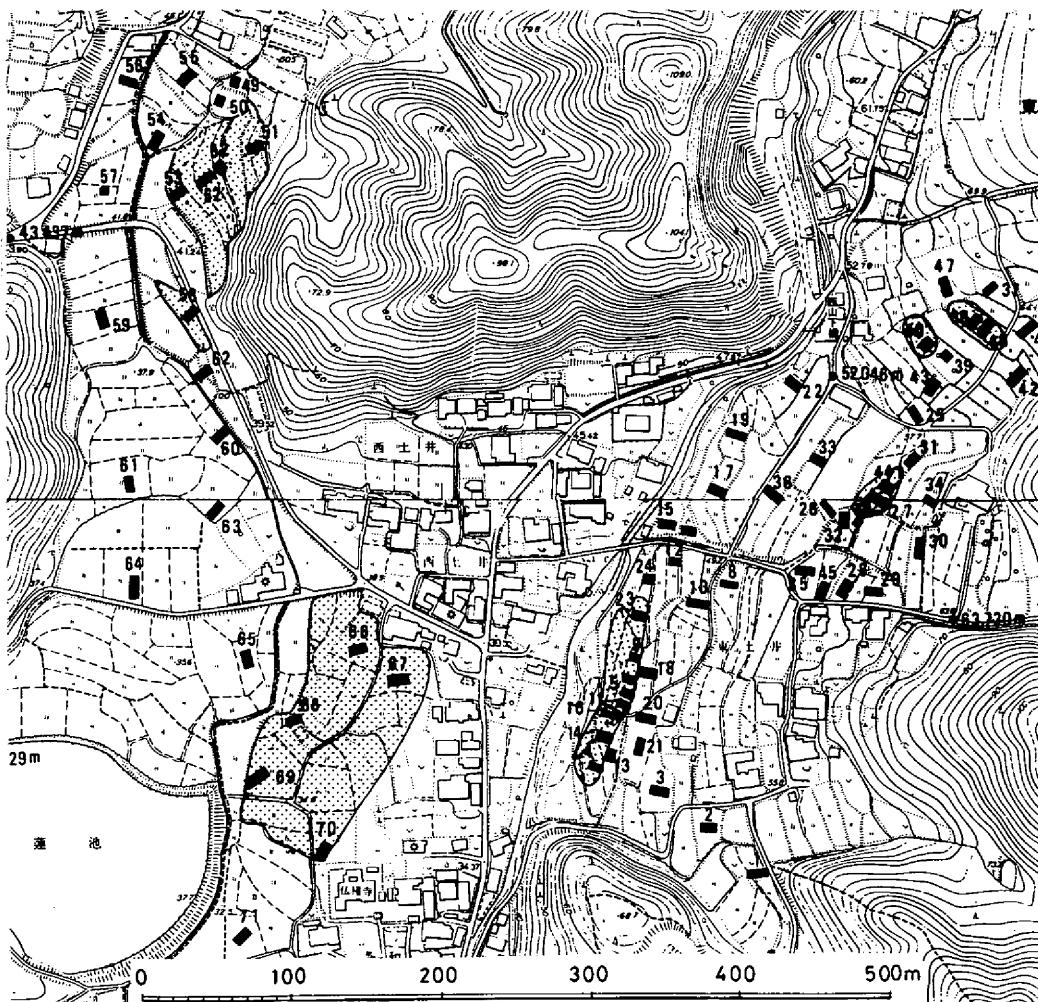
奥迫地区より行部地区 (82.9 ha) にかけては整備後の田面レベルが未定であるが、1 m以上下げることはないだろうという施行者の言により、掘削をマイナス 1 mに止めた。これらの地区は来年度を皮切りに将来的に農地に整備されてゆく場所である。

奥迫・西土井・東土井調査区

これらの調査区は矢掛奥迫、東三成西土井・東土井の地域となる。そして、東三成の三角形状を呈する平野の頂点部に位置する。奥迫調査区では16本のトレンチを設定し、緩かに西に傾斜する部分に弥生時代前期土壙、中世の柱穴を検出した。T-51~53より弥生時代前期土器片11・13・14、石器107・108、および中世土器片53・55・56・86がまとまって出土している。

西土井調査区は奥迫調査区よりさらに緩かで平坦な地形を呈している。T-66~70では中世の土壙、柱穴が認められ、遺物は60・61・67が出土している。

東土井調査区は大谷川左岸の山裾部に位置している。48本のトレンチにより3ヶ所の遺構のまとまりを確認した。T-40・46、T-44、T-4~23間がそれにあたり、T-5で弥生時代中期の溝、T-14で古墳時代の住居址、他は中世の柱穴等が発見されている。遺物は42~48、



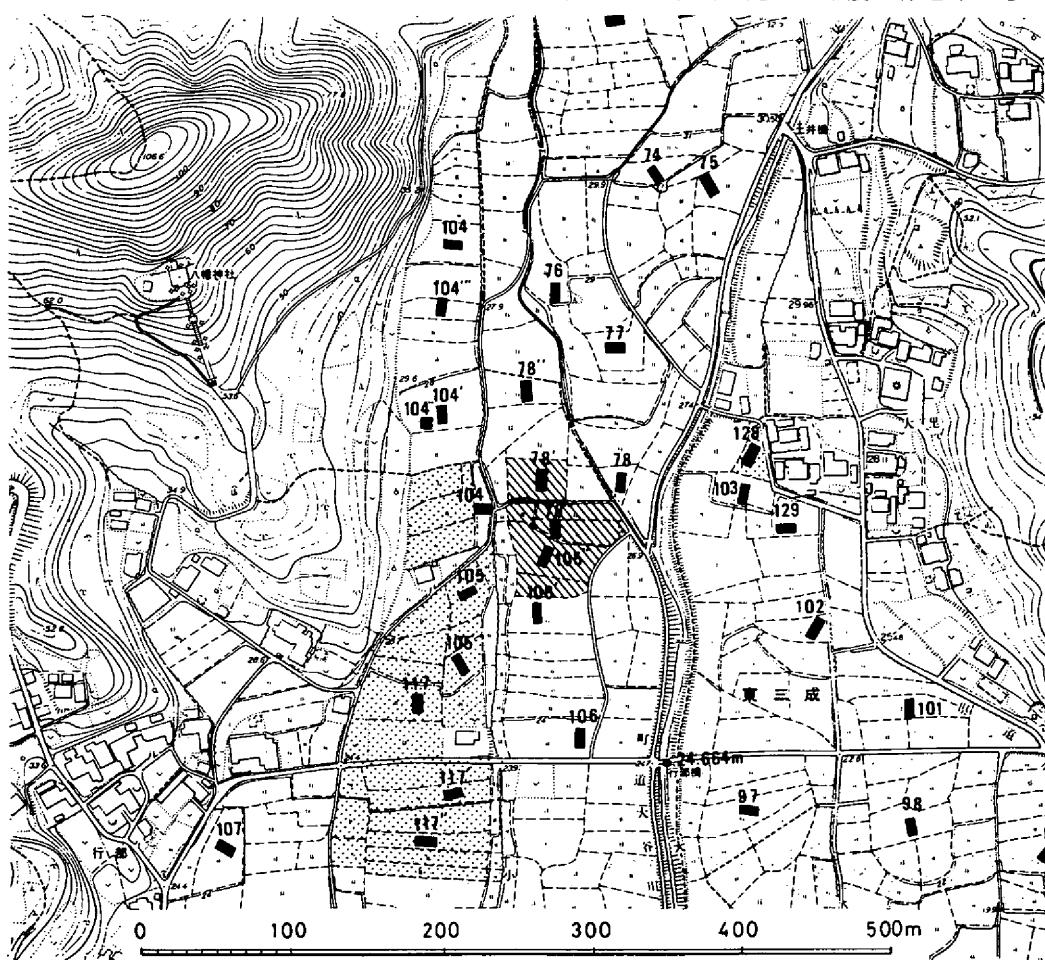
第4図 奥迫・西土井・東土井調査区 ($\frac{1}{5000}$)

奥 迫 遺 跡

71・63・64・66・88があり、中世では97・98・100・101・103・105等がある。

宮ノ前・赤岸・八反田・木舟・尾中・大里調査区

蓮池の下より八幡山東斜面と要ガイ山西斜面に挟まれた若干南に下降する田園部にあたる、30本のトレーナーを実施し、主に赤岸調査区を中心としたT-104・105・105'・117・117'・117"より弥生時代中期の溝、後期の竪穴式住居が3~4軒重複して検出されている。T-105はマイナス約40cmで遺構面が存在している。これらのトレーナーより22~27・29・30・34の遺物が出土しており、弥生時代後期ほぼ全般にわたる集落址の存在することが考えられる。およそ1900m²におよぶ範囲の想定が可能である。大里調査区においてもT-128よりほぼ同様のことが考えられる。焼土面および柱穴が認められ、49・51・58・68・77・79・82・84・129等の遺物が出土している。49は古式の須恵器甕の可能性がある。他に白磁碗、天目茶碗、早島式土器、布目瓦片がみられ、82は炉壁の破片である。要ガイ山より西に延びる丘陵の縁辺部にあた



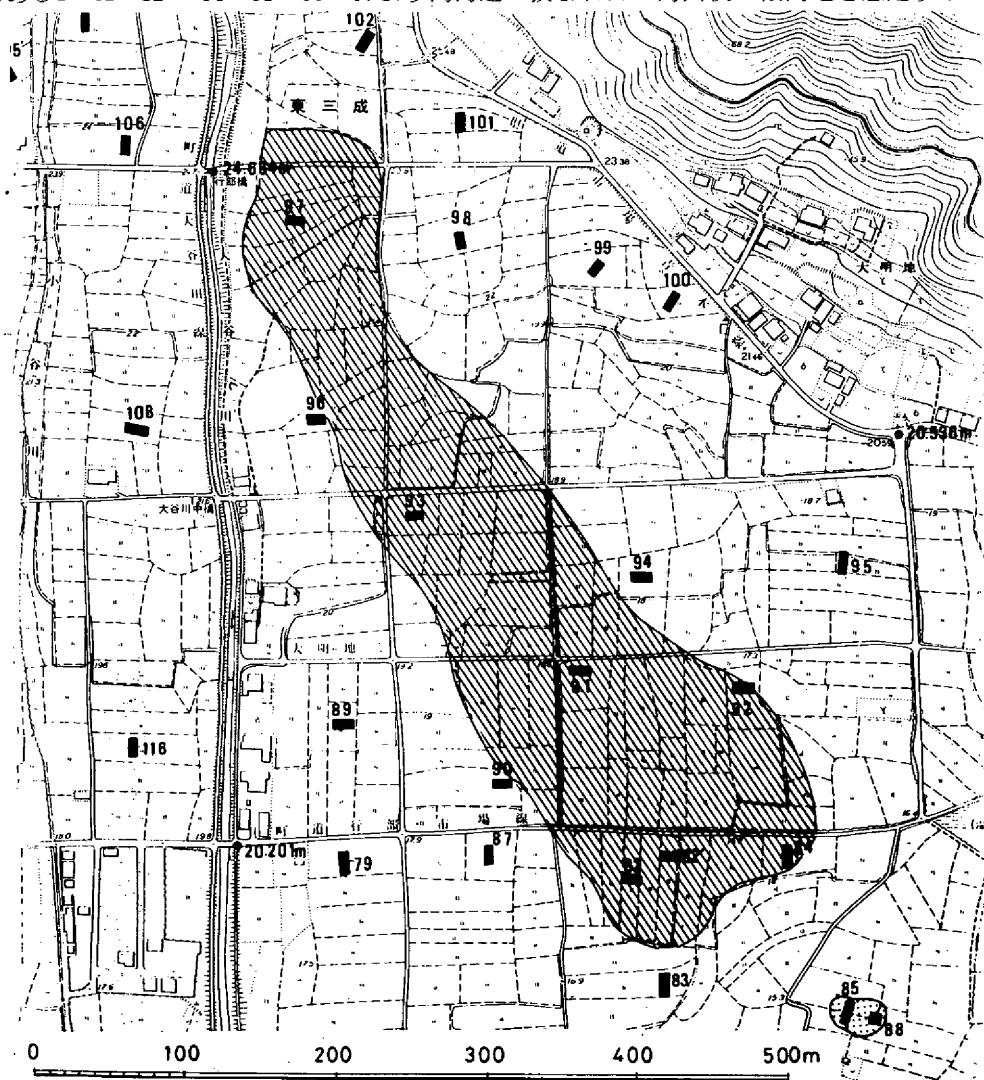
第5図 宮ノ前・赤岸・八反田・木舟・尾中・大里調査区 ($\frac{1}{5000}$)

り、現在の集落と重複して中世を中心とする遺構が存在するものと考えられる。

78'・78"・105"・106"では下位より縄文時代後・晚期と考えられる小片が出土している。

横ノ本・門田・鋳物師・沖ノ後・窪田調査区

大谷川左岸を中心にして、南は小田川左岸までの範囲に入る。各トレンチに認められる事実は、砂を中心とした土壤構成であり、ほとんどのトレンチにおいて湧水が多く非常にもろい土質である。トレンチ17本の結果より、T-96・89・87・83・79は大谷川の氾濫による河道跡を表出していると考えられ、T-94・98・101よりも要ガイ山の裾をはって南東方向に流走した河道跡であることが理解できる。T-98では巨大な流木が認められた。そして、その中間部分であるT-82・82'・84・91~93・97より両河道に挟まれた三角州状の微高地を想定すること



第6図 横ノ本・門田・鋳物師・沖ノ後・窪田調査区 ($\frac{1}{5000}$)

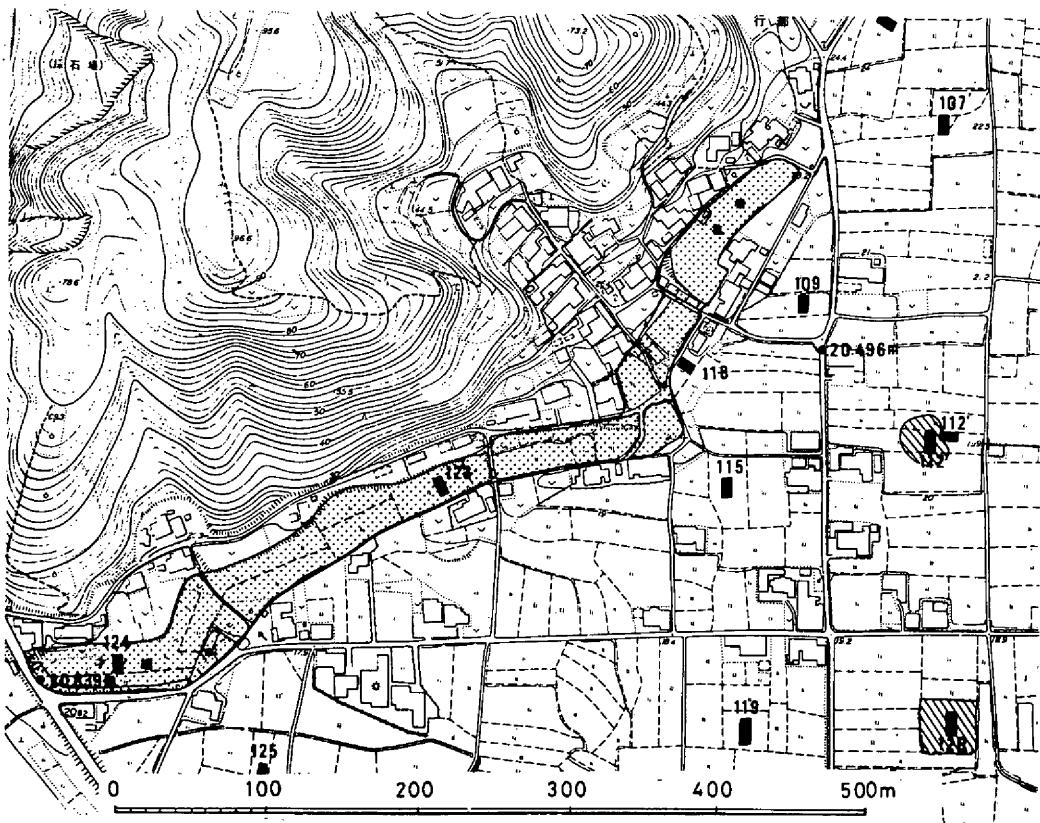
ができる。T-82では31~33・35の弥生時代後期後半の遺物が出土している。T-93・97では溝状遺構および土壙が検出されているが時期は不明である。

行部・尾土井・小源治調査区

小谷川右岸より茶臼山までの間、南は小田川左岸までの地域があたる。9本のトレンチを設定する。視覚的表現に訴える遺構として茶臼山南西裾を廻る壕跡が存在する。小田川より山裾に沿って分岐して北東に延長約600m、幅約50mを測り、現在は水田に利用されている水捌の悪い低地である。人工の掘削による大規模な構造物である。T-123・124のトレンチは壕底を確認するつもりで設定したが、約1m掘り下げた時点で湧水により壁面が崩れ落ち目的は達成できなかった。T-124からは軒丸瓦片107と陶磁器茶碗片104が出土している。

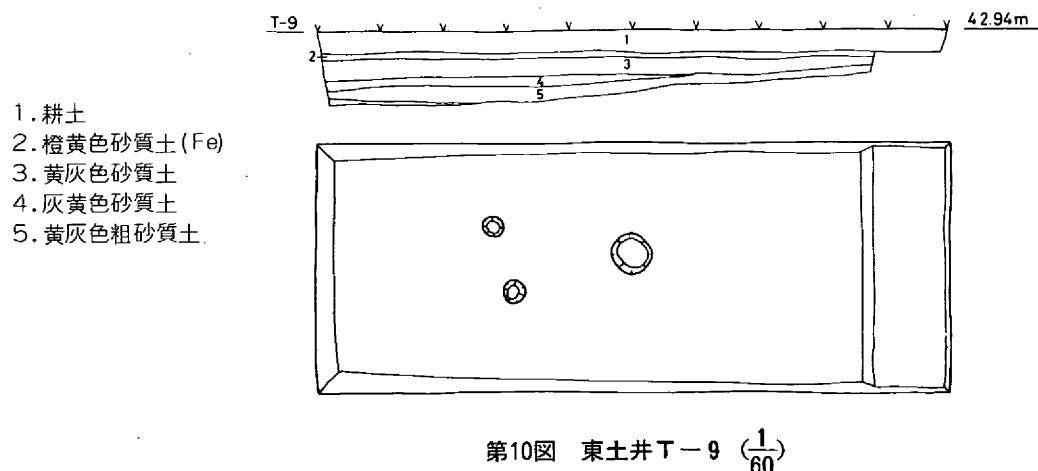
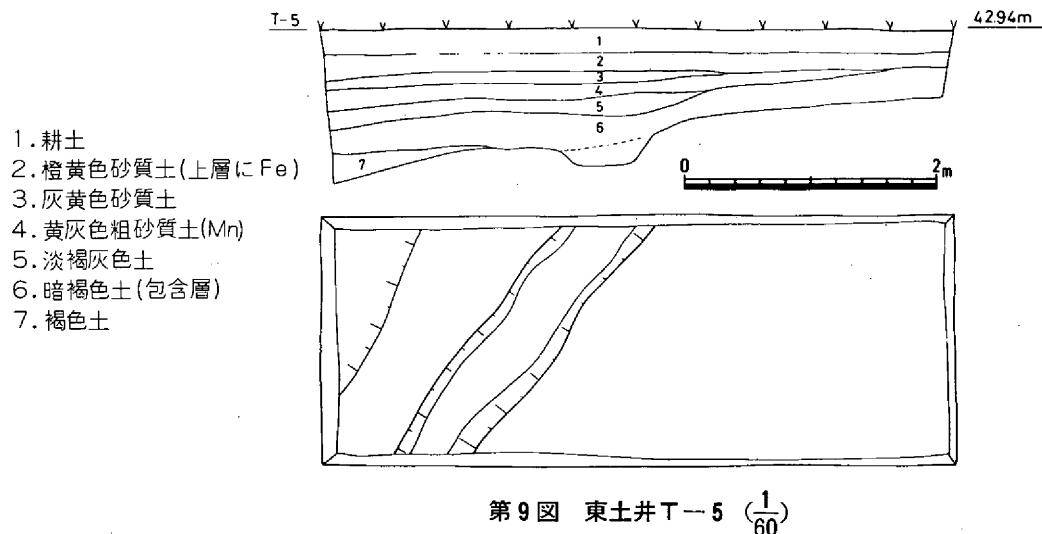
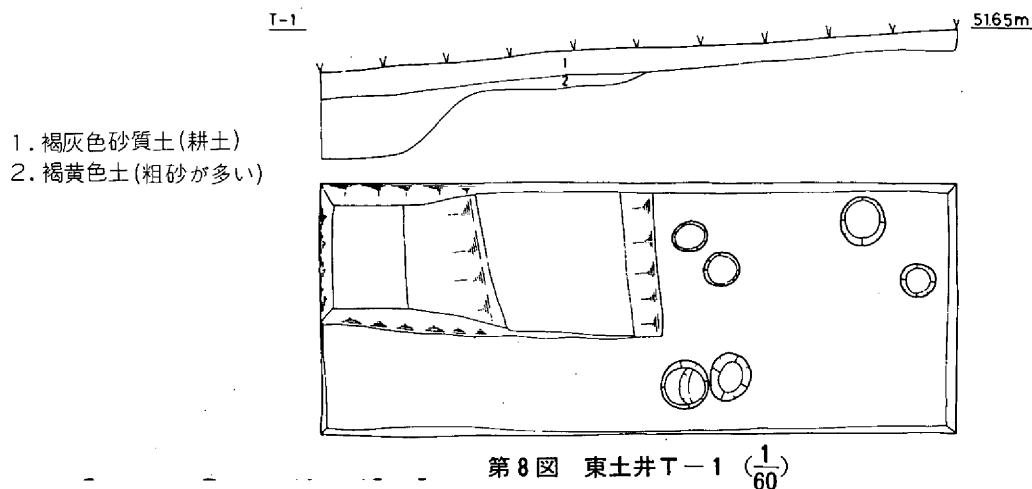
T-118では茶臼山城の壕を開ける際に排出されたと考えられる盛土により堤防状の遺構が存在する。これに類する遺構は小田川分岐点に向って壕跡南側全体に見られたようであるが、近代に瓦を造る粘土として利用され、その姿を消したようである。T-118より北西にかけてゆくべの行部部落付近が茶臼山城の郭内屋敷に想定されている。

T-112では比較的多くの縄文時代後期の土器片(1380g)が出土している。表土よりマイ

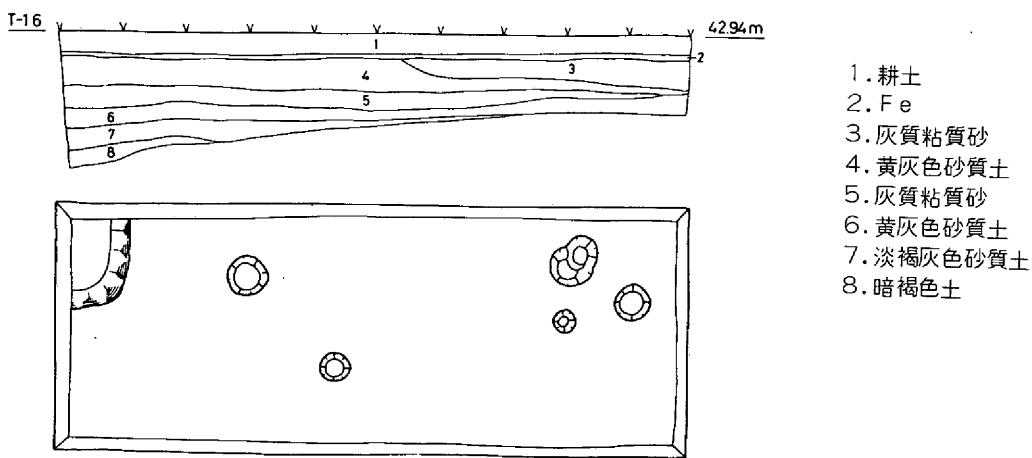
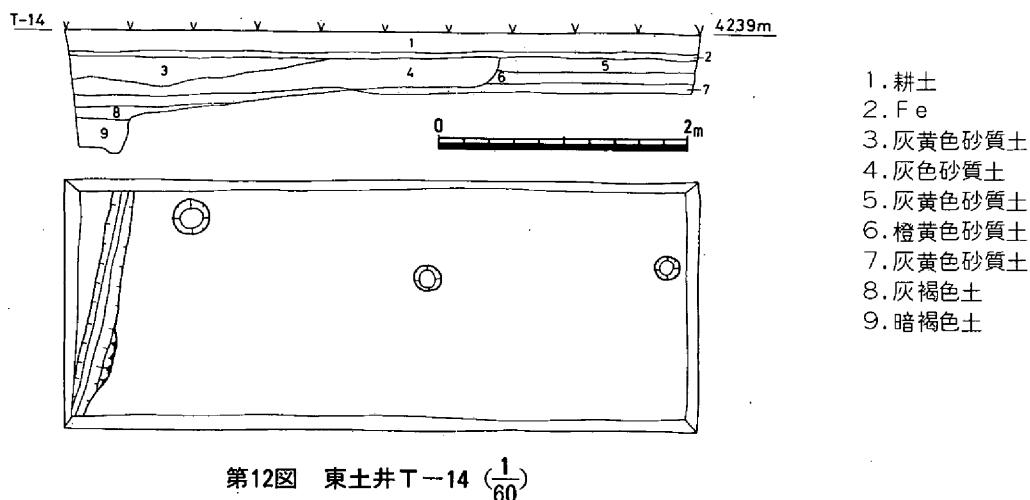
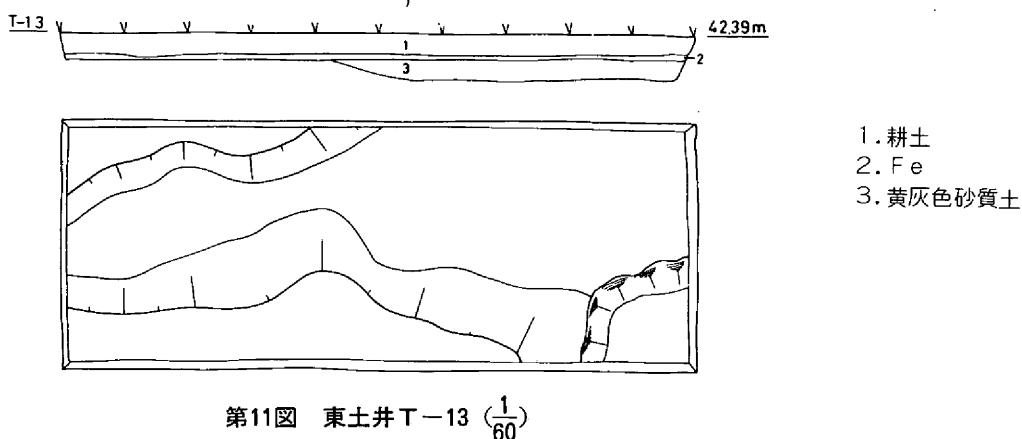


第7図 行部・尾土井・小源治調査区 (1/5000)

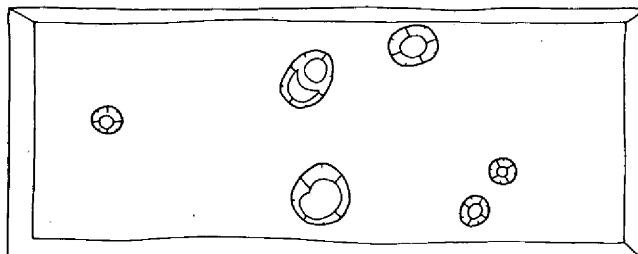
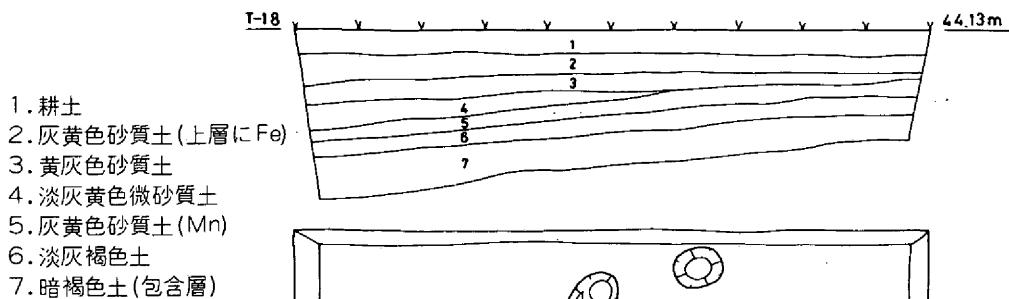
奥 迫 遺 跡



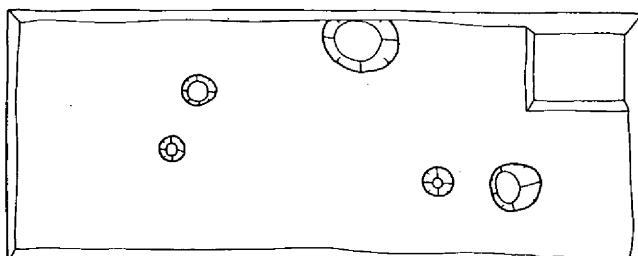
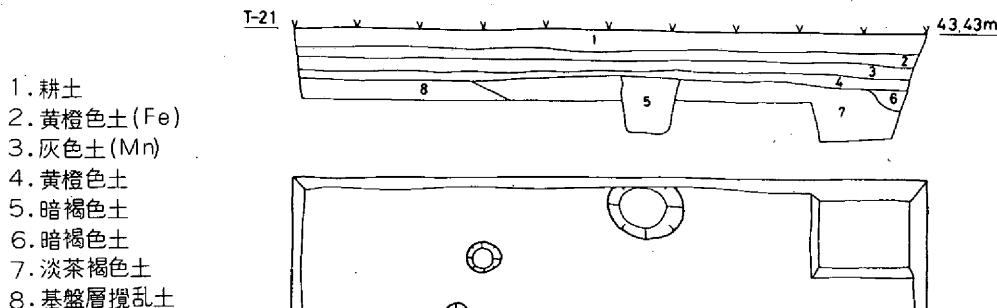
奥迫・東土井遺跡



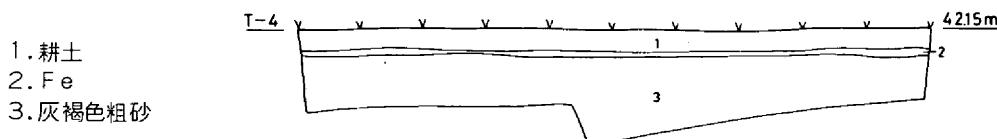
奥 迫 遺 跡



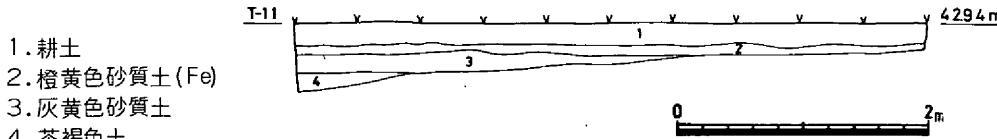
第14図 東土井T-18 ($\frac{1}{60}$)



第15図 東土井T-21 ($\frac{1}{60}$)

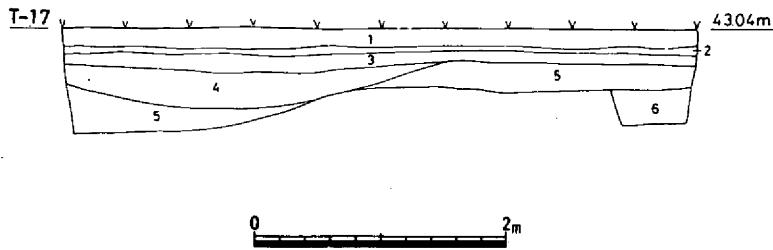


第16図 東土井T-4 ($\frac{1}{60}$)



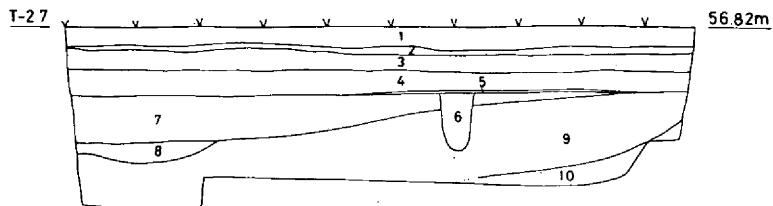
第17図 東土井T-11 ($\frac{1}{60}$)

奥 迫 遺 跡

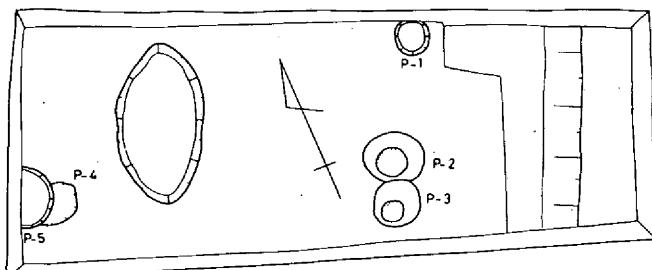


第18図 東土井T-17 ($\frac{1}{60}$)

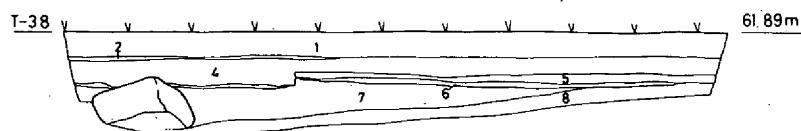
1. 淡黄灰色砂質土
2. 淡黄灰色砂質土
3. —
4. 灰色粗砂(礫)
5. 灰色砂質土
6. 褐色粗砂(角礫)



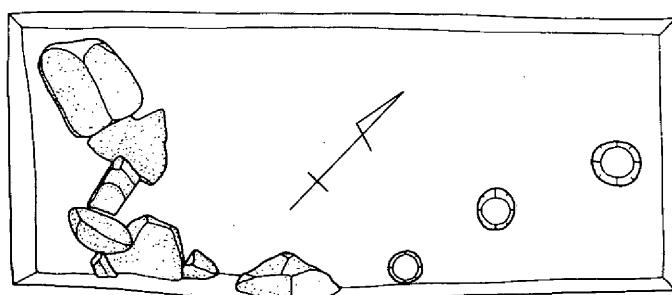
1. 黒灰色微砂
2. 灰色砂(しまりがよい)
3. 暗赤褐色砂(〃)
4. 灰色砂(Mn)
5. 炭・Mn
6. 暗灰色砂
7. 褐色砂(タタキシメ)
8. 暗褐色砂質土
9. 淡褐色砂質土
10. 淡灰色砂



第19図 東土井T-27 ($\frac{1}{60}$)

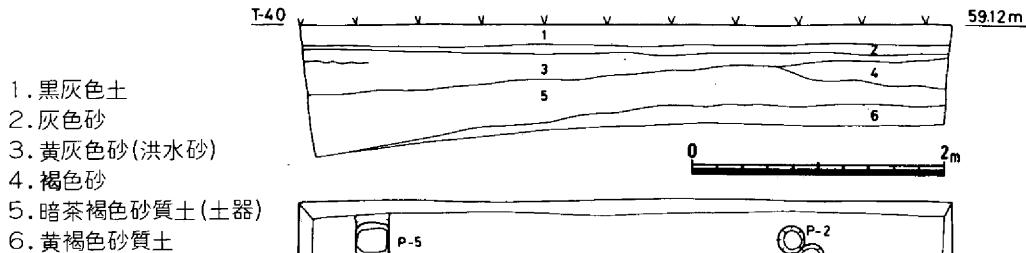


1. 濃灰色土(耕土)
2. 褐色土(Fe)
3. 褐色砂(下位灰色)
4. 緑灰色砂
5. 淡黒灰色砂質土
6. 褐色土(Fe)
7. 淡黒灰色砂質土
8. 黄褐色砂質土

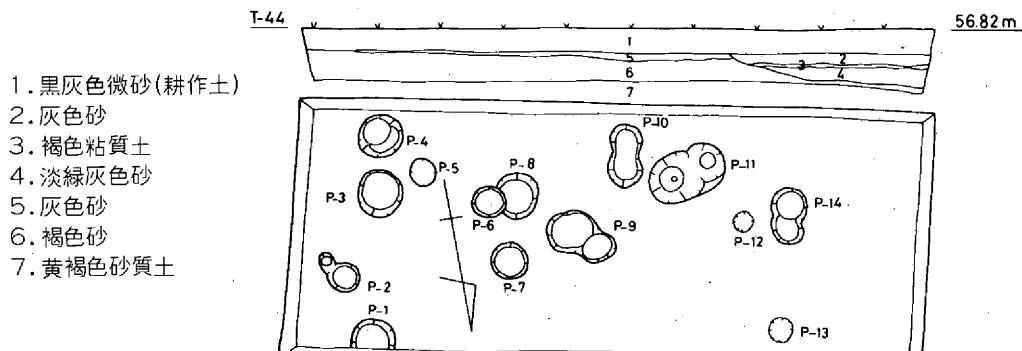


第20図 東土井T-38 ($\frac{1}{60}$)

奥迫遺跡



第21図 東土井T-40 ($\frac{1}{60}$)



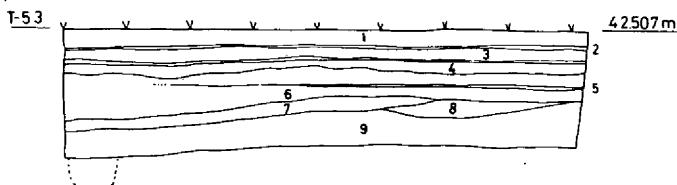
第22図 東土井T-44 ($\frac{1}{60}$)

ナス80~100cm間の暗茶灰黒色砂質土内よりまとまっての出土であるが、磨滅痕が著しく、上流部より移動してきた感が強い。2・3・4・6・7・9・10がそれにあたり、深鉢、鉢等がみられる。

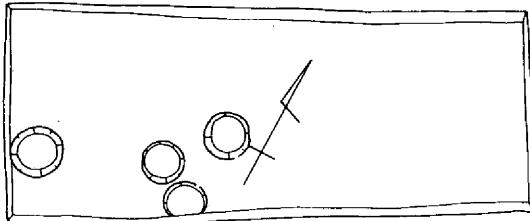
これらの出土は、尾中のT-78"・105"・105"等にみられた縄文時代後・晚期土器片等と関連し、従来発見されていなかった縄文時代の人々の足跡が矢掛の地にも居を構えた可能性があることを示す貴重な資料である。東土井調査区のT-38においても縄文時代早期の楕円押型文の施された土器片が一点出土している。

T-120では南西より北東に流走する幅約1.5m以上の溝が検出されているが、遺物は認められず時期は不明である。

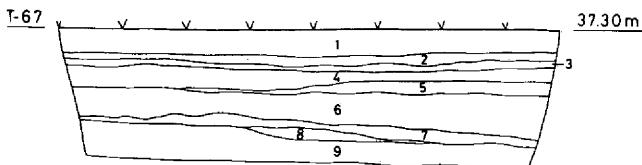
奥 迫 遺 跡



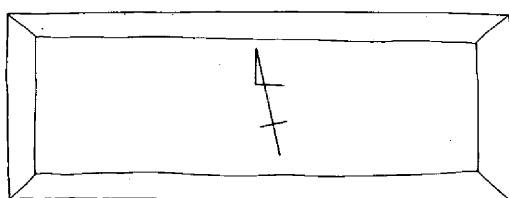
- 1. 淡黑灰色微砂
- 2. 灰色粘質土
- 3. 暗赤褐色砂
- 4. 灰色砂
- 5. 淡灰色砂
- 6. 灰色砂
- 7. 暗灰色砂
- 8. 淡茶黑色砂
- 9. 淡黑茶色砂
(中世包含層)



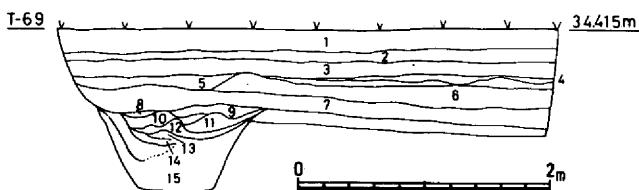
第23図 奥 迫 T-53 ($\frac{1}{60}$)



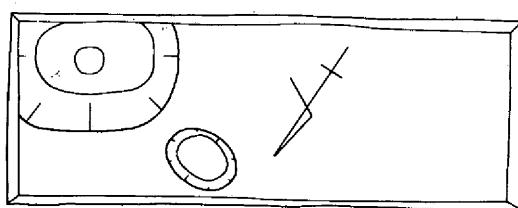
- 1. 淡こげ茶微砂
- 2. 灰色砂
- 3. 赤褐色(Mn)
- 4. こげ茶色砂(Mn)
- 5. 灰色砂
- 6. 灰黑色砂(中世包含層)
- 7. 灰茶黑色砂
- 8. 淡灰黑色砂
- 9. 灰白色砂



第24図 西土井 T-67 ($\frac{1}{60}$)



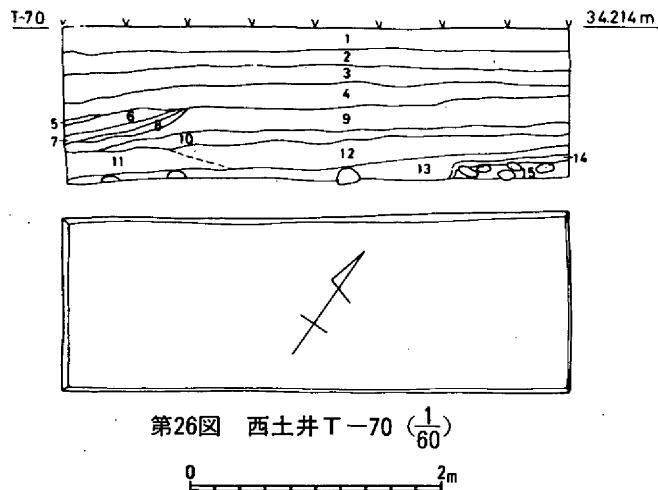
- 1. 淡黑灰色微砂
- 2. 淡褐色砂
- 3. 淡灰褐色砂
- 4. 淡灰褐色砂
- 5. 黑色砂
- 6. 淡黑灰色土
- 7. 黑色砂質土
- 8. 灰色砂
- 9. 淡灰色砂
- 10. 暗灰色砂
- 11. 灰色砂
- 12. 濃青灰色粘質ビート
- 13. 灰色砂
- 14. 黑色砂
- 15. 黑色・灰色砂の互層



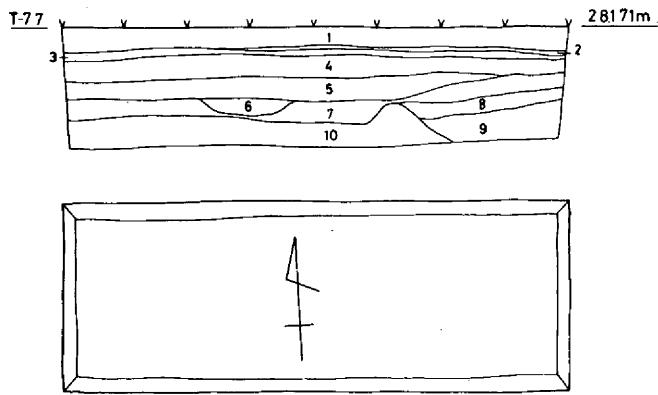
第25図 西土井 T-69 ($\frac{1}{60}$)

奥 迫 遺 跡

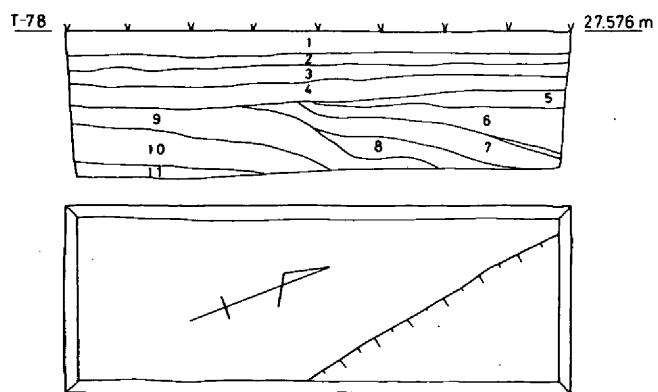
1. 淡黑灰色微砂(耕作土)
2. 灰色砂
3. 淡灰色砂
4. 灰色砂
5. 灰色砂
6. 淡灰色砂
7. 灰色砂
8. 淡灰色砂
9. 黑色砂質土(中世包含層)
10. 淡灰色砂
11. 淡黑灰色砂
12. 淡黑色砂
13. 暗灰色砂
14. 暗赤褐色砂(Fe・Mn)(弥生時代包含層)



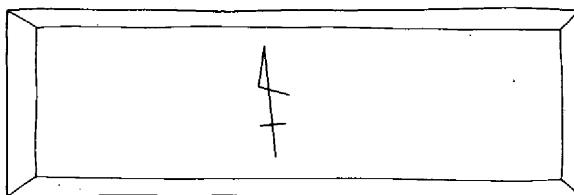
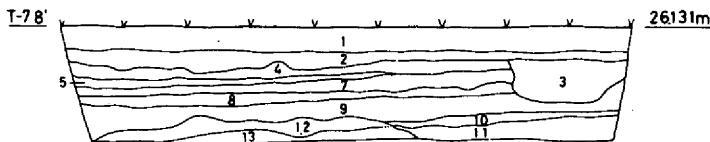
1. 灰黑色微砂
2. 灰色微砂
3. 褐色砂
4. 茶灰色砂(Mn)
5. 淡茶色砂
6. 茶色微砂
7. 灰色砂(荒砂)
8. 茶色砂
9. 灰色砂
- (荒砂・明褐色粒を含む)
10. 青灰色微砂(グライ化)



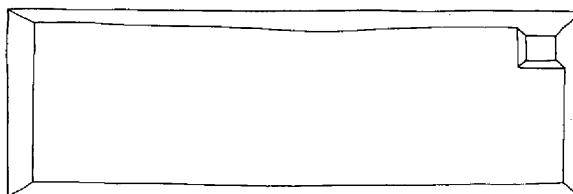
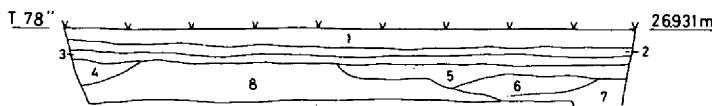
1. 暗灰黑色土
2. 灰黃褐色砂
3. 黄褐色砂(Fe)
4. 褐灰色微砂(Mn)
5. 黄褐灰色微砂
6. 灰色砂(荒砂)
7. 暗灰色粘土(砂混り)
8. 灰色砂
9. 暗灰色砂質土(荒砂)
10. 暗黑灰色砂質土
11. 暗灰色微砂



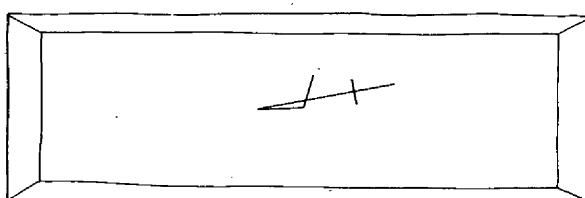
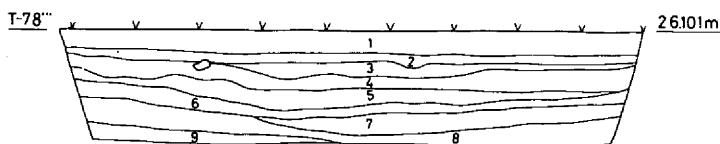
奥 迫 遺 跡



第29図 木舟T-78' ($\frac{1}{60}$)



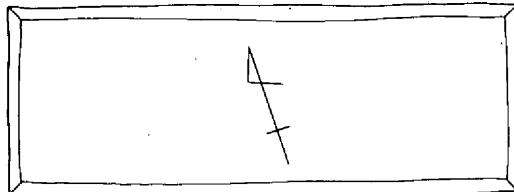
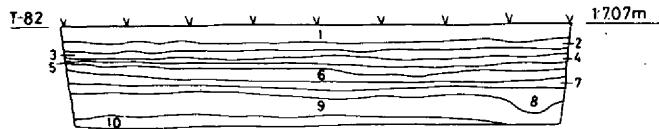
第30図 宮ノ前T-78'' ($\frac{1}{60}$)



第31図 尾中T-78''' ($\frac{1}{60}$)

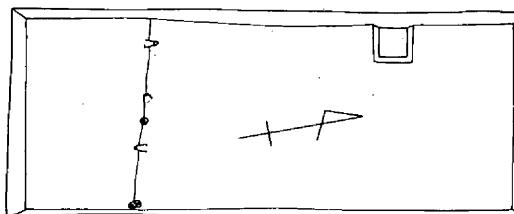
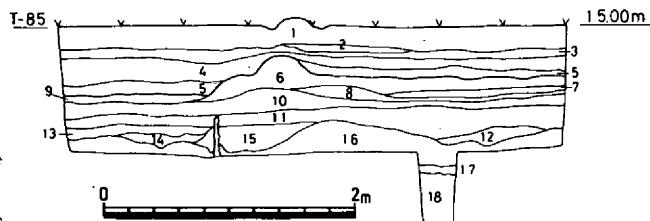
奥 迫 遺 跡

1. 淡黑灰色微砂
2. 淡黑色砂
3. 褐色砂(Fe)
4. 茶灰色砂(Mn)
5. 灰色砂(Mn)
6. 淡灰色砂(古代・中世)
7. 黑色砂質土
(弥生時代後期)
8. 灰色砂
9. 暗黃褐色粘土
10. 灰色砂



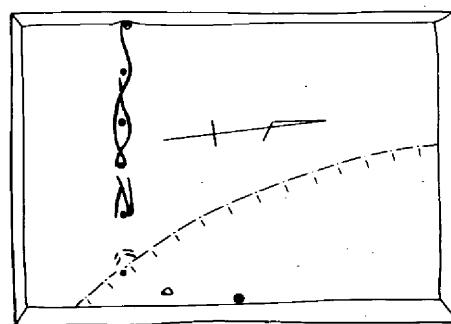
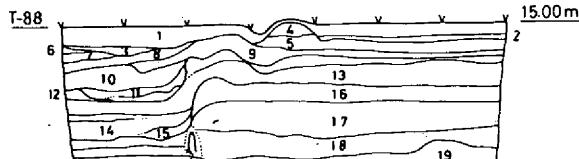
第32図 沖ノ後T-82 ($\frac{1}{60}$)

1. 暗青灰色粘質微砂
2. 淡褐色粘質土
3. 黄褐色粘質微砂
(Fe)
4. 茶灰色粘質微砂
(Mn)
5. 淡黄灰色微砂
(洪水砂)
6. 茶灰色粘質微砂
(畦畔)
7. 灰色微砂
8. 灰色粘質微砂
9. 灰色粘質砂
(水田層)
10. 淡茶色微砂(Mn)
11. 淡暗灰色微砂
12. 灰色微砂
13. 暗灰色微砂
14. 灰色微砂
15. 灰色粘質微砂
16. 明灰色粘質微砂
17. 茶褐色微砂
18. 青灰色粘質微砂



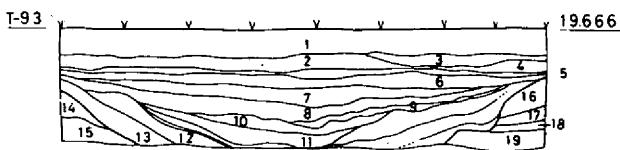
第33図 墟田T-85 ($\frac{1}{60}$)

1. 暗青灰色粘質微砂
2. 暗青灰色粘質土
(水田層)
3. 青灰色微砂
4. 青灰色粘質土
5. 灰色微砂
6. 淡青灰色微砂
7. 灰色微砂
8. 灰色微砂
9. 淡灰色微砂
10. 淡青灰色微砂
11. 灰色微砂
12. 灰色粘質砂
13. 淡茶色微砂
14. 灰色粘質土
15. 灰色粘質砂
16. 茶色微砂
17. 暗茶灰色微砂
(Mn)
18. 茶色微砂(Mn)
19. 明褐色微砂(Mn)



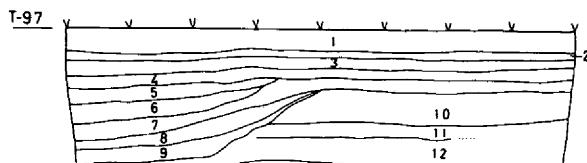
第34図 墟田T-88 ($\frac{1}{60}$)

奥 迫 遺 跡

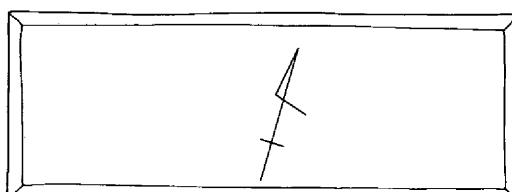


第35図 門 田T-93 ($\frac{1}{60}$)

1. 淡黒灰色微砂
2. 黄灰色砂
3. 褐色土(客土)
4. 灰色砂
5. 黄褐色砂(Fe)
6. 明灰色砂(Mn)
7. 茶灰色砂(Mn)
8. 暗茶灰色砂
9. 灰色砂
10. 暗茶灰色粘質砂
11. 暗青黑色微砂
(有機質)
12. 灰色微砂
13. 灰色砂
14. 灰色砂
15. 黑茶灰色粘質微砂
16. 暗灰色砂
17. 淡褐色砂
18. 灰色砂
19. 暗黒茶灰色
粘質微砂

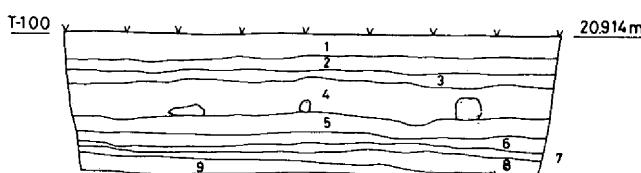


1. 淡灰黑色微砂
2. 褐色砂
3. 淡灰褐色砂
4. 茶灰色砂
5. 灰色砂
6. 茶色砂
7. 灰色砂(土器)
8. 暗灰色砂
9. 黑色粘土
10. 黑色砂
11. 淡灰色粘質砂
12. 灰色砂(荒砂)



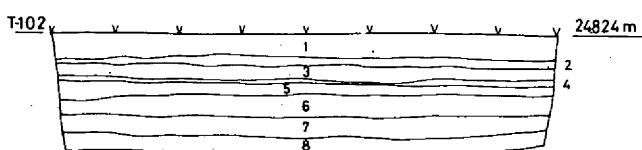
第36図 横ノ本T-97 ($\frac{1}{60}$)

0 2m

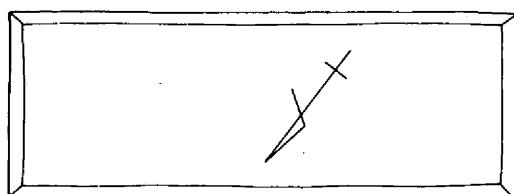


第37図 谷 田T-100 ($\frac{1}{60}$)

1. 淡黒灰色粘質土
2. 淡茶色砂
3. 茶色砂(Fe)
4. 濃茶灰色砂(硬質)
5. 灰白色粘質土
6. 暗茶褐色砂
7. 灰色砂
8. 灰色砂(荒砂)
9. 灰色砂
(上位炭が混る)



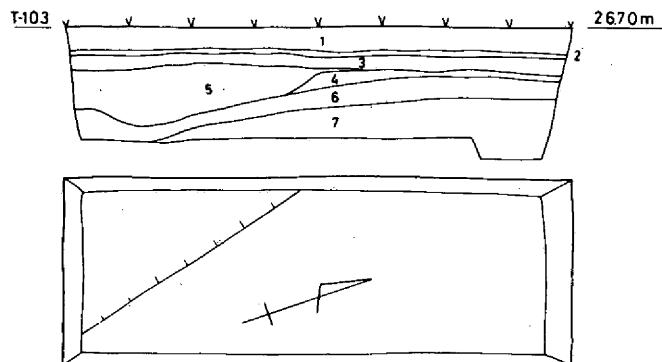
1. 灰黑色微砂
2. 暗黄褐色砂質土
3. 暗灰色砂(荒砂)
4. 淡灰黑色砂
5. 暗茶灰黑色砂
6. 暗茶灰色砂
7. 淡黑色砂
8. 灰茶色砂



第38図 大 里T-102 ($\frac{1}{60}$)

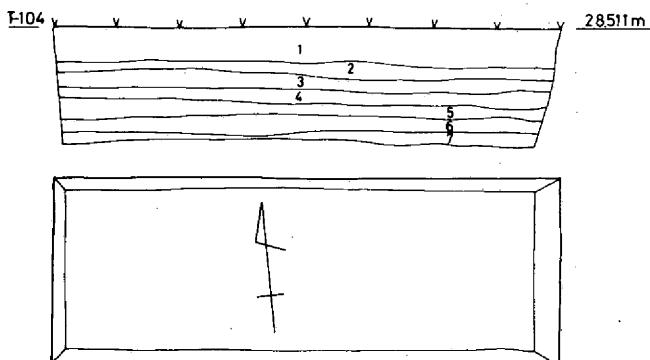
奥 迫 遺 跡

1. 灰黑色砂質土
2. 灰色砂
3. 褐色砂(Fe)
4. 暗灰色砂
5. 黄褐色砂
6. 淡灰黑色砂
7. 淡灰黑色砂
(礫を含む)



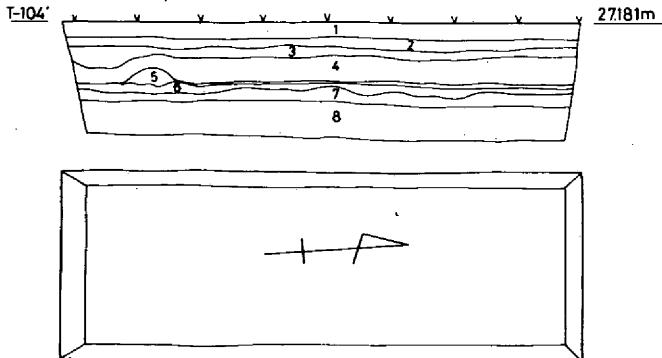
第39図 大里T-103 ($\frac{1}{60}$)

1. 灰色粘質土
2. 褐色砂(Fe)
3. 灰色砂(水田層)
4. 淡褐色砂
5. 暗灰色砂
6. 黑色粘質土(炭)
7. 灰色砂(荒砂)



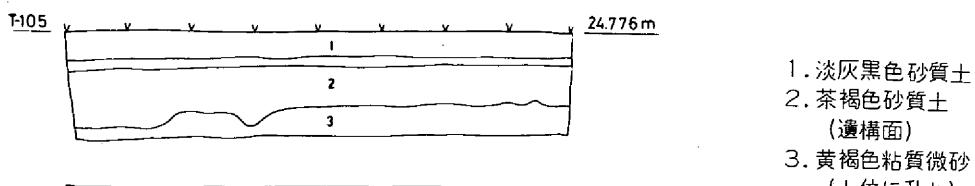
第40図 宮ノ前T-104 ($\frac{1}{60}$)

1. 灰黑色微砂
2. 暗灰色砂
3. 明褐色砂
4. 暗灰茶色土(Mn)
5. 灰色粘質土
6. 灰色粘質微砂
(水田層)
7. 淡褐色粘質土
8. 暗茶褐色砂質土
(中世)

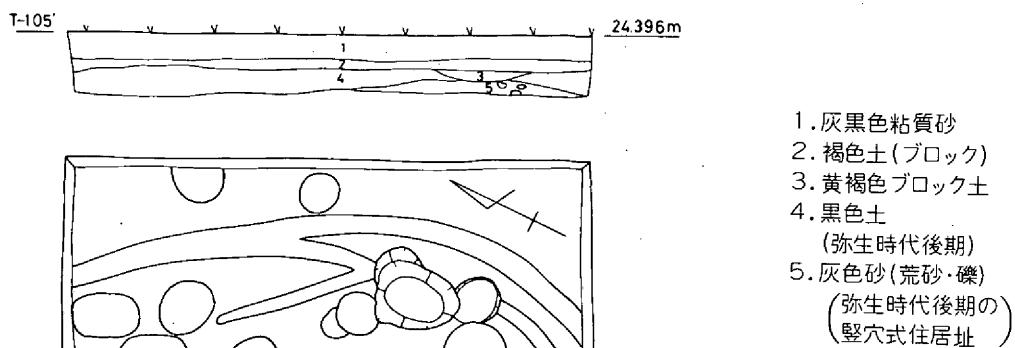


第41図 宮ノ前T-104 ($\frac{1}{60}$)

奥 迫 遺 跡

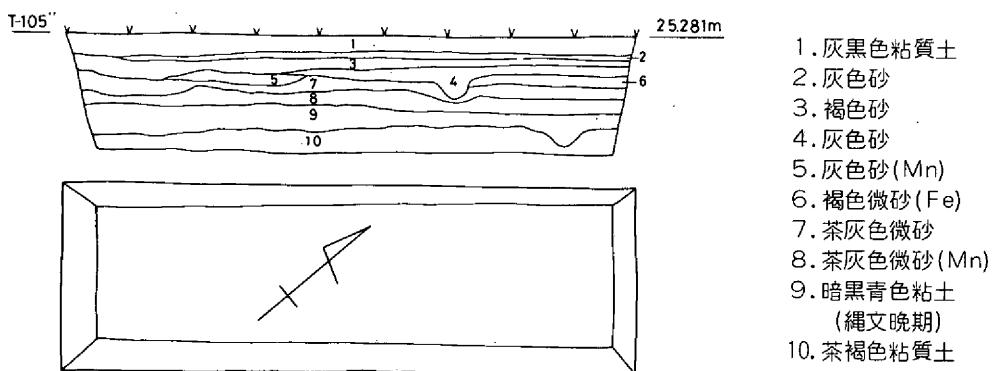


第42図 赤 岸 T-105 ($\frac{1}{60}$)



第43図 赤 岸 T-105' ($\frac{1}{60}$)

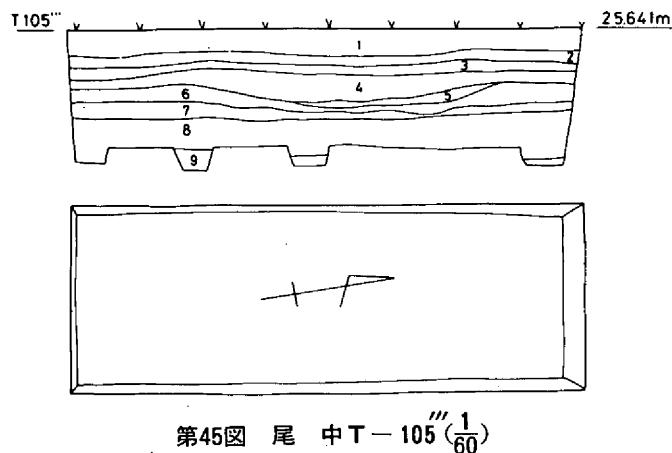
0 2m



第44図 尾 中 T-105'' ($\frac{1}{60}$)

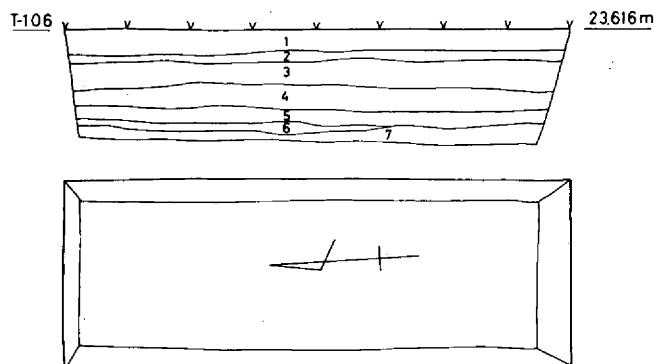
奥 迫 遺 跡

1. 灰黑色微砂
2. 褐色砂
3. 褐色微砂(Mn)
4. 茶灰色砂(荒砂)
5. 灰色砂(荒砂)
6. 褐色粘質土
7. 淡黑色砂
8. 黑色粘質砂(縹文)
9. 暗灰色微砂



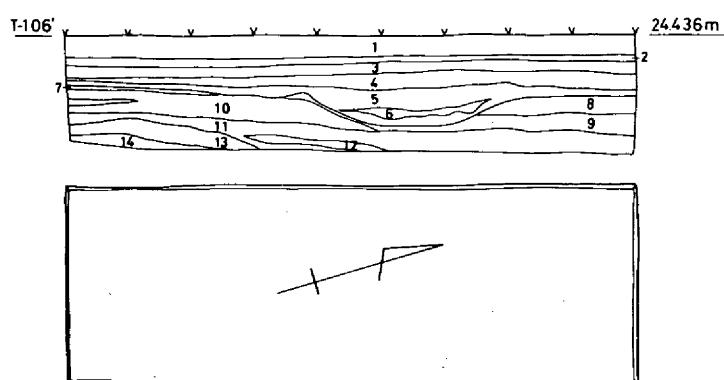
第45図 尾 中 T-105 (1/60)

1. 淡茶灰色微砂
2. 褐色砂質土
3. 灰色粘質微砂
4. 暗茶灰色砂
5. 淡灰褐色砂
6. 灰色砂
7. 暗灰色砂(洪水層)



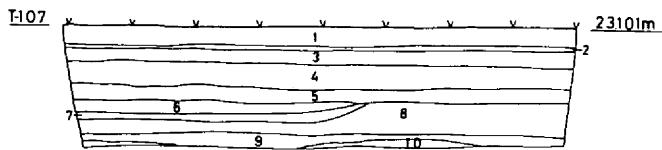
第46図 尾 中 T-106 (1/60)

1. 灰黑色粘質微砂
2. 灰色砂
3. 褐色粘質砂
4. 淡灰黑色粘質土
5. 淡灰色砂(荒砂)
6. 黄灰色砂
7. 淡灰色砂
8. 淡茶灰色砂(荒砂)
9. 淡茶灰色砂
10. 暗黃灰色微砂
11. 暗灰色微砂
12. 灰色微砂
13. 灰色微砂
14. 暗灰色粘質微砂

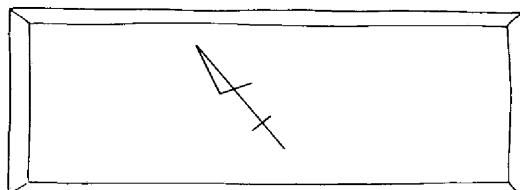


第47図 尾 中 T-106' (1/60)

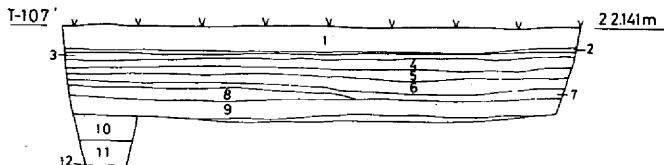
奥 迫 遺 跡



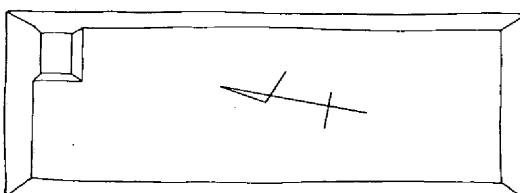
1. 暗灰色砂質土
2. 灰色砂質土
3. 褐色砂質土
4. 暗黒灰色砂質土
5. 灰茶色砂質土
6. 灰色砂
7. 暗灰色砂
8. 灰色砂(洪水・荒砂)
9. 暗青灰色粘土
10. 黄褐色粘土



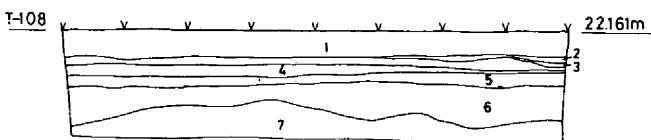
第48図 八反田T-107 ($\frac{1}{60}$)



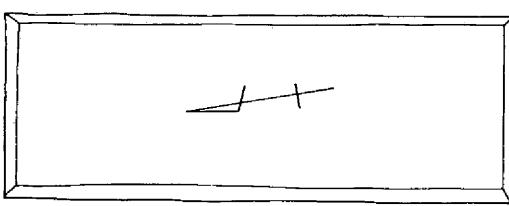
1. 淡黒灰色砂質土
2. 灰色砂
3. 褐色砂
4. 灰色粘質土(水田層)
5. 淡褐色粘質土
6. 暗灰色粘質砂
(水田層)
7. 暗褐色粘質土
8. 灰色砂(荒砂)
9. 暗黒茶灰色粘質砂
10. 黄褐色粘質微砂
11. 暗黄褐色粘質微砂
12. 灰色砂(礫混り)



第49図 八反田T-107' ($\frac{1}{60}$)



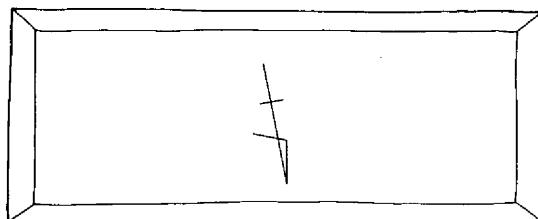
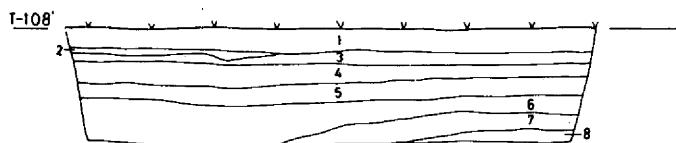
1. 灰黑色砂質土
2. 灰色砂
3. 淡褐灰色砂(硬質)
4. 淡黒灰色砂()
5. 淡茶褐色砂質土(縞文)
6. 暗茶褐色砂質土(硬質)
7. 灰色砂(洪水層)



第50図 尾 中T-108 ($\frac{1}{60}$)

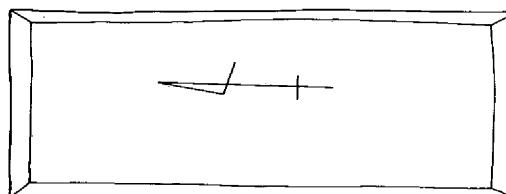
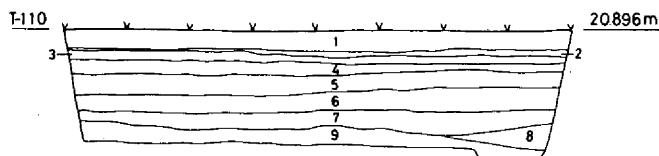
奥 迫 遺 跡

1. 灰黑色砂質土
2. 灰色砂
3. 褐色砂
4. 暗灰色粘質砂
5. 暗灰黑色粘質土(Fe)
6. 黄褐色微砂
7. 暗褐色微砂
8. 暗灰黑色粘質土



第51図 尾 中 T-108 ($\frac{1}{60}$)

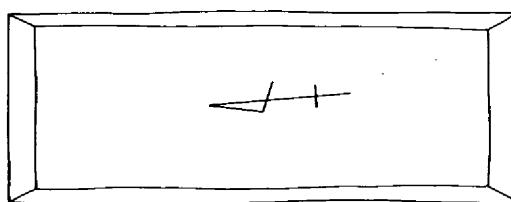
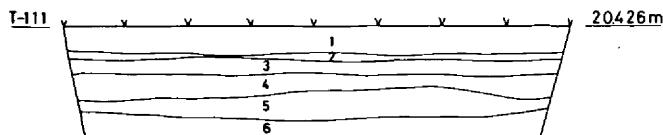
1. 暗灰色砂質土
2. 灰色砂
3. 褐色砂
4. 灰色砂
5. 黑灰色砂(粘性)
6. 灰色砂
7. 淡茶灰色砂
(褐色ブロック)
8. 暗灰白色砂(洪水層)
9. 灰白色微砂(〃)



第52図 八反田 T-110 ($\frac{1}{60}$)

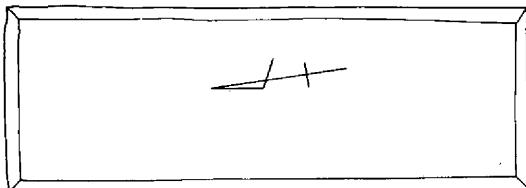
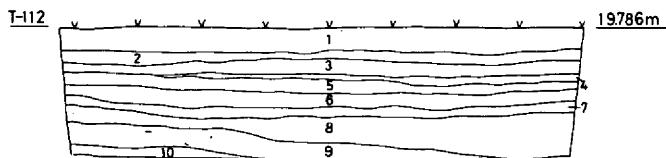


1. 灰黑色砂質土
2. 褐色砂
3. 黄褐色粘土
4. 暗茶灰色砂(荒砂)
5. 灰色砂(〃)
6. 淡灰色砂(〃)

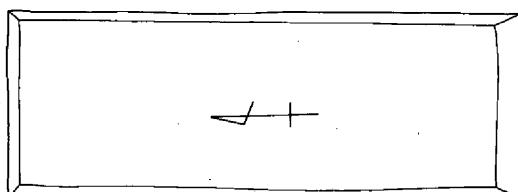
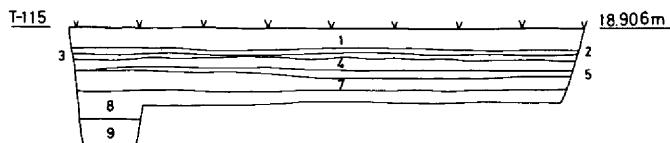


第53図 尾土井 T-111 ($\frac{1}{60}$)

奥 迫 遺 跡

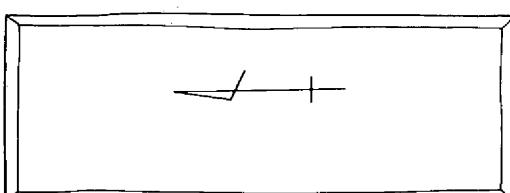
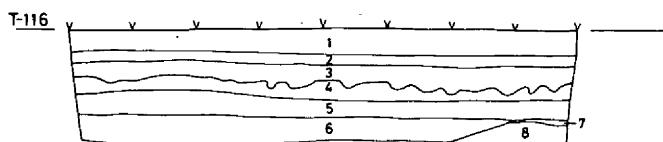


第54図 尾土井T-112 ($\frac{1}{60}$)



第55図 行部T-115 ($\frac{1}{60}$)

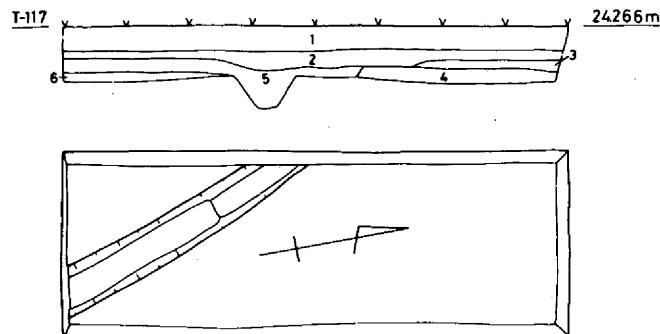
0 2m



第56図 尾中T-116 ($\frac{1}{60}$)

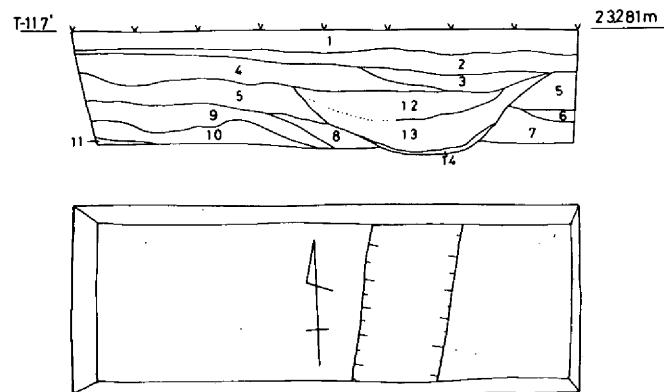
奥 迫 遺 跡

1. 灰黑色砂質土
2. 褐色微砂
3. 淡黑色砂質土
4. 灰色砂
5. 淡黑色砂
(弥生時代中期)
～古墳時代
6. 明灰茶色粘質砂
(溝を境にして北側の
ベースは荒砂であり
南側は粘土である)



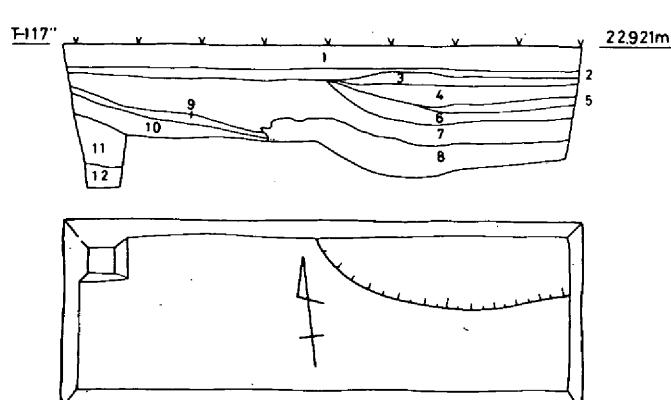
第57図 赤 岸 T-117 ($\frac{1}{60}$)

1. 暗灰色砂質土
2. 灰褐色砂(Fe)
3. 灰色砂(Mn)
4. 淡灰色砂(Mn)
5. 暗褐色砂質土
6. 暗灰色砂
7. 灰色砂質土
8. 灰色砂
9. 茶褐色砂質土
10. 灰色砂質土
11. 暗黃褐色粘土
12. 灰色砂(荒砂)
13. 灰色砂(荒砂)
14. 褐色砂(Fe)



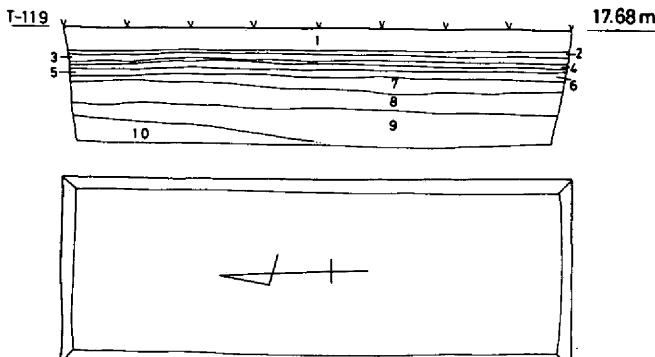
第58図 八反田 T-117' ($\frac{1}{60}$)

1. 灰黑色粘質土
2. 褐色砂
3. 灰色砂
4. 暗灰色砂
5. 灰色微砂
6. 灰色砂
7. 灰色砂(荒砂)
8. 暗褐色砂(Fe·Mn)
9. 暗灰色砂
10. 淡茶灰色微砂
11. 暗茶灰色砂(荒砂)
12. 明灰色微砂
(洪水砂)

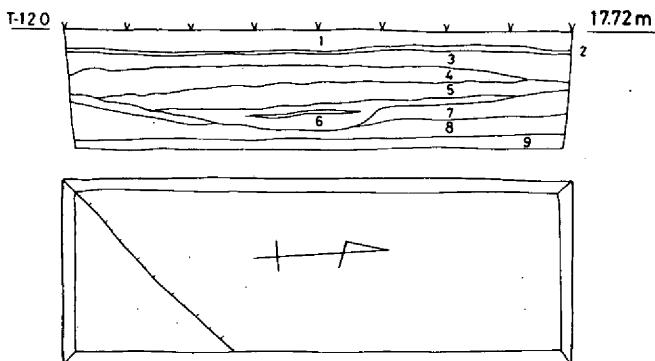


第59図 八反田 T-117'' ($\frac{1}{60}$)

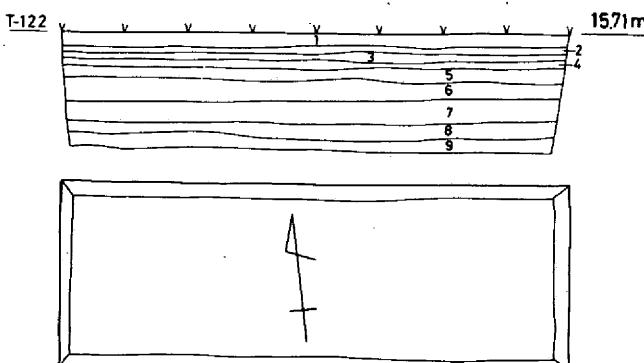
奥 迫 遺 跡



第60図 小源治T-119 ($\frac{1}{60}$)

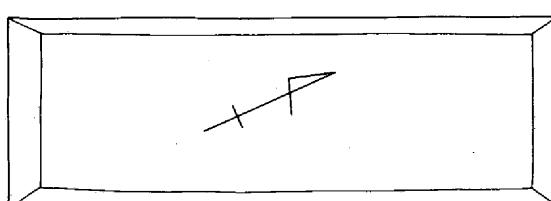
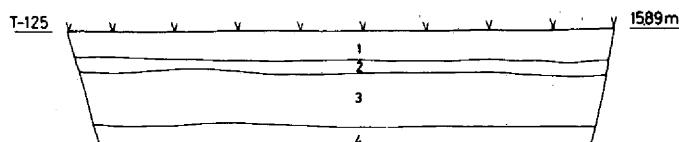


第61図 小源治T-120 ($\frac{1}{60}$)

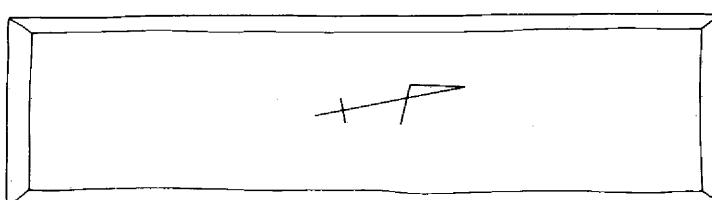
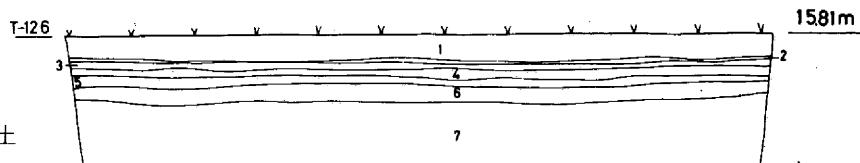


第62図 大 増T-122 ($\frac{1}{60}$)

奥 迫 遺 跡

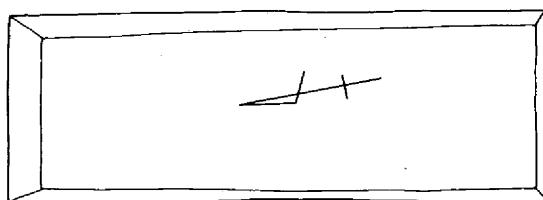
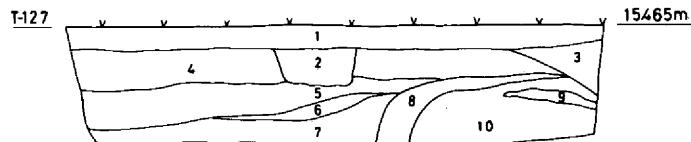


第63図 上 原T-125 ($\frac{1}{60}$)



第64図 上 原T-126 ($\frac{1}{60}$)

0 2m



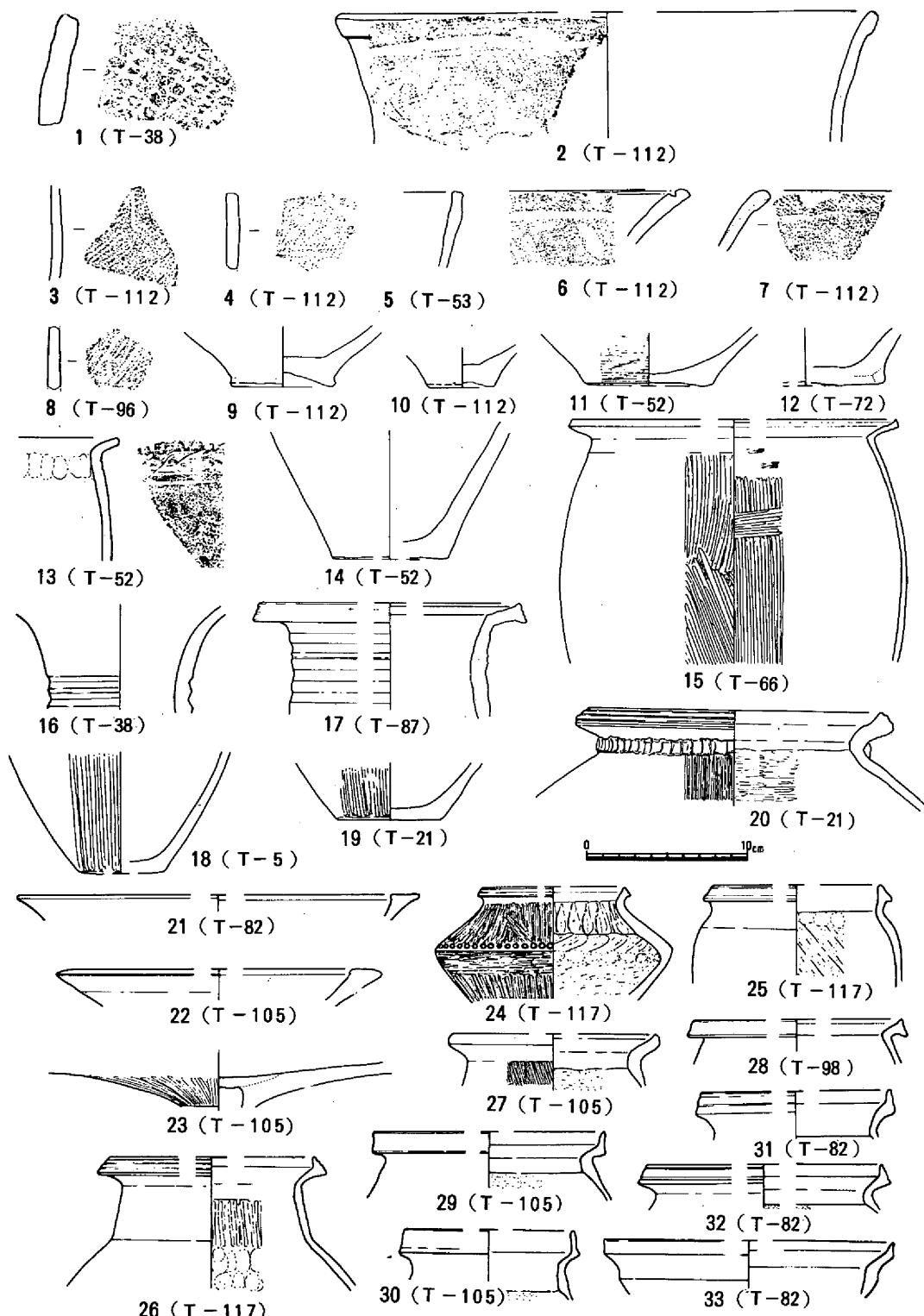
第65図 市 場T-127 ($\frac{1}{60}$)

表-1 トレンチ調査一覧表

トレンチ番号	現水田レベル(m)	整備後レベル(m)	遺構	遺物	備考	退物重量(g)	地山(cm)	掘停(cm)
1	51.65	52.20	○柱穴	須恵器 土師器	○古墳後期	1050.	-	-72
2	48.97	48.30	-	-	-	-	-	100
3	46.61	45.80	-	瓦	○明治~大正	590.0	-	-84
4	42.15	41.20	-	染付	○中世	226.3	-94	-94
5	42.94	42.50	○溝	弥生式土器 須恵器	○弥生中期 ○古墳後期	2715.0	-	-120
6	50.88	48.20	-	-	-	-	-	-
7	53.47	52.00	-	-	-	-	-	-
9	42.94	42.50	○柱穴	龟山焼	○中世 ○鎌倉~室町	617.8	-	-60
10	48.16	48.00	-	龟山焼	○鎌倉~室町 ○明治~大正	104.76	-45	-45
11	42.94	42.50	-	龟山焼	-	-	-	-44
12	44.55	44.00	-	-	-	-	-38	-38
13	42.89	41.20	○溝	龟山焼	○古墳後期 ○鎌倉~室町	694.39	-	-98
14	42.89	41.20	○溝・住居址	龟山焼	○古墳後期 ○鎌倉~室町	694.39	-	-98
15	43.37	43.00	-	-	-	-	-	-58
16	45.43	45.60	○柱穴	龟山焼 京焼	○鎌倉~室町 ○江戸~明治	1279.8	-110	-110
17	48.19	47.80	-	龟山焼	○弥生中期~後期 ○古墳前期末~後期	-	-	-84
18	44.13	44.40	-	龟山焼	○鎌倉~室町 ○江戸~明治	4050.0	-	-
19	48.23	47.80	-	-	-	-	-	-70
20	46.91	44.40	-	○柱穴	○鎌倉~室町 ○江戸~明治	226.6	-	-
21	45.43	44.00	-	須恵器・染付	○古墳後期(彦崎KII) ○古墳後期	2530.0	-	-50
22	49.31	49.20	-	杯蓋(須恵器)	○古墳後期 ○鎌倉~室町	3870.0	-	-92
23	43.04	45.90	-	杯蓋(須恵器)	○古墳後期 ○鎌倉~室町	392.6	-	-
24	43.04	44.00	-	-	○石多い、荒砂	-	-	(85)
25	56.72	55.88	-	-	○大田、石(巨)多い	-	-	-
26	54.68	54.68	-	中世龟山焼	○南々西に傾斜している	400.0	-90	-120
27	56.82	56.08	○柱穴	中世龟山焼	○炭出土、T25・26に比べて浅い、60cmで遺構	517.1	-95	-100
28	59.14	58.53	○土壙	-	○下層にゆくにしたがい無遺物、2面	-	-25	-25
29	61.12	60.37	-	-	○耕土下ベース	-	-25	-25
30	60.88	60.37	?	中世小皿	○耕土下ベース	-	-	-
31	57.23	56.08	-	中世鉢鉢	○深い感じ、石あり 2段掘り	46.3	-90	-90
32	56.96	55.92	-	中世龟山焼	○旧地形面が検出される ○西に傾斜	236.65	-50	-80
33	53.05	52.45	-	近世陶器	○巨石がゴロゴロ	551.7	-100	-100
34	61.16	59.22	-	弥生・古・中世	○荒砂が目立つ 小石 ○湧水	427.4	-	-250
35	56.33	55.92	○溝	中・近世	○深い	649.3	-	-115
36	52.16	51.58	-	-	○地表面削平	1200	-100	-100
37	64.60	63.67	-	小片5点	○旧地形面にさがる	147.4	-	-
38	61.89	60.94	○柱穴	中世陶磁	○石を含む、50cm弱	22.35	-42	-96
39	59.00	58.37	-	中世陶磁	○北側に柱穴、南に巨石	1813.8	-96	-70
40	59.12	58.37	-	中近世	○礫を含む 水田まだおし部分	91.33	-	-120
41	62.94	62.27	-	-	○旧地形面にさがる	504.8	-75	-105
42	60.81	60.00	-	-	○石を含む	-	-	-80
43	57.50	55.88	-	-	○砂と巨石	-	-	-80
44	56.82	56.08	○柱穴	中世	○砂と巨石ゴロゴロ	-	-	-100
45	56.82	55.92	-	近世近代	○遺構面あり	297.00	-50	-50
46	61.89	60.94	-	弥生・中世	○地表面削平	-	-100	-100
47	61.66	60.94	-	-	○地表面? 崩れ堆積か?	288.6	-45	-150
48	-	-	○溝、柱穴	中世	○畠地山を掘削	-	-20	-20
49	46.637	未定	-	近世 唐津 羽釜	○10月26日再確認(立会い)	-	-120	-120
50	"	-	-	中世龟山焼	○巨石が多い ○マサ砂	38.4	-100	-100
51	46.887	"	-	中世早島式・白磁	○軟かい砂質土	32.7	-	-100
52	44.037	"	○土壙	弥生前期土器・石器	○黒色土下の砂面に遺構	178.69	-	-130
53	43.447	"	-	中世陶磁	○黒色土下の砂面に遺構	810.01	-	-
54	42.552	"	○柱穴	弥生前期・古墳時代後期	○黒色土下の砂面に遺構	384.0	-	-100
55	41.552	"	-	近世小皿	○黒色土下の砂面に遺構	678.6	-	-100
56	44.652	"	-	中世早島式土器	-	73.4	-50	-50
57	43.297	"	-	中世	○湧水	61.8	-	-90
58	40.442	"	-	近世	○湧水 ○鉄分層の発達	88.92	-130	-70
59	39.542	"	-	中世龟山焼	○砂層・湧水	236.7	-	-95
60	38.277	"	-	中世	○	36.11	-	-55
61	37.252	"	-	-	○大幅削平を受けている ○湧水	-	-30	-55
62	36.717	"	-	中世	○砂層 ○湧水	25.32	-	-55
63	38.117	"	-	中世龟山焼 鉄器	○-90よりグライ化が著しい ○湧水	228.4	-	-120
64	36.727	"	-	-	○砂層 湧水 ○鉄分層が著しい	13.28	-	-75
65	35.632	"	-	-	○	-	-	-80
66	35.220	"	○土壙	中世龟山焼早島式	○礫層	-	-	-100
67	37.246	未定	○柱穴	弥生前中期	○砂層、中世多い	779.8	-	-100
68	37.300	"	-	早島・弥生中期	○砂層	1458.75	-	-115
69	35.780	"	-	中世(合子) 龟山木質片	○砂質叩しめ粘土層	67.04	-	-50
	34.415	"	○土壙	-	○井戸戸道構	45.0	-	-75

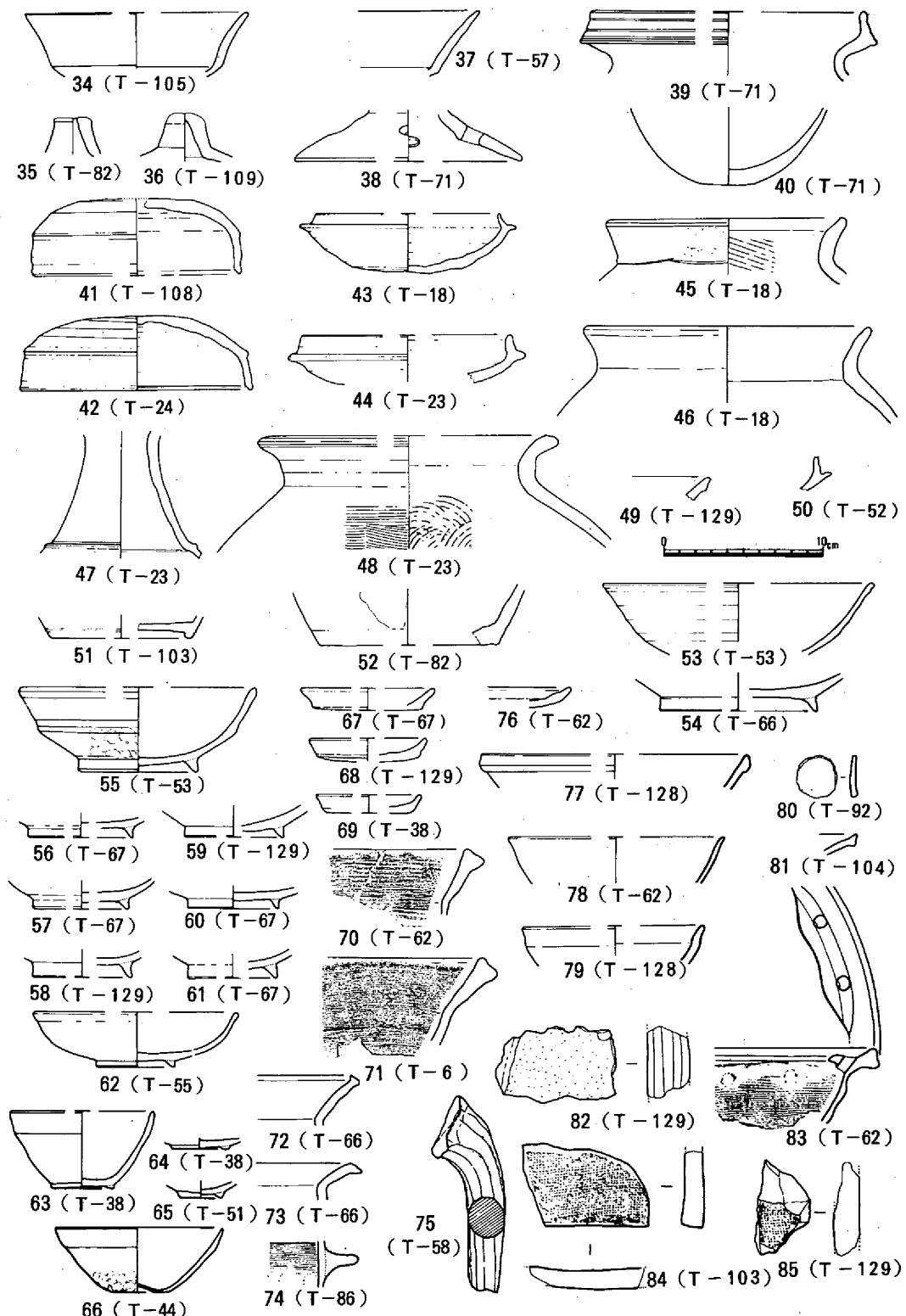
トレンチ番号	現水田レベル(m)	整備後レベル(m)	遺構	遺物	備考	遺物重量(g)	地山(cm)	掘停(cm)
70	34.214	未定		弥生前期1点・中世龜山焼	○砂と河原石	81.66	-	-120
71	32.164	"		弥生後期高杯古墳前期	○100cmまで炒。下位は礫が存在する	289.0	-	-100
72	32.234	"		弥生時代前期奈良	○礫層、自然堆積	86.9	-	-100
73	31.264	"		中世天日腕鉄器	○粘土礫層、-115cmで礫層	33.96	-	-90
74	30.009	"		古墳時代後期	○砂礫層-50cm付近より人頭大の礫がはじまる	42.16	-	-90
75	29.059	"		中世早島焼	○45cm下位でグライ化。鉄分層の発達	46.16	-	-100
76	28.676	"		弥生時代中期	○-80cm付近で弱粘性、下位洪水砂層	25.57	-	-100
77	28.171	"			○洪水砂礫層あり、-60cm付近より		-	-100
78	27.576	"			○北東部下がり	52.9	-	-120
78'	26.131	"			○-30cmにて遺構面		-	-90
78"	26.931	"		縄文時代後期		320.8	-	-60
78'''	26.101	"		縄文時代・弥生前期	○中央にたわみがみとめられる	52.9	-	-90
79	18.001	"			○湧水、砂の堆積		-	-100
80	17.006	"			○" "		-	-70
81	16.421	"			○" "		-	-100
82	17.071	"	○遺物散布面	○弥生時代後期	○-50cmより遺物が出土する	40.70	-	-80
82'	16.881	"		○中世襦鉢	○遺構面と考えられる層あり		-	-100
83	16.621	"		○" "	○小片のみ	70.41	-	-110
84	16.361	"		○" "	○湧水		-	-90
85	15.001	"	○畦畔	近世近代伊万里、京焼	○湧水	93.88	-	-110
86	-	"		弥生中期 須恵器	○荒砂	206.98	-	-100
87	17.736	"		唐津焼	○砂層(盛土)	17.26	-	-115
88	15.021	"	畦畔杭列土壙		○荒砂		-	-100
89	-	"			○杭列にシガラミ		-	-100
90	18.106	"	-		○砂層		-	-100
91	17.781	"	-		-		-	-100
92	16.926	"	○溝状遺構	○中世早島龜山焼	○湧水、溝	162.62	120.23	-90
93	19.666	"	○溝状遺構	○近世 伊万里	○砂層、湧水		-	-95
94	17.991	"	○" "	中世龜山焼	○川砂の堆積、溝か?	41.46	-	-100
95	17.676	"	-	中世龜山・白磁	○下位粘土層	321.75	-	-90
96	20.846	"		古墳土師器	○荒砂	147.25	-	-100
97	22.444	"	○土壤	土師器	○土壙上層より大型土師器片○-50cmより遺構面	0	-	-110
98	21.394	"		弥生時代前期後期・中世	○中世 小片 ○流木、湧水	73.0	-	-100
99	-	"			○北側下位粘土層 ○南に傾斜している 川原		-	-100
100	20.914	"	-	中世	-		-	-110
101	23.594	"	-		○湧水 砂質		-	-90
102	24.824	"	-		○水平堆積		-	-95
103	26.696	"	-	奈良須恵器・中世瓦片早島	○-60cmより氾乱層	433.4	-	-105
104	28.511	"	-	中世龜山焼	○-60cmまで水田面を持つ	29.8	-	-95
104'	27.181	"	○畦畔	-	○近世の水田面		-	-95
104''	25.461	"		中世早島備前焼	○104" 104" もあり (-70)	181.5	-	-90
105	24.776	"	○柱穴		○-30cmにて遺構面検出 ○硬質のベースを持つ		-	-50
105'	24.396	"	○住居址 柱穴	弥生時代後期	○遺構面あり、弥生後期 ○-30cmより包含層	1215.3	-50	-50
105''	25.281	"	○包含層	繩文式土器	○繩文式土器片-60cmより出土		-	-95
105'''	25.641	"	○溝	繩文式土器		29.5	-	-115
106	23.614	"	-	-	○洪沢砂		-	-90
106'	24.436	"	-	-			-	-95
107	23.101	"	○弥生時代後期		○山麓裾部	149.3	-	-117
107'	22.141	"	○" "		○-60cmまでに4~5面の水面層が存在する	72.0	-	-107
108	22.161	"	○古墳時代後期	-	○-40cm付近より縄文晚期土器小片	-	-	-90
108'	-	"	○弥生後期			54.4	-	-105
109	20.314	"		○近世唐津		179.8	-	-100
110	20.896	"		○鶴文式土器	○無遺物 ○井原線より南は砂地がベースか		-	-110
111	20.426	"	○" "		○-80cmの砂質中より縄文時代後期の土器片出土	25.8	-	-95
112	19.786	"	○縄文時代後期		○縄文時代後期土器片出土せず	1380.0	-	-110
112'	19.786	"	○中世 天日		-	13.7	-	-120
113	-	"	-	-	-		-	-
114	-	"	-	-	○湧水		-	-100
115	18.906	"	-	-			-	-95
116	-	"	-				-	-90
117	24.266	"	○溝	弥生時代後期	○南北に走る溝、-40cmにて遺構面	719.0	-	-50
117'	23.281	"	○溝		○幅約200cmを割り、南北に走る	515.6	-	-90
117''	22.921	"	○土壤		○時期不明	-	-	-110
118	21.706	"		中世龜山			-	-41.98
119	17.68	"		近世唐津		54.9	-	-100
120	17.72	"	○溝		○時期不明 ○-50cmより遺構面		-	-97
121	15.74	"		○近世 ○鉄器	○沼原原	25.1	-	-95
122	15.71	"				-	-	-95
123	16.346	"	○塼			-	-	-100
124	-	"	○" "	近世瓦陶磁器	○茶臼山城塁	154.2	-	-
125	15.89	"	-	弥生時代	○崩れる "	15.9	-	-100
126	15.81	"	-	-	○烟突	-	-	-110
127	15.465	"	○盛土	○近世木原窯	○犯乱原	82.8	-	-98
128	27.039	"	○小土塹	○中世瓦白青白破	○小田川の提防	714.5	-	-75
129	26.499	"	-	中世早島式土器龜山焼	○焼土面 ○-65cmにて柱穴	287.8	-	-95

奥 迫 遺 跡



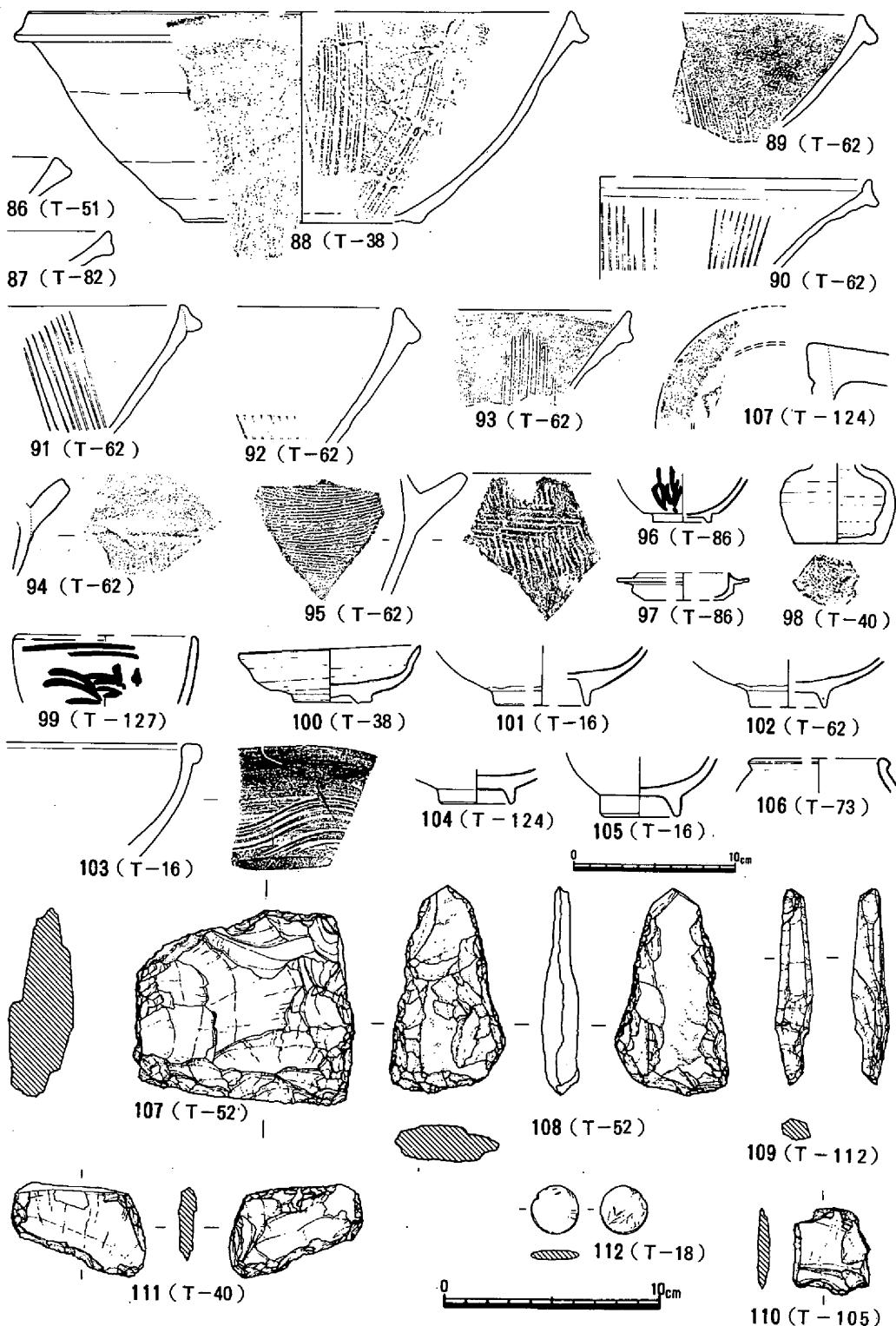
第66図 出土遺物(1)

奥 迫 遺 跡



第67図 出土遺物 (2)

奥 迫 遺 跡



第68図 出土遺物（3）

第4章 まとめ

今回の矢掛町矢掛・東三成の確認調査は計143本のトレーナーを入れることにより大略ではあるが、遺跡の範囲・内容について具体性を把握することができた。発掘調査の結果、奥迫調査区で約5000m²、西土井調査区で約13000m²、赤岸調査区で約18900m²、木舟・尾中調査区で約5000m²、大里調査区で約500m²、行部調査区で約9100m²におよぶ遺跡の存在が明らかになった。

対象地域全体を概観すると、奥迫・東土井調査区等は丘陵裾部に位置し、西向きの緩かな斜面上に遺跡が存在する。

縄文時代早期の橢円押形文土器片から始まり弥生時代前期の土壙、弥生時代中期の溝、古墳時代後期の溝、竪穴式住居、そして、中・近世の柱穴等が確認されており、なかでも中世を中心を占める。

西土井調査区は丘陵裾より平坦部に移行する変換点にあたり、扇状堆積の認められるところである。奥迫・東土井調査区と同様に中世の遺構・遺物が中心を占め、屋敷等の跡が想定できる。

大里調査区は要ガイ山より西に延びる丘陵裾部にあたる。白磁碗、天目茶碗、早島式土器、瓦、炉壁等の多彩な遺物が小範囲内の3本のトレーナーに集中して出土している。これより北東および東側にかけての緩斜面部に現在の集落と重複するであろう中世の集落を想定することができる。大里散布地の南西端に位置する。

奥迫・東土井・西土井・大里調査区からはとくに中世（12世紀後半～16世紀後半）を中心とする遺物が多く認められ、これらの調査地域において集落の中心が存在していたと考えられる。

この事実は当地に平安時代末期以後～中世中頃まで京都南禅寺領三成荘の存在していた事実の裏付けとなるものである。

赤岸調査区では現存する条里遺構の畦畔が乱れており、八幡神社より南西に延びる丘陵の一部を後世に開田した結果と考えられる。T-105'では3～4軒の竪穴式住居が重複した状況で検出されていること等より、八幡山と小谷川に挟まれた東面する山裾を中心とする一帯には弥生時代後期全般を中心とする集落が存在していたようである。赤岸調査区は弥生時代後期における東三成の中心的役割を果した居住地域に匹敵するものと考えられる。

赤岸調査区より南に下がった尾土井調査区ではT-112より縄文時代後期の土器片（1380g）がまとまって出土している。水田面よりマイナス80～100cm間の若干南に下降する第9層中からである。磨滅の著しい小片ではあるが、器形の特徴から彦崎K II式に比定できる。これらの土器の出土により従来遺跡数の少ない彦崎K II式の分布が一つ増加することになると同時に、

奥　迫　遺　跡

茶臼山の東側山裾に縄文時代後期後半の遺構の存在する可能性を示唆している。

従来、矢掛町内では弥生時代前期についても遺構・遺物の発見例はなく、これらはまったく始めてのケースである。

行部調査区では茶臼山城の壕跡が対象となっており、現在は水田に利用されているが、延長約600m、幅約50mを測り大規模な工事の跡を留めている。毛利家記には天正11年（1583）に毛利元清が猿掛城から茶臼山城に移ったことが記録されており、茶臼山城は当時の全国的な動向と同じように山城から平山城に移城が実施された例と考えられている。備中南部の中世～近世の動向を語る資料としては欠くことのできないものである。

一応、羅列に終始したが、88.2haのうちの0.1haという確認調査ゆえに多くの不安を残していることも事実であり、とくに山陽道・条里遺構については現在の機能と重複していることが考えられ、今後の圃場整備計画の実施に際して関係者間の連絡、協議の徹底を切願するものである。

また、対象地外でも本調査中に遺物の発見を見る機会があり、周知の遺跡でない場所においても遺構の存在する事実を理解していただきたい。

参考・引用文献

矢掛町史 本編 史料編 1982年

池邊彌『和名類聚抄郷名考證』 1966年

永山卯三郎『岡山縣農地史』 1979年

小田郡誌 上巻 1941年

間壁忠彦「岡山県矢掛町白江遺跡」『倉敷考古館研究集報』第1号 1966年

間壁忠彦・間壁葭子「岡山県矢掛町芋岡山遺跡発掘調査報告」『倉敷考古館研究集報』第3号 1967年

間壁忠彦「縄文後期彦崎KII（竹原）式土器をめぐって」『倉敷考古館研究集報』第15号 1980年

下澤公明・大谷 猛「毎戸遺跡の調査」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告（5）』 1974年

奥迫遺跡



1. 矢掛・東三成地区圓墳整備予定地 (航空写真)
(昭和46年以前の撮影)

図版 1

奥迫遺跡

図版 2



1. 東三成全景 (南東から)



2. 小谷川河道痕跡 (北から)

奥迫遺跡

図版 3



1. 東土井遺跡 (北から)



2. 奥迫遺跡 (南西から)

奥迫遺跡

図版4



1. 東三成の条里 (南から)



2. 茶臼山城の壇跡 (北東から)

奥　迫　遺　跡

図版 5



1. 東土井 T-1 (南から)



2. 東土井 T-5 (南西から)



3. 東土井 T-16 (西から)



4. 東土井 T-18 (西から)



5. 東土井 T-27 (南から)



6. 東土井 T-32 (南西から)



7. 東土井 T-34 (西から)



8. 東土井 T-39 (北から)

奥 迫 遺 跡

図版 6



1. 東土井 T-46 (北から)



5. 奥 迫 T-53 (北東から)



2. 奥 迫 T-51 (南東から)



6. 奥 迫 T-62 (東から)



3. 奥 迫 T-52 (南東から)



7. 西土井 T-66 (南西から)



4. 奥 迫 T-53 (東から)



8. 西土井 T-67 (南東から)

奥迫遺跡

図版7



1. 西土井 T-69 (西から)



5. 窯田 T-85 (東から)



2. 木舟 T-78 (南西から)



6. 窯田 T-88 (東から)



3. 宮ノ前 T-78'' (北東から)



7. 門田 T-93 (南西から)



4. 沖ノ後 T-82 (南西から)



8. 谷田 T-100 (北西から)

奥 迫 遺 跡

図版 8



1. 赤 岸 T-105(東から)



5. 尾 土 井 T-112(北西から)



2. 赤 岸 T-105(北西から)



6. 大 淹 T-122(南東から)



3. 尾 中 T-105(東から)



7. 上 原 T-125(東から)



4. 尾 中 T-105(南東から)



8. 市 場 T-127(北西から)

図版9

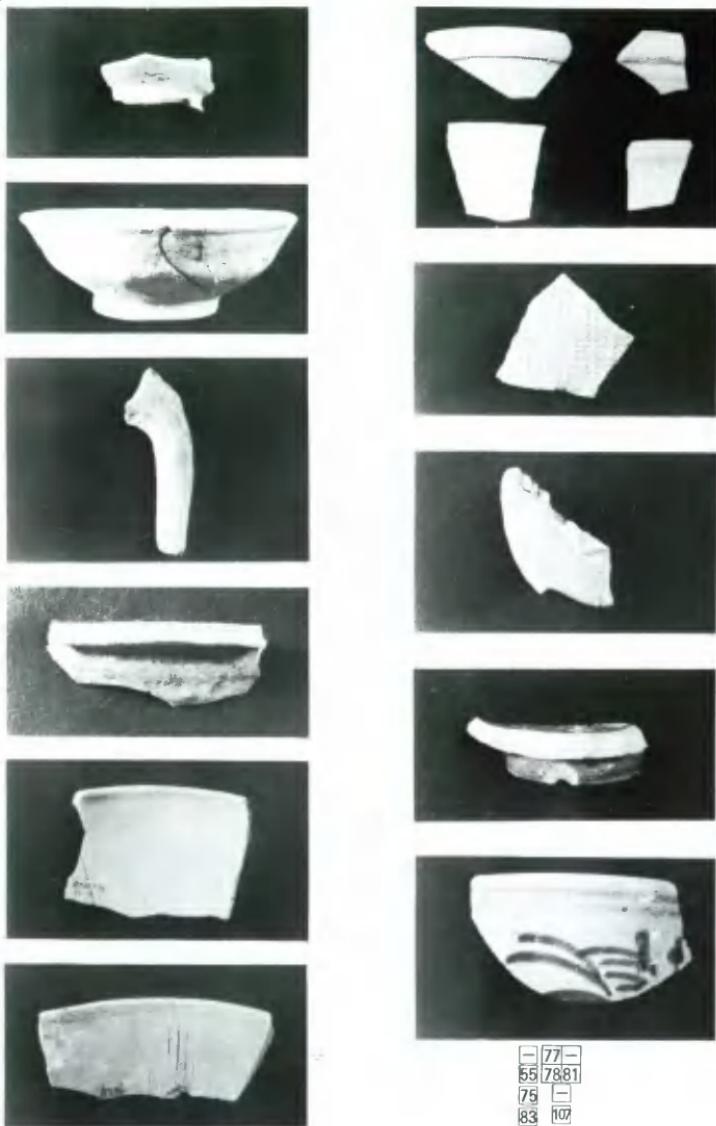


1. 出土遺物 (1)

[1]	108	108
[2]	109	109
[3]	11	15
[4]	17	36
[7]	24	39
[9]	25	

奥迫遺跡

図版10



1. 出土遺物（2）

—	77—
55	7881
75	—
83	107
88	104
93	99

かみ なが の
上 長野 A 遺跡

例　　言

1. 本書は、昭和59年度国庫補助事業にかかる苦田郡鏡野町河本所在上長野（かみながの）A遺跡の確認調査報告書である。
2. 発掘調査は、昭和59年11月12日から、昭和60年2月8日にかけて実施した。現地発掘調査の実施にあたっては、専門委員会の指導・助言のもとに、岡山県古代吉備文化財センター専門職員岡田 博（県文化課兼務）が担当した。なお、鏡野町教育委員会をはじめ、地元の方々の暖かいご協力をいただいた。記して深甚の謝意を表する次第である。
3. 遺構図の作成は岡田が行い、一部国貞圭也の援助を受けた。現地での写真撮影は岡田があたり、遺物写真（石器）については古代吉備文化財センター専門職員井上 弘の撮影によるものである。
4. 報告書に掲載した遺物の実測の作成については、土器・陶磁器については岡田が行い、石器については山田雅子が行った。浄写もそれぞれの分担によって行った。
5. 出土遺物・写真・実測図の整理・作成等は昭和59年12月から昭和60年2月にかけて、古代吉備文化財センター（岡山市西花尻1325-3）にて行い、それらは同所に保管している。

目 次

例 言

本文目次

第1章 歴史的・地理的環境	87
第2章 調査の経緯	90
第1節 調査に至る経過と概要	90
第2節 調査体制・日誌抄	92
第3章 発掘調査の概要	94
総 括	109

図 目 次

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡分布図 ($\frac{1}{25,000}$)	88
第2図 周辺遺跡出土遺物実測図 ($\frac{1}{3} \cdot \frac{1}{4}$)	89
第3図 トレンチ設定図 ($\frac{1}{3,000}$)	91
第4図 トレンチ土層断面図 (1) (T-1・2・4・5~7・9 ; $\frac{1}{80}$)	95
第5図 トレンチ土層断面図 (2) (T-8・10・11 ; $\frac{1}{80}$)	96
第6図 トレンチ土層断面図 (3) (T-13~15・17・19・20・24 ; $\frac{1}{80}$)	97
第7図 トレンチ土層断面図 (4) (T-42・25~27・38・43 ; $\frac{1}{80}$)	98
第8図 トレンチ土層断面図 (5) (T-49・48・33 ; $\frac{1}{80}$)	99
第9図 トレンチ土層断面図・平面図 (6) (T-50・30・54・51・56 ; $\frac{1}{80}$)	100
第10図 トレンチ土層断面図・平面図 (7) (T-52・53・55 ; $\frac{1}{80}$)	101
第11図 トレンチ土層断面図・平面図 (8) (T-31・32・36・46 ; $\frac{1}{80}$)	102
第12図 トレンチ土層断面図・平面図 (9) (T-47 ; $\frac{1}{80}$)	103
第13図 出土遺物実測図 (1) (石器 ; $\frac{1}{3}$)	104
第14図 出土遺物実測図 (2) (弥生式土器 ; $\frac{1}{4}$)	104
第15図 出土遺物実測図 (3) (須恵器 ; $\frac{1}{4}$)	105
第16図 出土遺物実測図 (4) (須恵器・瓦質土器・土師器 ; $\frac{1}{4}$)	105
第17図 出土遺物実測図 (5) (陶磁器・土錐・備前焼 ; $\frac{1}{4} \cdot \frac{1}{3}$)	106

図版目次

- 図版1-1 上長野A遺跡（矢印）・発掘調査区域全景（南西から）
2 発掘調査区全景（北東から）
- 図版2-1 発掘調査区東半部（西から）
2 発掘調査区西方南辺部（西から）
- 図版3-1～8 T-1・3～9
- 図版4-1～8 T-10・13・14・16・17・19・23・24
- 図版5-1～8 T-26・29・30・33・38・39・41・42
- 図版6-1 T-55 壱穴式住居と土層断面（南東から）
2 T-55 壱穴式住居（北から）
- 図版7-1 T-52（北東から）
2 T-52 溝状遺構と柱穴（北から）
- 図版8-1 T-54 土壙（南から）
2 T-53 柱穴群（北東から）
- 図版9-1～8 T-43～45・48～51・56
- 図版10-1 T-36 溝と土層断面（東から）
2 T-46 柱穴群と土層断面（東から）
- 図版11-1 T-47 土層断面と溝検出状況（南西から）
2 T-47 溝完掘状況（南西から）
- 図版12 作業風景
- 図版13 出土遺物（1）（土器・土製品）
- 図版14 出土遺物（2）（石器）

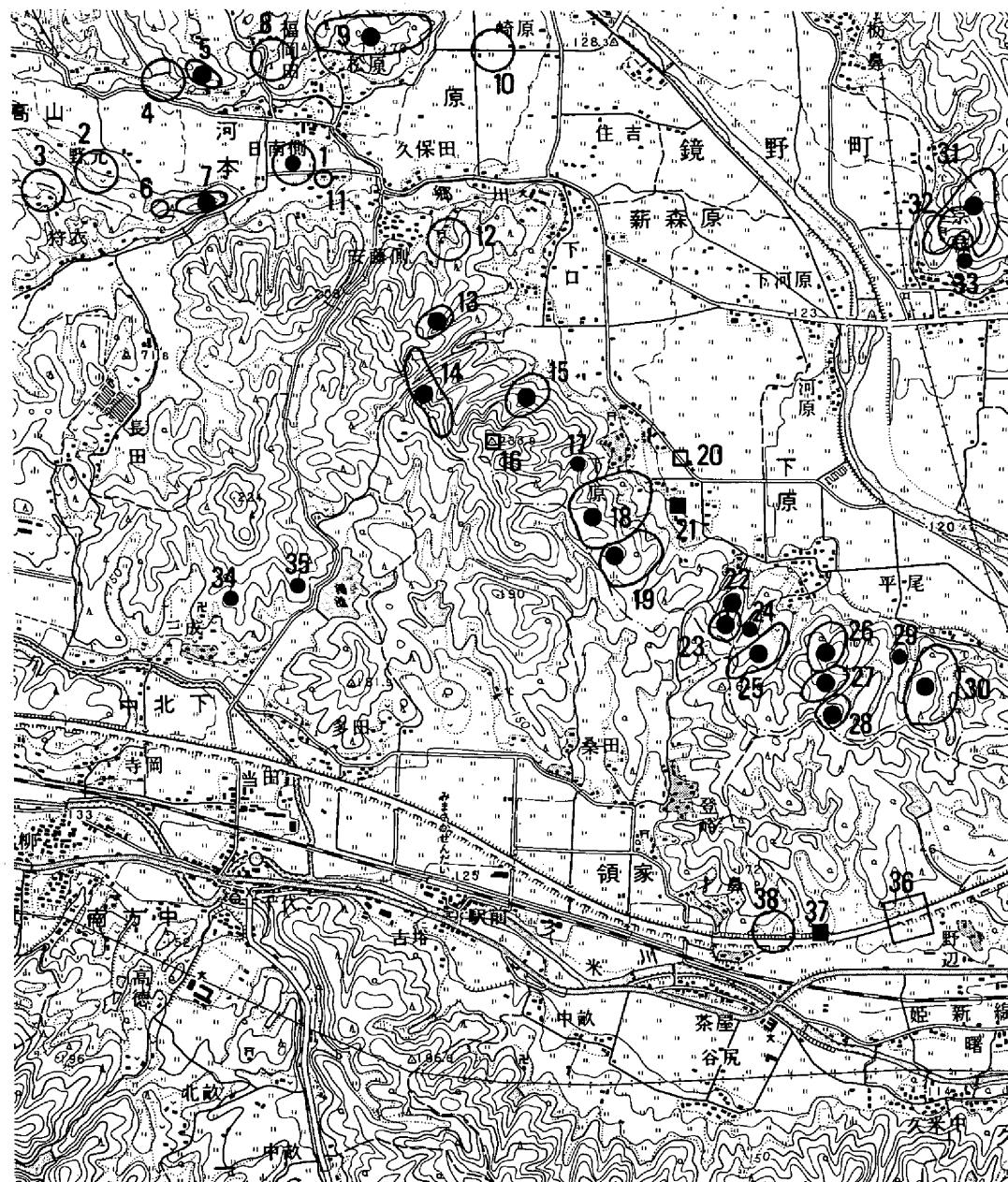
第1章 歴史的・地理的環境

鏡野町は、県北最大の都市津山市の西辺に接し、岡山県の三大河川のひとつ、吉井川がほぼ中央部を貫流する山あいの町である。町域の過半は山林に占められているが、南部に至ると香々美川と吉井川が合流する肥沃な沖積平野がひろがっている。町域は南北に細長く、北西側に富村・久世町、北側は奥津町、南側に久米町と接し、山稜・丘陵で囲まれる。古来、吉井川の河川交通はもとより、現在では国道179号線となっている旧伯耆街道が通じ、陰陽を結ぶ交通路が発達しており、鳥取県倉吉市に至っている。また、南側の久米町境の丘陵を越えると、奈良時代の久米郡衙と推定される宮尾遺跡（第1図-36）（註1）や久米廃寺（第1図-37）（註2）が出雲街道沿いに並存しており、東西あるいは南北の交通路に極めて近い位置を占めていることがわかる。

原始古代の遺跡は、主に町域の南半部に集中し、香々美川や吉井川を見下ろす低位台地や丘陵上には、集落遺跡をはじめ数多くの古墳が築造され、県下でも有数の古墳分布地帯として特筆される。香々美川を東に見下ろす丘陵上には、縄文時代早期の住居址が発見された複合遺跡、竹田遺跡（註3）が存在し、県下でも最古の住居跡として注目される。弥生時代の集落跡も、平野をとりまく低丘陵やその縁辺部を中心に形成され、資料館に所蔵されている採集遺物では、土器・石器を中心とした出土遺物が目立つ。また10数年前には、北西部の吉井川中流域の東方丘陵縁辺で2個の銅鐸が発見されたが、現在その所在は不明である。古墳時代では、前述のとおり、県北有数の古墳が数多くみられ、第1図-24の観音山古墳や、土居妙見山古墳、あるいは竹田妙見山古墳、赤嶺古墳など、前期古墳（前方後円墳）の存在が特徴的である。奈良時代には、713年（和銅6年）に備前国より分国して成立した美作国苦田郡の西方の一画を占め、南の久米郡北縁部の中心地域と接する。美作国を中心、美作国府は、直線距離で東方約6kmに位置する。中世以降から戦国時代にかけては、目崎城（第1図-16）や葛下城・樹形城・日上城・小田草城などの山城が数多く築かれ、戦国時代の争乱の史実に対応している。近世では、主に北部では、タタラ製鉄が盛んに行われ、良質の砂鉄の産出を背景に、古代以来、「美作の鉄」の産地として栄えた。

遺跡は、吉井川に注ぐ郷川流域の海拔約139mの小冲積平野に位置するが、第1図に掲げるよう遺跡分布の濃密な地帯ではなく、むしろ古墳などやや疎な分布を示す地域である。近隣の数か所の遺跡では弥生時代の石器が採集されており、古墳がわずかながら存在することも、よく知られている。丸山遺跡（第1図-8）では、第2図に掲げる花崗岩製の石錘が、鍛冶屋遺跡（第1図-6）では砂岩製の石斧（第2図）が採集されている。また上長野A遺跡付近では第2図-2の扁平片刃石斧が採集されている。更に、北東方約800mに位置する二反田B遺跡では、弥生

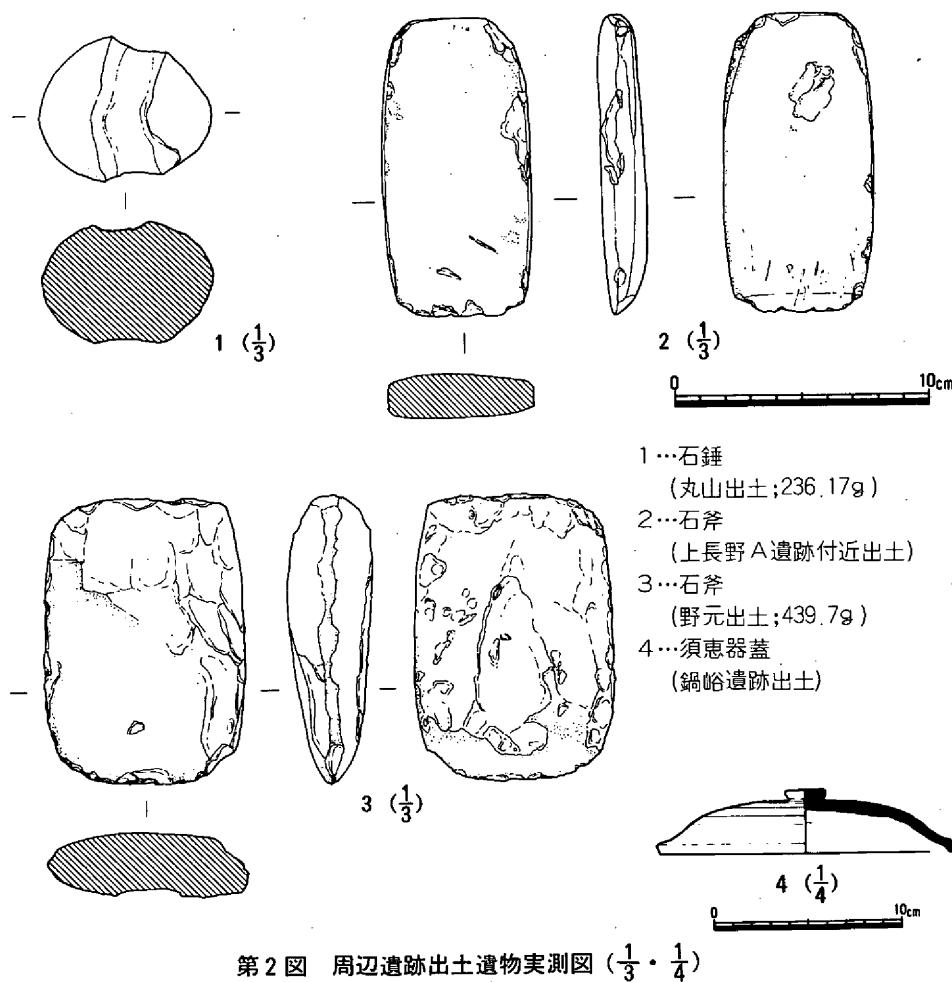
上長野A遺跡



1. 上長野A遺跡
2. 野元遺跡
3. 高山古墳群
4. 鍋峪遺跡
5. 河本古墳群(6・7号墳)
6. 鍛治屋林遺跡
7. 河本古墳群(3～5号墳)
8. 丸山A・橋本B遺跡
9. 原古墳群(10～22号墳)
10. 二反田B遺跡
11. 三反田B遺跡
12. 丸山遺跡
13. 森原古墳群
14. 下原古墳群(57～62号墳)
15. 下原古墳群(63・64号墳)
16. 目崎城跡
17. 下原53号墳
18. 城山銅山跡
19. 下原古墳群(36～43号墳)
20. 下原構跡
21. 金剛寺跡
22. 下原35号墳
23. 下原古墳群(32～34号墳)
24. 下原觀音山古墳(31号墳)
25. 下原古墳群(27～30号墳)
26. 下原古墳群(1～7号墳)
27. 下原古墳群(8～11号墳)
28. 下原古墳群(25・26号墳)
29. 下原11号墳
30. 下原古墳群(12～24号墳)
31. 宗枝古墳群
32. 宮の谷散布地
33. 伊勢領古墳
34. 三成古墳(国指定史跡)
35. 鴻の池2号墳
36. 宮尾遺跡(久米郡衙推定遺跡)
37. 久米廃寺
38. 領家遺跡(34～38：久米町)

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡分布図 ($\frac{1}{25,000}$: 国土地理院)

上長野A遺跡



式土器が多量に出土したことが伝えられ、吉井川水系の弥生時代集落の存在が推定される。遺跡の北西方および北東方の低丘陵上には河本古墳群が散在し、小平野を見下ろしている。やはり北西方の溜池の南辺部には奈良時代の須恵器片が散布する鍋峪遺跡が知られ（第1図-4）、第2図-4の須恵器蓋が採集されている。このように、遺跡をとりまく丘陵上には少なからぬ石器出土地点や古墳が存在しており、その周縁部には集落跡の存在が十分に予想されている。

（註）

（註1）岡山県埋蔵文化財発掘調査報告4（中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査2）1974年

岡山県教育委員会。

（註2）註1文献。岡山県埋蔵文化財発掘調査報告24（中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査－補遺編一）1978年 岡山県教育委員会。

（註3）土居徹ほか「竹田墳墓群」（竹田遺跡発掘調査報告第1集）鏡野町教育委員会1984年刊。

第2章 調査の経緯

第1節 調査に至る経過と概要

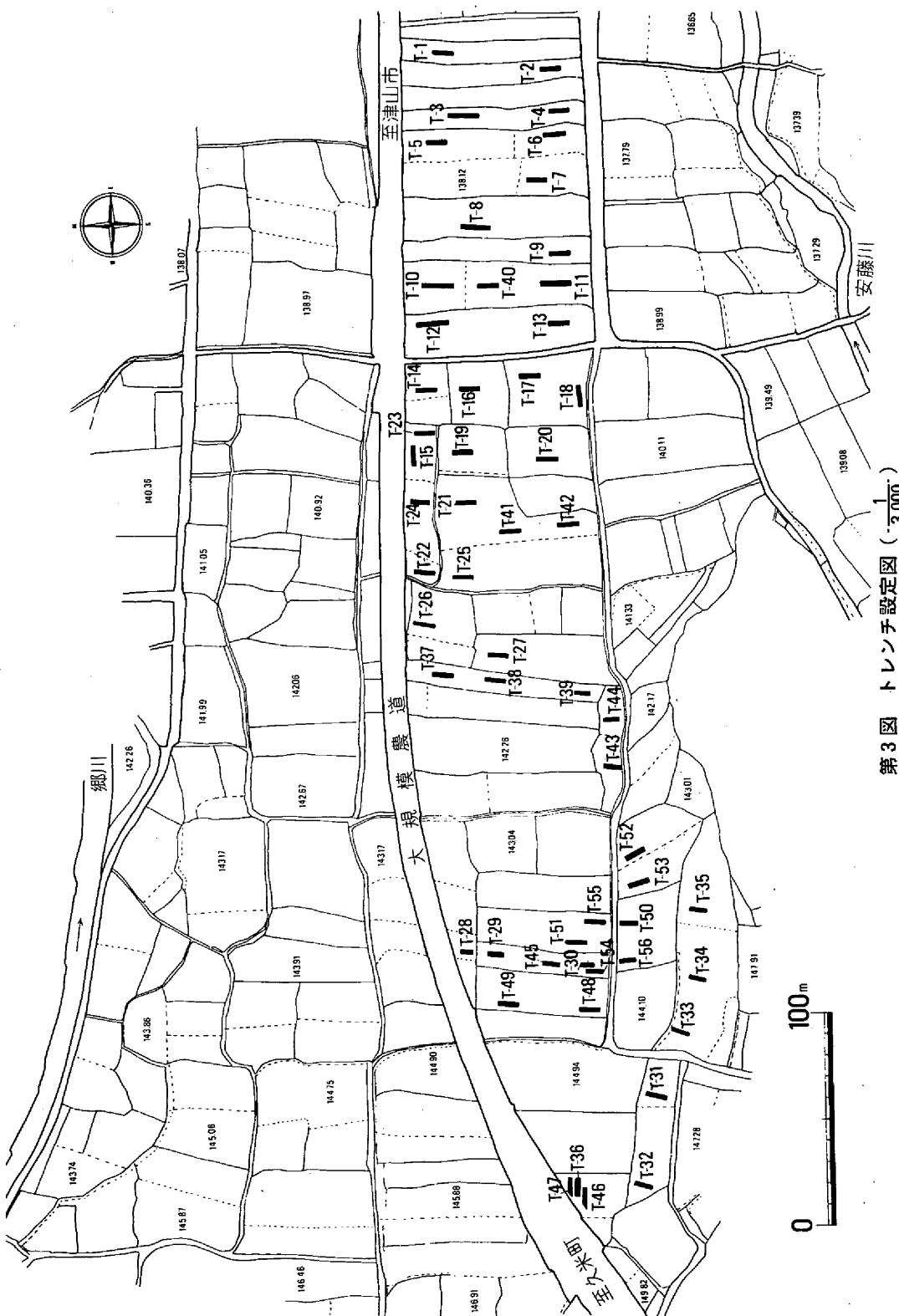
鏡野町河本地区では昭和58年度より団体宮闈場整備事業が実施されているが、当該地区の一部には2カ所の周知の遺跡すなわち上長野A遺跡・三反田B遺跡が存在していることから、その取扱いについては昭和58年度より届出・協議が進められていた。その結果、後者については、再踏査を実施したところ、遺構・遺物の存在する可能性が極めて少ないと判明し、安藤川の河道肩口という地形的な位置からも遺跡として取扱うことには、その構成要件を満たさず、確認調査実施対象から除外することとした。前者については、昭和58年度の協議に基づいて、昭和59年度国庫補助事業として確認調査を実施する運びとなり、昭和59年11月からその遺跡の規模・範囲・性格等を把握するための発掘調査を行うこととなった。

遺跡の現状は水田で、北は郷川、南は安藤川に狭まれた狭小な沖積平野に位置し、サヌカイト剥片やサヌカイト製石器（第13図-1）などが採集されたことに、遺跡命名の端緒があった。当初予定していた確認調査実施範囲は、大規模農道の南側一帯の水田・畑で、約27000m²であったが、更に精密な基礎資料を得るために、西方の野元遺跡との間の水田・畑地帯にも確認調査の実施範囲を拡張した結果、最終的には約50000m²の範囲にトレンチ56本を設定した。トレンチは基本的に2×10mを基準規模とし、2×15mあるいは2×3～8mのものを状況に応じて設定した。確認調査実施面積は、約1040m²である。

その結果、検出遺構としては当初予想された遺跡の中心部では、遺構は発見できなかったが、西方調査区では、堅穴式住居・土壙・溝・柱穴などが検出され、予想外の成果をあげた。また出土遺物は、量的には少量であるが、縄文時代から近世にかけての指標となる石器・土器・陶磁器片が認められた。特に縄文時代に比定される石器の存在は、縄文時代の遺跡の存在をうかがわせる重要な資料と考えられる。また、弥生時代中期に比定される堅穴式住居の存在は、丘陵縁辺部に広がる集落の存在が推定され、近隣の遺跡との関連が注目される。出土遺物の中では、とりわけ備前焼や須恵器（勝間田焼）・土師器・瓦質土器片が比較的多くみられ、中国製青磁・白磁片もわずかに出土している。このことから、鎌倉時代には、かなりの規模の集落が存在したことは明らかではあるが、後世の耕作によってその痕跡の大半が失われていることが判明した。しかし部分的にはT-53のように小柱穴群やT-36の溝状遺構が残存している地点もあった。近世以降、積極的な水田経営が進められ、現在の1枚あたり1～2反前後の良好な水田に継承されている。

発掘調査の実施にあたっては、地元鏡野町教育委員会・町建設課は元より、地元の方々の暖かいご協力とご援助を賜った。記して深甚の謝意を表する次第である。

上 増 野 A 遺 跡



第3図 トレンチ設定図 (1/3,000)

第2節 調査体制・日誌抄

発掘調査は、昭和59年度国庫補助事業として岡山県教育委員会が専門委員会の指導・助言の元に実施した。

調査組織

専門委員

鎌木義昌（岡山理科大学教授、岡山県文化財保護審議会委員）

近藤義郎（岡山大学教授、岡山県文化財保護審議会委員）

水内昌康（岡山県文化財保護審議会委員）

岡山県古代吉備文化財センター

所長 松元昭憲（教育庁文化課長兼務）

次長 橋本泰夫

総務課長 佐々木 清

調査課長 河本 清（教育庁文化課埋蔵文化財係長兼務）

文化財保護主査（調査担当）岡田 博（教育庁文化課兼務）

<発掘作業協力者>

安藤克己・池田武志・池田保・岡本卓夫・國貞圭也・小谷利一・坂田実・武本淨・藤木正・藪木太郎・安藤時子・西村孝海

<報告書作成協力者>

岡本香織・山田雅子・前原節子

<日誌抄>

昭和59年11月12日（月）～17日（土）

器材搬入。発掘着手前の全景写真撮影。トレーナーT-1～13設定、順次実測、写真撮影。

11月19日（月）～22日（木）

T-1～4半截掘下げ開始。T-11・14～17発掘作業、写真撮影・実測。

11月27日（火）～30日（金）

T-4～6写真撮影。T-16・18掘下げ完了、写真撮影・実測。T-21～23設定、順次掘下げ開始。T-24～27設定。T-24では弥生中期土器出土。発掘区域の拡張について、地元の了承を得、町当局に通知、西方地区に新たなトレーナーを設定する。

12月3日（月）～6日（木）

T-15・21～25写真撮影。T-28～30設定。T-30では、弥生中期土器片がうすい包含層から比較的多く出土。T-31～35設定。T-37～39設定。T-36設定発掘、弥生式土器片出土。

上長野A遺跡

12月10日（月）～15日（土）

レベル移動、東方上長野A遺跡周辺のトレンチ配置図作成。一部トレンチについては埋戻しを開始する。T-36精査、弥生中期に比定される溝検出。

12月17日（月）～26日（水）

T-36写真撮影・実測。東方調査区、排水作業後、埋戻し作業。26日をもって昭和59年の作業最終日とする。

昭和60年1月7日（月）～12日（土）

好天が続き、発掘作業がはかどった。8日には、文化庁河原主任調査官来跡、調査状況観察。更に専門委員会開催、指導を得る。T-43・44新設、T-31・32発掘開始。T-40新設、発掘後、写真撮影、実測。埋戻し作業再開。

1月17日（木）～22日（火）

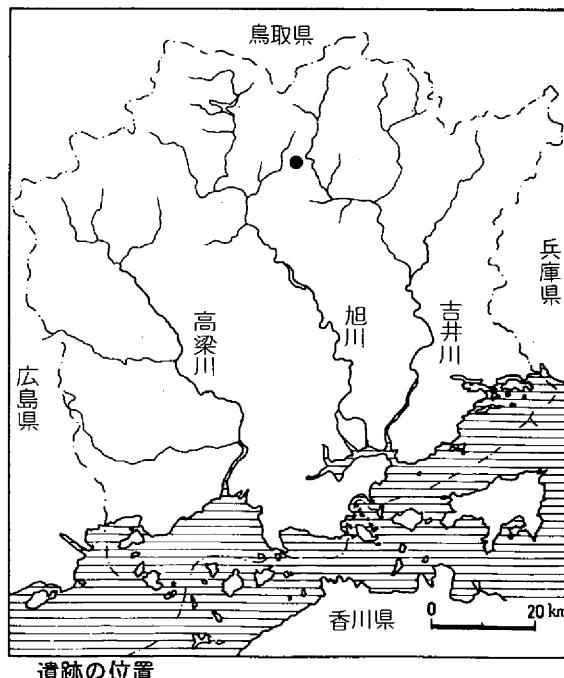
T-52・53、T-49・50新設掘下げ作業。T-46・47新設、T-36で検出した溝の行方と他の遺溝の存在を確かめる。

1月30日（水）～2月2日（土）

降・積雪あり。T-50～56設定、T-54では弥生時代中期の土壙、T-55では同時期の竪穴式住居が検出される。T-50では中世の小柱穴群残存。

2月4日（月）～8日（金）

T-50～56、検出遺構清掃、写真撮影、実測。最終設定トレンチの埋戻し作業。7日、器材清掃荷作り。8日をもって器材撤収、全ての発掘調査を完了する。



第3章 発掘調査の概要

上長野A遺跡は、第3図に示すT-10・11・40を設定した水田部に限定されるが、当初計画した確認調査実施予定範囲は、これより東方約100mから西方約200mの、ほぼ32,000m²を対象とした広い地域である。後に、西方約300mから400mの範囲に確認調査を実施したが、これは北西方約700mに位置する野元遺跡との関連や、土器片の出土が伝えられているためである。

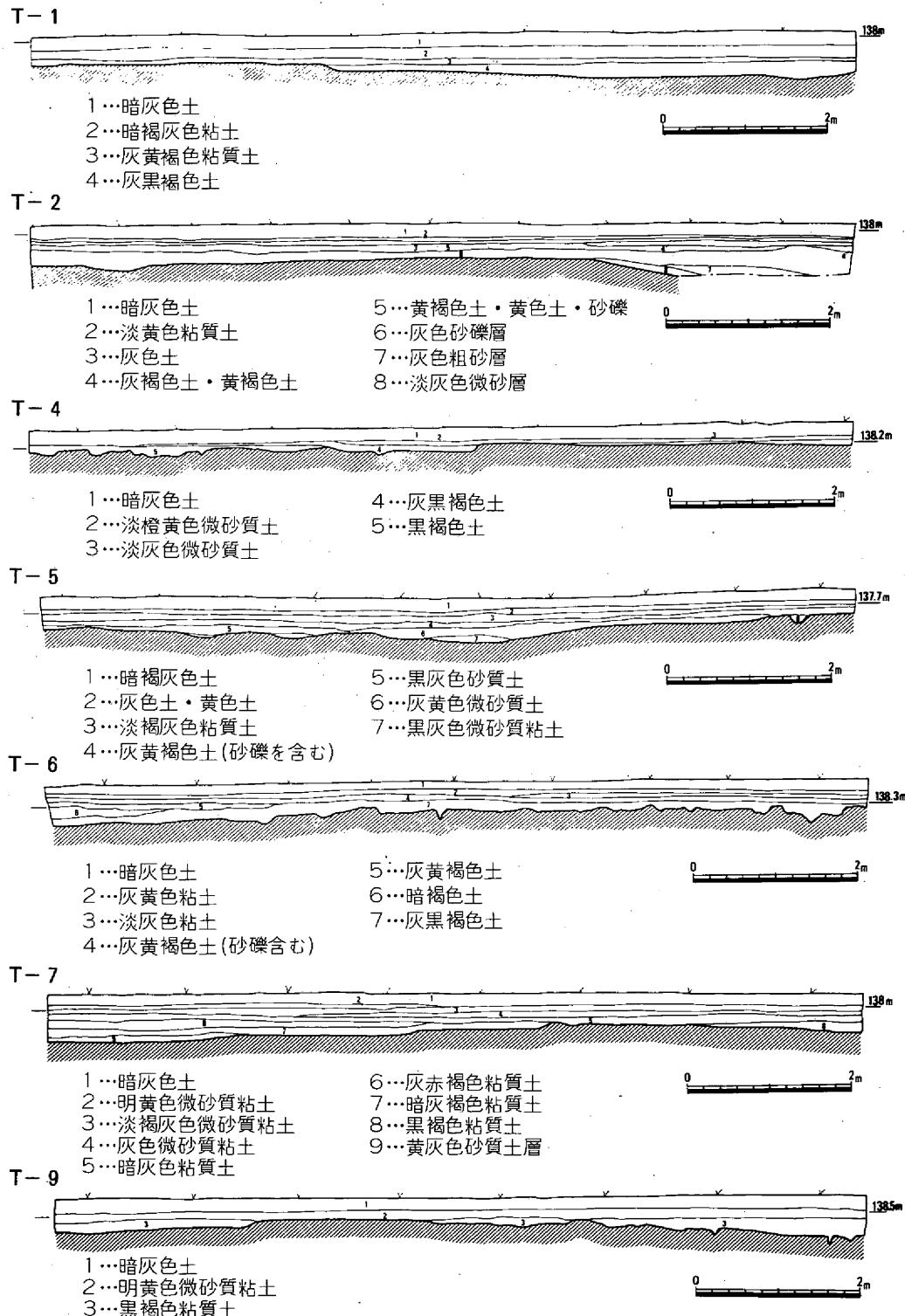
発掘調査区域は、ほぼ東西方向の細長い、大半が水田となっている地域で、東から西にかけて徐々に地形が高まり、上長野A遺跡の中ばから最西端のT-36付近とでは、約7mのレベル差がある。地勢的には、北方の郷川の流路方向に沿ってほぼ北西から南東方に沖積作用によって現地形が形成され、更に南方の安藤川によってもまた、南側の小規模河岸段丘が形成されるという状況が観察される。

トレントの設定については、ほぼ南北方向のトレントを設定し、その西壁を写真撮影・実測図作成の対象とした。東西方向その他のトレントについては、原則として北側の土層壁について記録を残すこととした。遺物のとりあげは、トレントごととし、遺物番号のあとに(T-5)と出土トレントを記した。以下、トレント発掘調査の概要と成果について説明を加えたい。

T-1～T-13およびT-40までのトレント発掘区は、特に上長野A遺跡がその範囲に含まれる、今回の確認調査の主眼とした地域で、T-1の水田面が海拔138m、T-13の水田面の海拔が約139mを測り、比較的緩かな地形変化を示している。平均すると約15～25cmの褐色ないしは黒灰色を呈する耕作土を除去すると、灰黄色あるいは灰色あるいは淡黄色を呈する微砂質土が互層となった客土層が検出されている。この客土層から第16図-1の須恵器片が出土しており、付近丘陵から持ち運ばれた土の中に古墳の遺物が混入したものと考えられる。地山は、灰黄色を呈す微砂質基盤層は存在せず、この地区では、砂礫層ないしは、淡灰黄色を呈する粘土層が部分的にみられる。砂礫層はブロック状となっていたり、流水によって生じた凹部に堆積しており、その断面は溝状をなす場合もある(T-11)。表層部とこの地山との間は灰色土・灰黄褐色を呈する粘質土や砂質土が堆積しているが、T-6・7・9では灰黒褐色や黒褐色を呈する粘質土層が下層部に存在し、あたかも良好な包含層と考えられたが、全く遺物が出土していない。これは黒ボクの影響を受けた、古い堆積層と考えられる。したがって、この地区では出土遺物の大半は、表土から比較的浅い土層や客土からのみ、わずかな出土遺物が得られたに過ぎず、明確な遺構の存在は皆無であった。

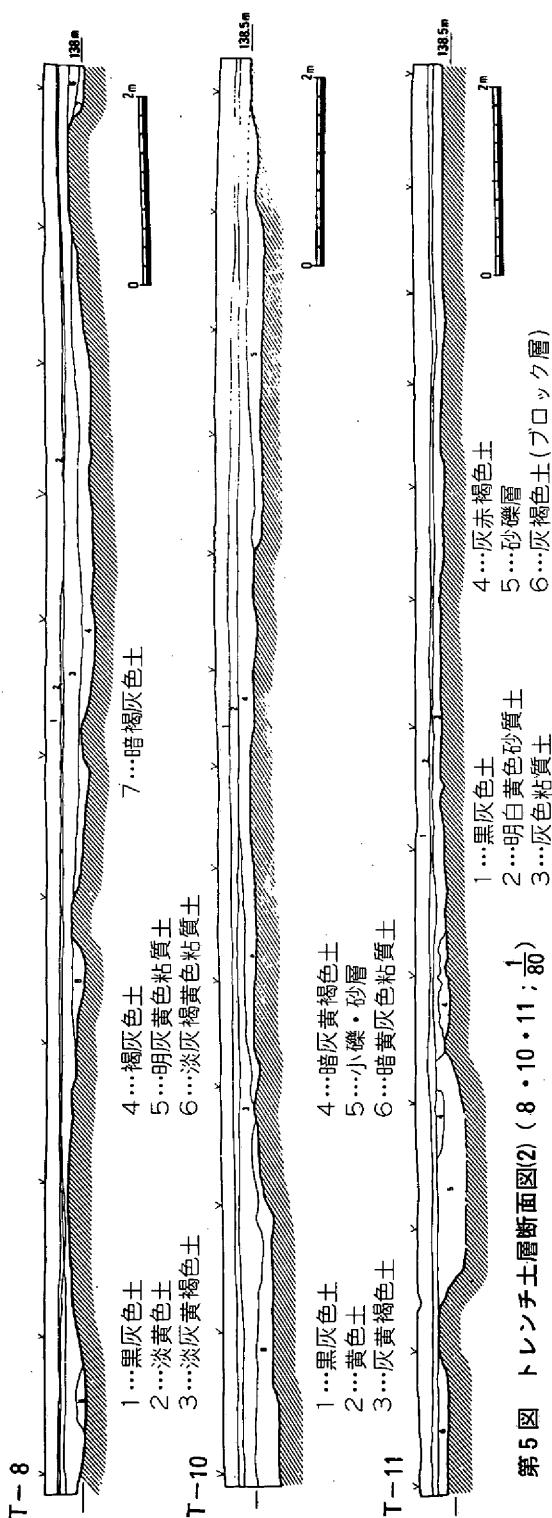
T-14～27、T-37～39、T-41～44の計21本のトレントを設定した部分では、東部分とは異なった比較的堅硬かつ良好な地表面が観察される、海拔140m前後を測る高位部が確認された。

上長野A遺跡



第4図 トレンチ土層断面図(1) (T-1・2・4~7・9 ; $\frac{1}{80}$)

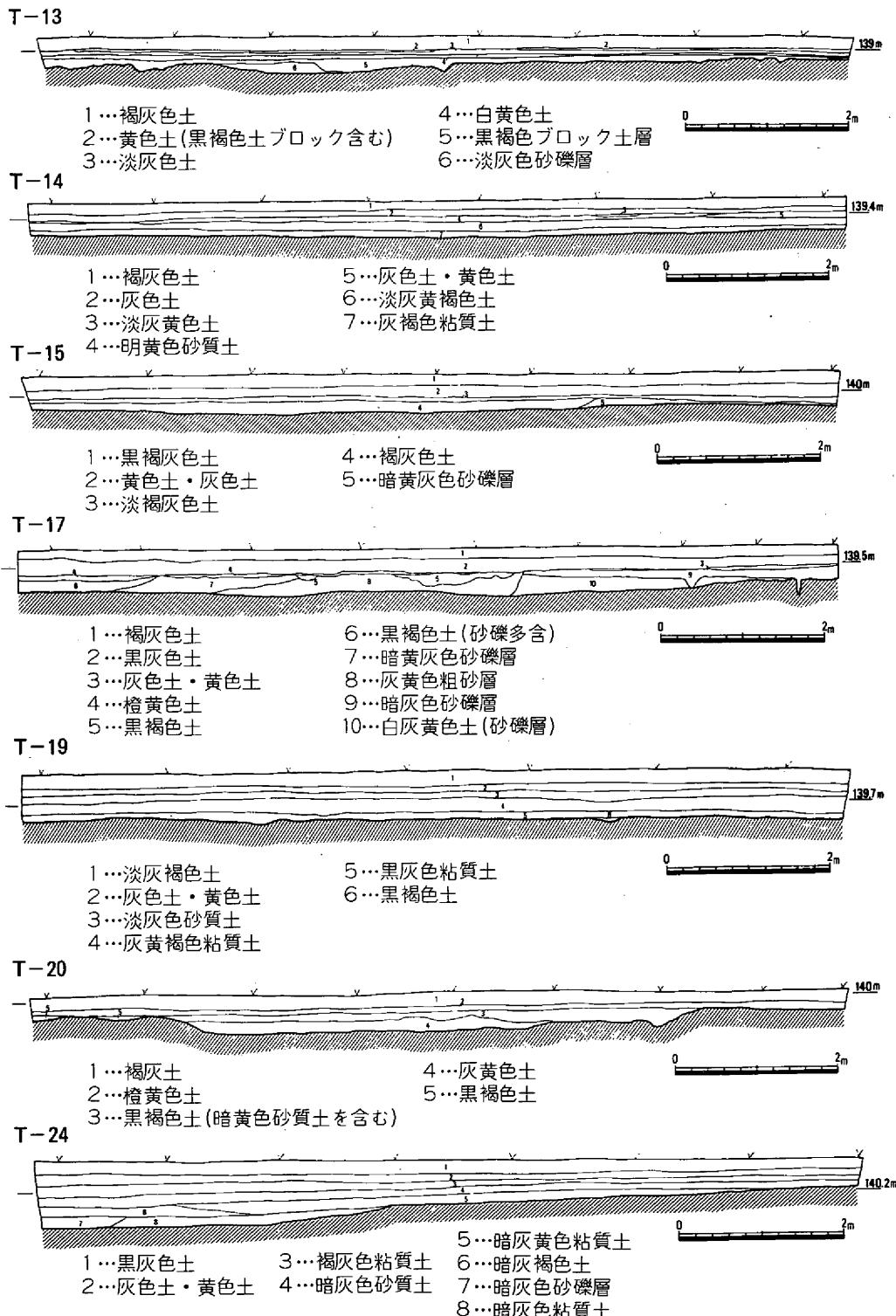
上長野A遺跡



それは、T-15・24・22などで、淡灰黄色微砂質土層が基盤層となっている。堆積土はさほど複雑ではないが、T-17のように砂礫層や粗砂層が目立つ地点や、T-25のように砂礫層がブロック状に観察されるものもある。これは、一時的な伏流水路のような性格が考えられ、浅い谷状地形部分にあたる可能性もある。T-19やT-20では、地山直上に黒褐色土の堆積が認められるが、出土遺物は皆無である。T-42やT-26では、土層断面に浅い土壌状の凹部が検出された。前者は、巾約96cm、深さ40cmを測り、東壁で観察されていないことから、土壌と考えられる。出土遺物は全くなく、時期は確定できないが、埋積土から中世に比定される可能性が強い。T-26では巾約230cm、深さ約40cmを測り、断面形は凸レンズ形を示す。南北方向からそれぞれ共通の埋積土がみられるが、その形状からは、人工的な溝か自然溝かは断定したがたい。この地区では、中世に比定される土器片が褐灰色土層からわずかながら出土しており、中世集落と深い関わりがあったことがわかる。また、T-24の第7層では、弥生式土器細片がわずかに含まれていたり、T-22では弥生時代中期の土器片（第14図-1）が高杯、甕片と共に出土してお、当時の集落との位置的関わりを示している。T-43・44では、やはり明瞭な包含層を認めないが中世土器片の出土が比較的ない。しかし、土層断面には柱穴・溝などの存在を示す特徴は全く認められず単調な層序を示している。

T-28~30、T-45・48~56のトレンチは、

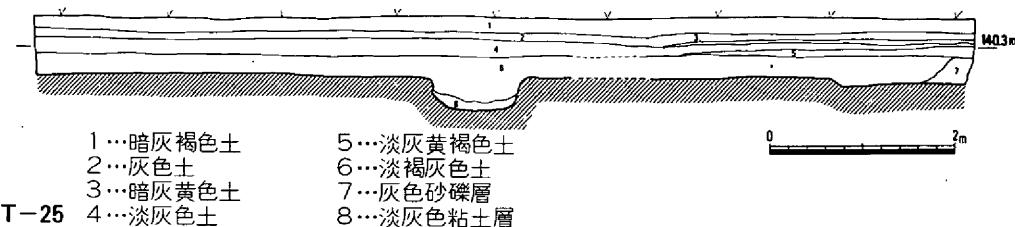
上長野A遺跡



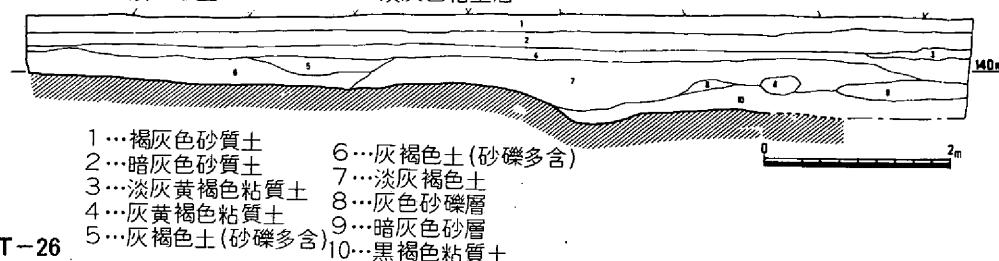
第6図 トレンチ土層断面図・平面図(3) (T-13~15・17・19・20・24; $\frac{1}{80}$)

上長野A遺跡

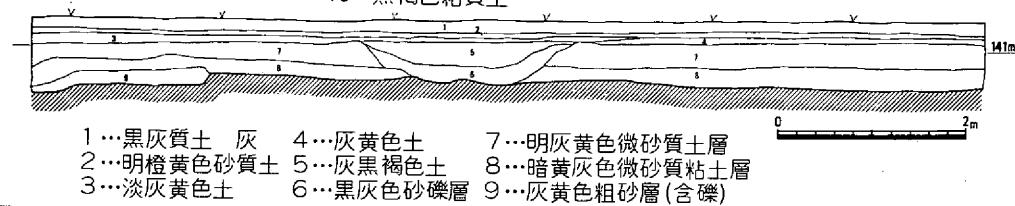
T-42



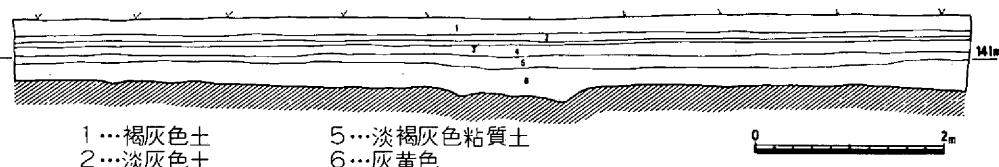
T-25



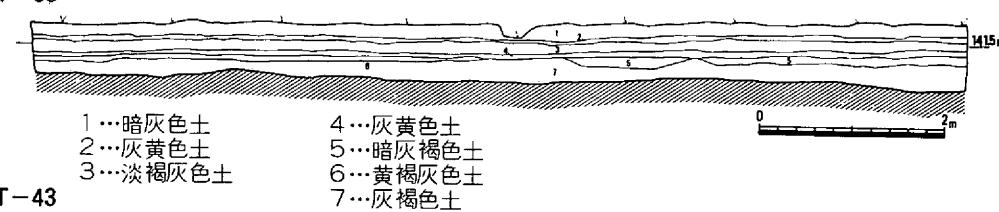
T-26



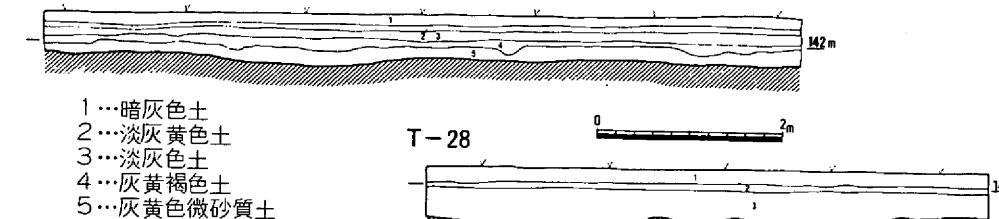
T-27



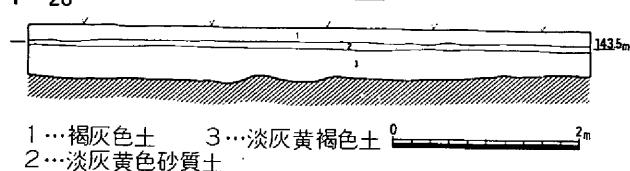
T-38



T-43



T-28

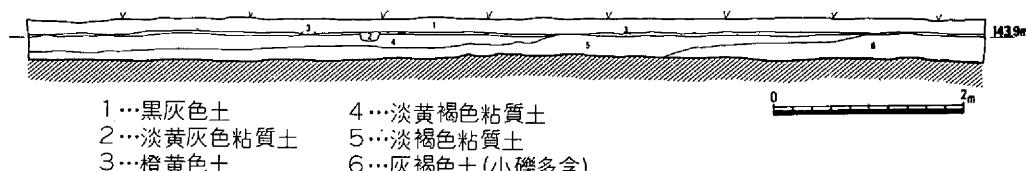


第7図 トレンチ土層断面図・平面図(4) (T-42・25~28・38・43; $\frac{1}{80}$)

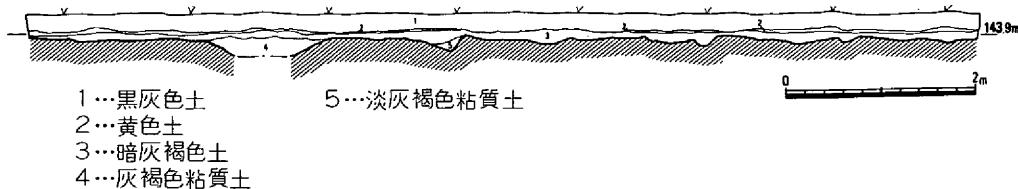
上長野A遺跡

経過で触れたように、当初確認調査の実施を予定していなかった地域で、これより西方はすべて、土地所有者からあらためて承諾を得て発掘を実施したものである。その結果、当初の予想に反して遺物も比較的多く出土し、竪穴式住居・土壙・柱穴群が検出され、集落の存在を裏付けることができた。まず、T-30を設定して掘り下げた際、水田面より深さ約30~50cmにかけて極部的に弥生式土器片が集中して出土し（第5・6層）、浅い凹みに包含層が埋積している状況が観察された。炭片も目立ち、周囲に住居址などの遺構の存在が予想された。しかしながら、T-28・29・45・48・49・51などではその痕跡や、まとまった出土遺物も確認できず、後世の削平や耕作によって消滅した可能性が指摘されよう。T-54では長径約120cm、短径50cm以上、深さ約20cmを測る長方形の土壙が検出された。埋積土中には炭片と共に弥生式土器片が出土し、第14図-9など中期末葉の指標となるものが含まれている。埋積土の状況から、土壙墓とは考えられないだろう。一方、発掘調査の最終時期に設定、掘り下げを行ったT-55では、一部ではあるが竪穴式住居を検出することができた。検出レベルは海拔約143.2mで、水田面から約40cmの深さを示している。深さは床面で約30cmを測り、比較的良好に残存していることは注目に値する。壁溝は新旧2条検出され、南側の溝が古く、建て替えによって北側掘方と共に更にもう1条の壁溝が掘りこまれている。2本の柱穴は、それぞれその位置から新旧の時期を示し、南側の径約4.3cm、深さ約50cmの柱穴が古い時期、北側の径約40cm、深約60cmの柱穴が新しい時期のものと考えられる。後者には径約15cmと推定される柱痕跡が観察される。トレンチの南西隅には厚さ3~5cmを測る炭の散布集中面が25×80cmの範囲に集中し、床面中央の火所の位置が推定され径約6m前後を測る円形の竪穴式住居の規模が推察される。床面は、

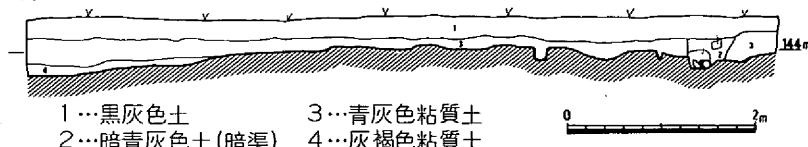
T-49



T-48

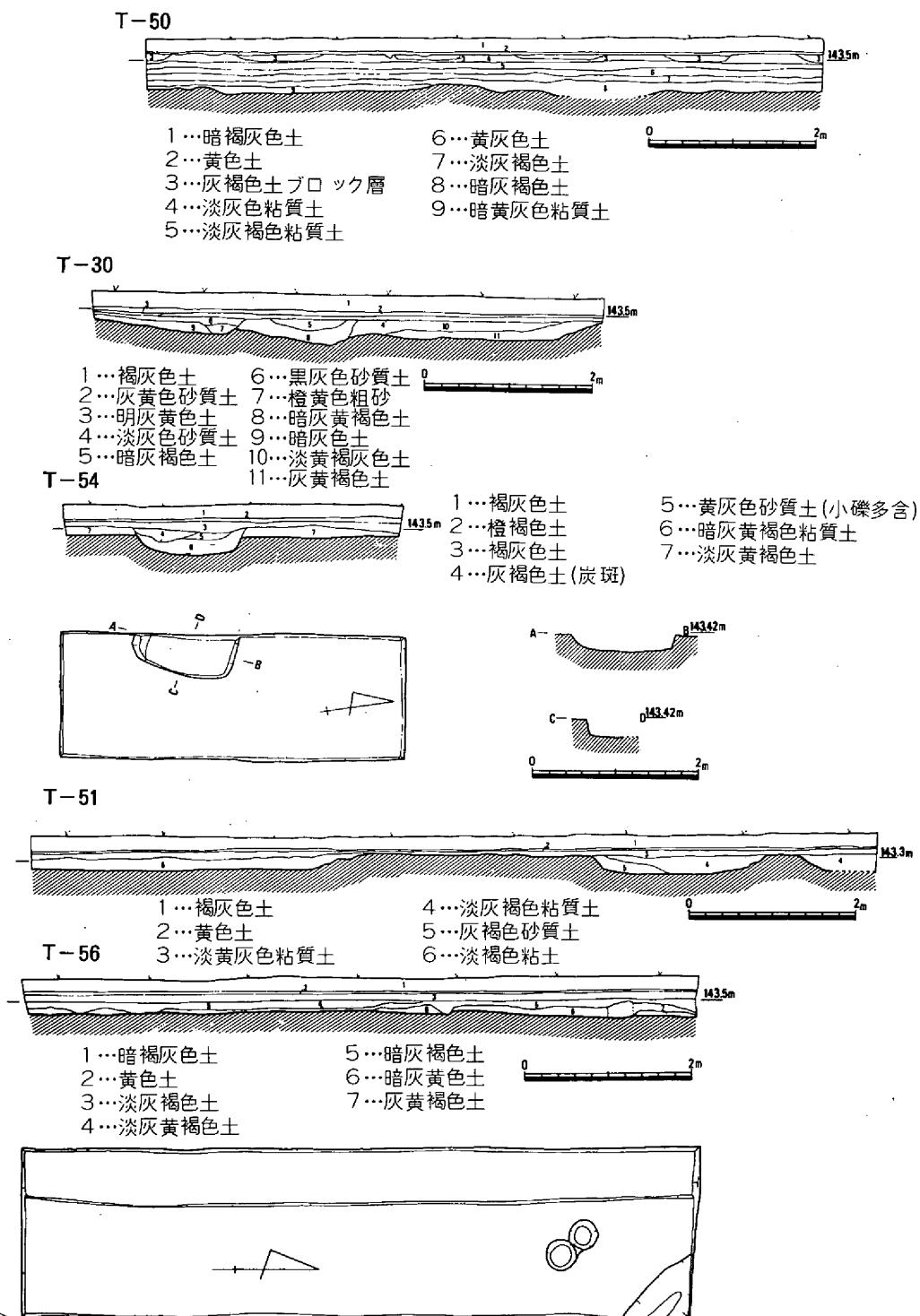


T-33



第8図 トレンチ土層断面図・平面図(5) (T-49・48・33; 1/80)

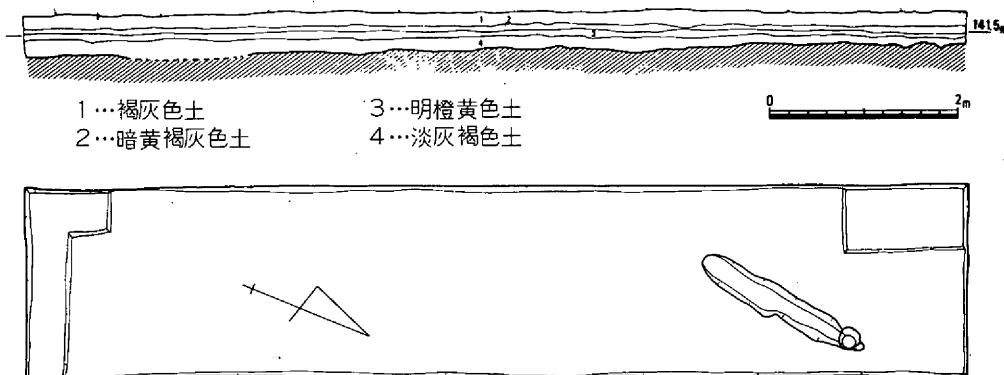
上長野A遺跡



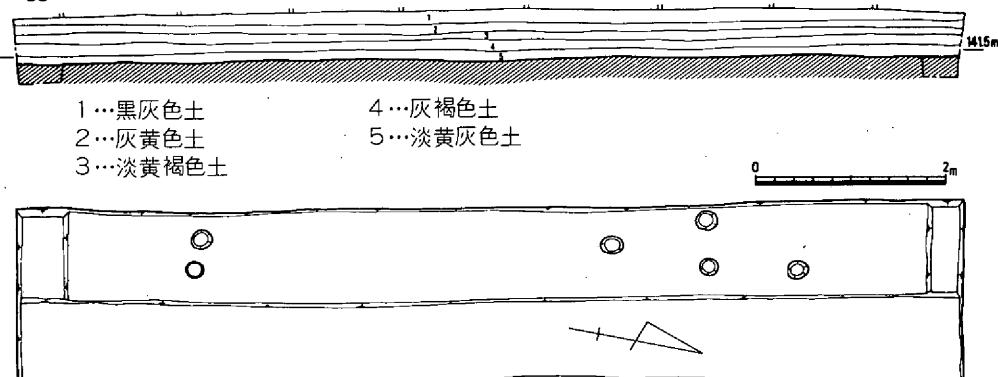
第9図 トレンチ土層断面図・平面図(6) (T-50・30・54・51・56 ; 1/80)

上長野 A 遺跡

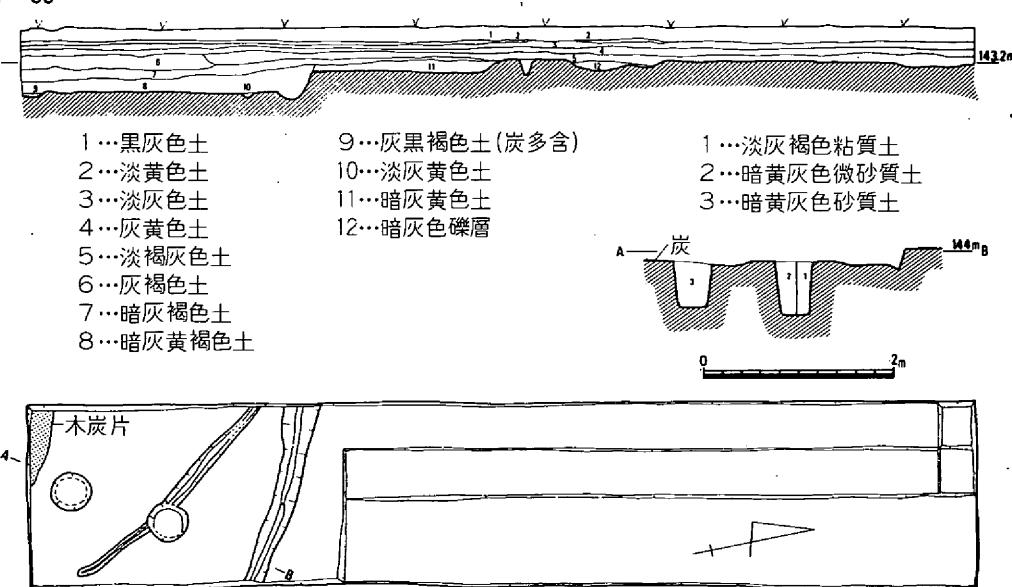
T-52



T-53



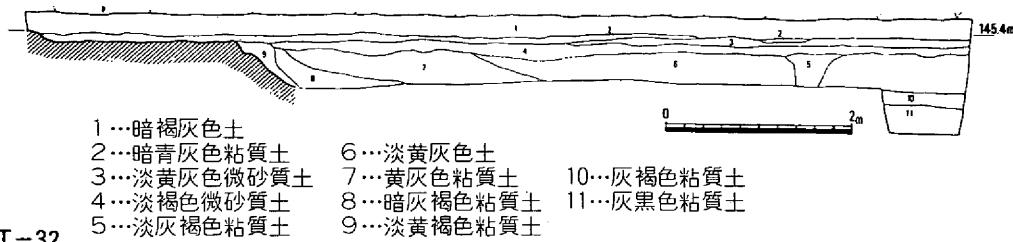
T-55



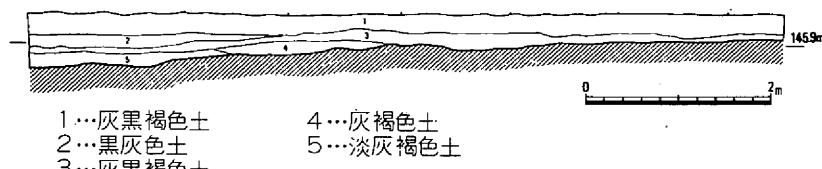
第10図 トレンチ土層断面図・平面図(7) (T-52・53・55; $\frac{1}{80}$)

上長野A遺跡

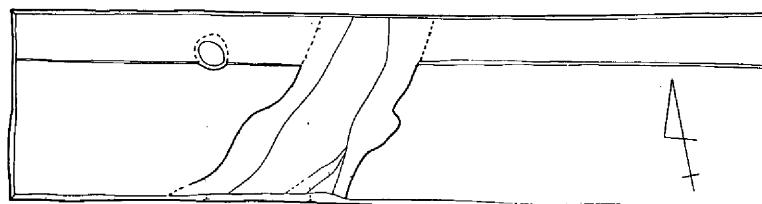
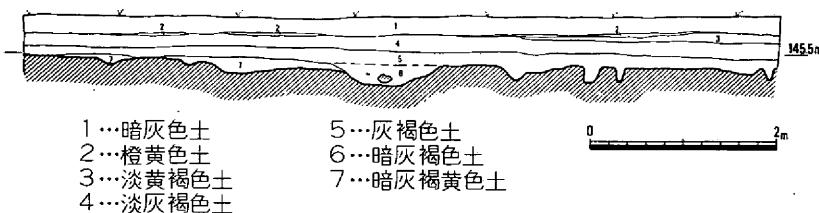
T-31



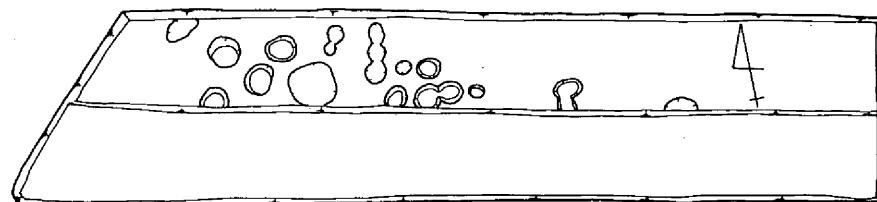
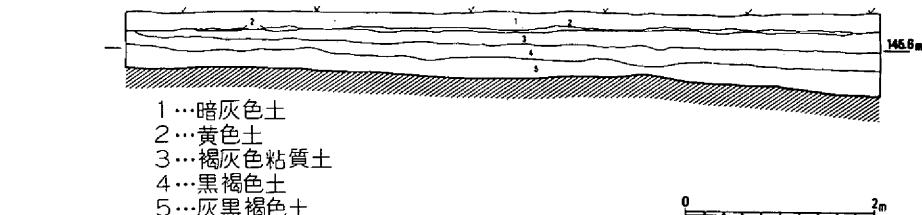
T-32



T-36



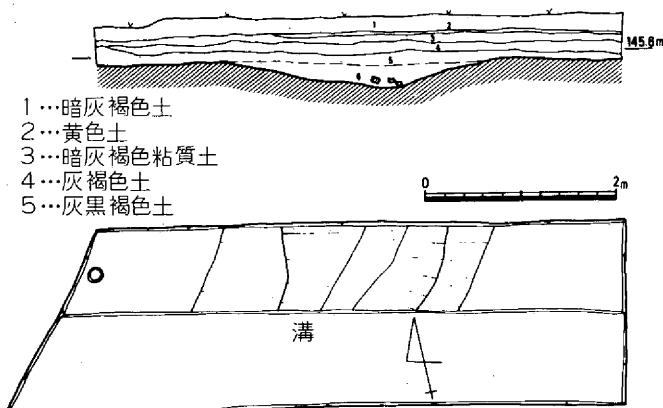
T-46



第11図 トレンチ土層断面図・平面図(8) (T-31 32 36 46 ; $\frac{1}{80}$)

あまり凹凸のない砂礫を含む明灰黄色粘質土層（基盤層）であるが貼床などの痕跡は認められなかった。そのように、高位部と低位部の境界部と考えられる位置で、竪穴式住居が発見されたことは、高位部は削平、低位部は流水等によって遺構の損傷が促進された可能性がある。

T-47



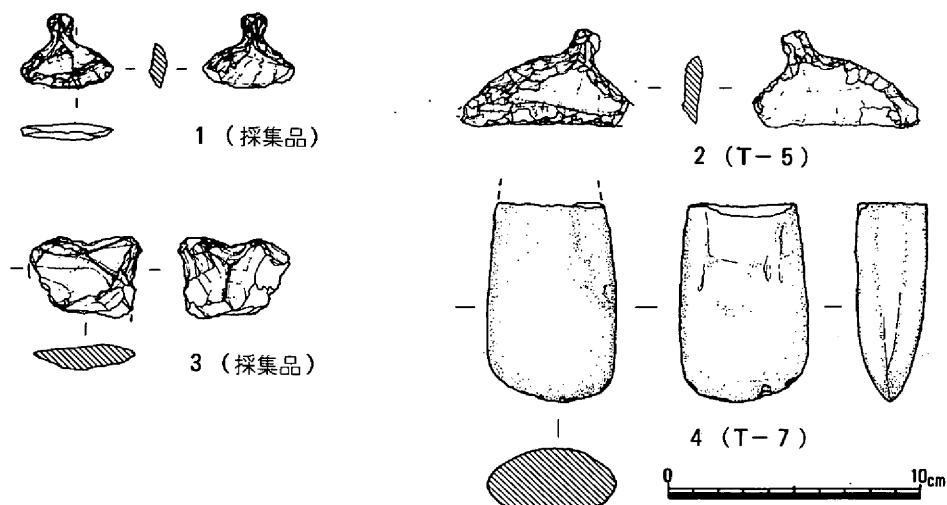
第12図 トレンチ土層断面図・平面図(9) (T-47 ; 1/80)

T-50・52・53・56はいずれも、弥生時代の遺構の確認、検出を目的として設定したトレンチであったが、竪穴式住居等は検出することができなかった。いずれも、比較的堅硬な灰黄色の基盤層が地山で、東方上長野A遺跡周辺とは異なる、安定した基盤層面が確認された。T-52・53の第3層・第4層が少量ながらも中世の遺物を含む包含層で、わずかながらも弥生式土器細片が出土している。T-52では、全長190cm、巾35cm、深さ約5cmを測る細長い溝と径約20cm、深さ約25cmを測る柱穴が検出された。双方共に出土遺物は認められないが、中世に比定される遺構と考えられる。T-53では、径20cm前後、深さ10cm前後を測る小柱穴群が検出されたが、これらもおそらくT-52と同時期のものと考えてよいだろう。

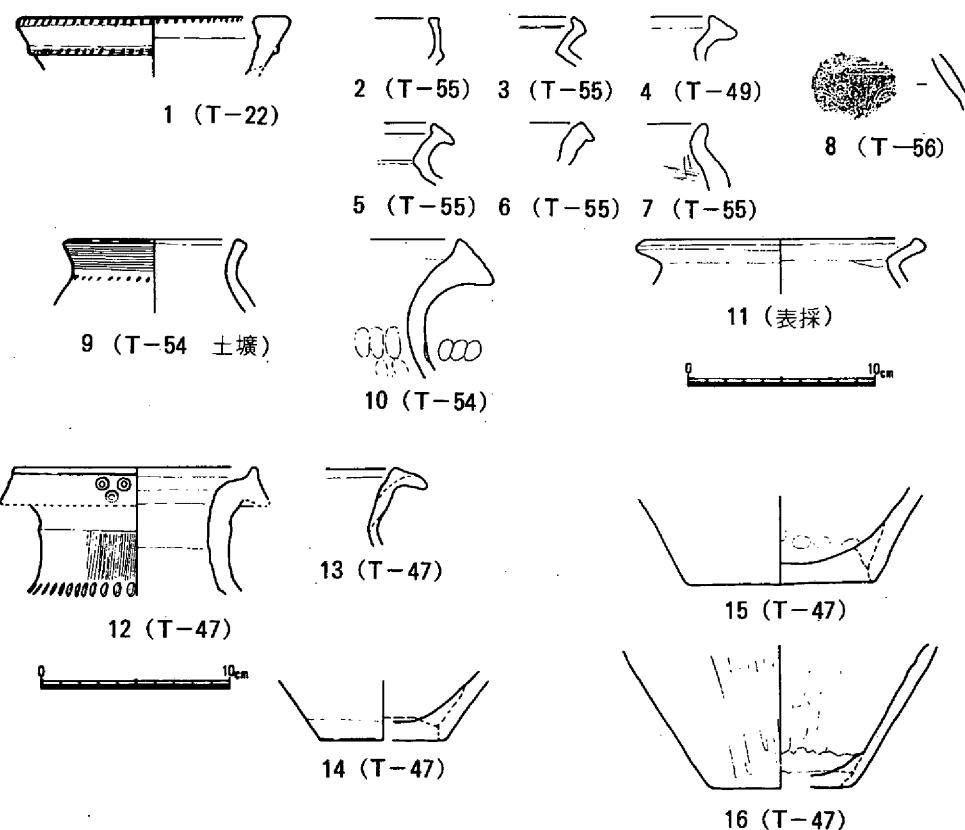
T-33~35・31・32は、南側の東西に延びる丘陵の北側縁辺にあたる部分で、いずれも現状は水田となっている地点である。T-33~35では、中世から近世にかけてこの陶磁器が若干出土しているが、明瞭な包含層や遺構は検出されなかった。かなり以前より斜面の削平が行われ、畑・水田耕作のため大巾な地形改変を受けたことが考えられる。T-31・32も同様に、自然地形がかなり南から北に向けて傾斜しているが、山側の高位部での遺構は全く確認することができなかった。

T-36・47・48は、今回の確認調査の対象範囲の中では最も高い位置に設定したトレンチで、海拔約145.5mの畠地部分である。前述の野元遺跡は北西方約300mの海拔約145mの位置に中心があるとされている。最初に設定したT-36では、地表より約20cmで他のトレンチでは全く認められなかった、灰褐色～暗灰褐色の黒っぽい包含層に達し、第4層では中世土器、第5層では弥生式土器片の出土が顕著となる。地山は、淡灰黄色の比較的さらさらとした粘質土で、旧表土層と推定される第7層から掘りこまれた溝が検出された。断面形は逆台形を呈し、検出全長約220cm、巾110cm、深さ約15cmを測る。溝中からは弥生時代後期と推定される甕・壺片

上長野A遺跡

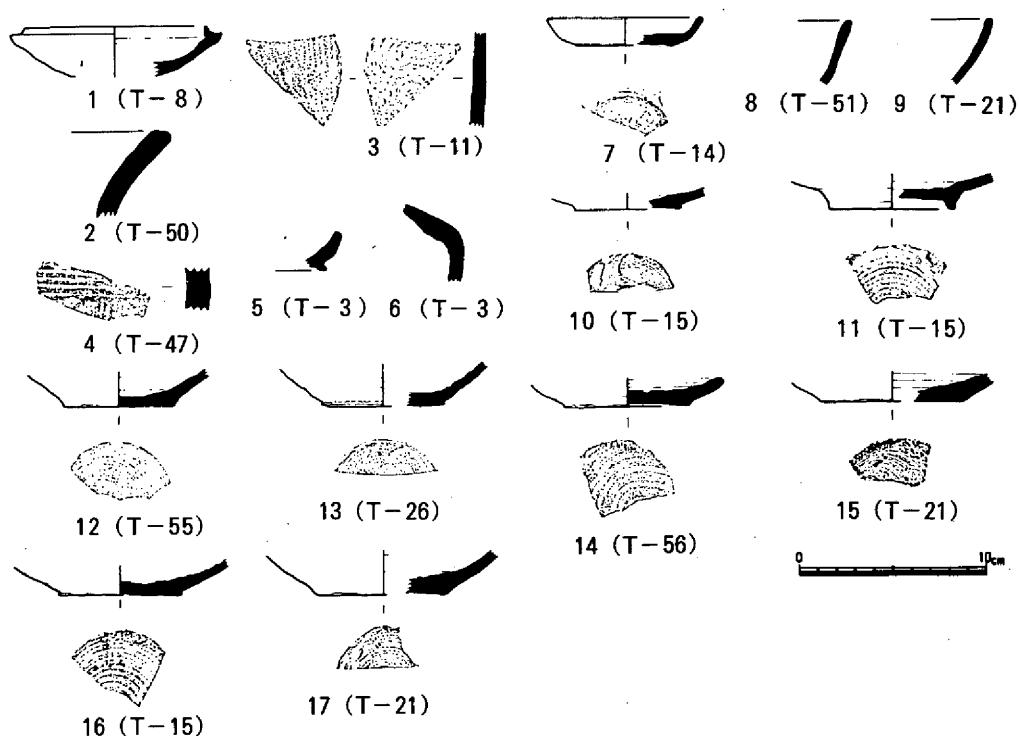


第13図 出土遺物実測図(1) (石器 ; $\frac{1}{3}$)

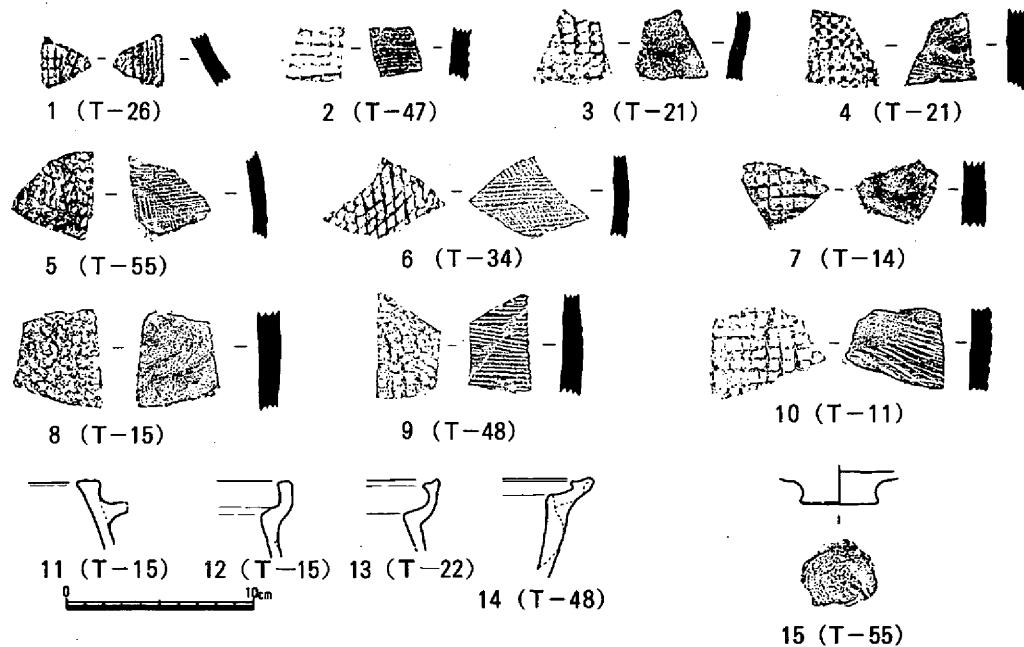


第14図 出土遺物実測図(2) (弥生式土器 ; $\frac{1}{4}$)

上長野A遺跡

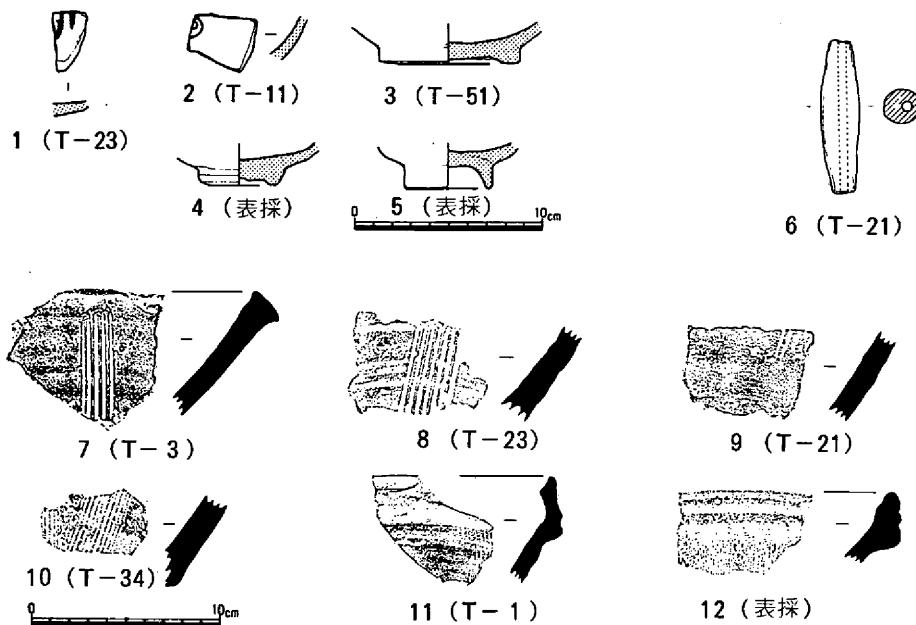


第15図 出土遺物実測図(3) (須恵器; $\frac{1}{4}$)



第16図 出土遺物実測図(4) (須恵器・瓦質土器・土師器; $\frac{1}{4}$)

上長野A遺跡



第17図 出土遺物実測図(5) (陶磁器・土錘・備前焼 : $\frac{1}{4} \cdot \frac{1}{3}$)

などが出土しているが、量は少ない。T-47は、このT-36で検出された溝の延長部を確認するために新設したトレンチである。溝の掘方はT-36で検出した部分に比べるとやや緩かで、巾も広くなっている。溝底のレベルはT-36の部分と比べると約3cm下降しており、排水の方向は、わずかながらも北を示しているといえる。出土遺物には、やはり弥生式土器片や中世に比定される須恵器・土師器片がわずかに出土している。

以上、トレンチによる確認調査による、主に土層断面の観察と検出遺構の概略について述べた。出土遺物については第13図～17図に、出土トレンチ番号を付して掲げるとおりであるが、以下、その概要について説明を加えておく。

石器は、第13図に掲げる2・4が今回の発掘調査で出土したもので、1・3は上長野A遺跡の中心すなわち、T-10付近で採集されていたものである（註1）。1・2はいずれもサヌカイト製の石匙でいずれも風化・磨滅が甚しいが、横長の剥片を利用し、片面のみの調整が施され、鋭い縁刃が観察される。重さは、各々5.10g、17.31gを量る。3はやはりサヌカイト製のスクレーパーないし剥片と考えられ、17.04gを量る。風化・磨滅が目立ち、二次的な欠損部と、細かな剥離との区別が困難である。4は、かなり風化しているが、その形態から乳棒状石斧と考えられる。頭部を欠くが刃先の形状はかなり良好に観察される。表面の擦痕（研磨痕）は観察できないが、刃部は使用によって片方がやや磨滅している。また、先端には使用による細かな欠損が認められる。石材はきめの荒い砂岩系の石材で、淡緑灰色を呈し、重量は182.94

gと比較的重い。これらの石器は、縄文時代に比定され、特に4の乳棒状石斧は縄文時代でも古い時期と考えられ、これらの石器に明確な時期を与えることはできない。

弥生式土器の大半は、発掘調査区の西半に集中している。時代的には概ね中期中葉から後期にかけてのものが多く、甕・壺・高杯形土器が大半を占めている。第14図-1は中期中葉に比定される壺形土器で内外面に刻み目をめぐらしている。8は、櫛描き文が施された小片で、やはり壺形土器の破片と考えられる。9は、T-54の土壤中から出土した破片で、台付無頸壺と考えられ、凹線文・刺突文をめぐらす。12は、口縁部に3個を1単位とする竹管文を飾り、頸部下位には押圧文をめぐらす後期中葉に比定される壺形土器である。

古墳時代に比定される出土遺物は極めて少なく、第15図-1~3・6がその可能性がある須恵器片と考えられる程度である。5は、奈良時代の杯と考えられ、前掲の第2図-4の蓋などが出土する鍋峪遺跡との関連が注目される。

今回の発掘調査でもっとも多く出土したのは、いわゆる勝間田焼（第15図・第16図）（註3）で、皿・碗・甕（壺）などの破片が目立つ。皿は1点のみで、一般的な形状を示し、外底部は糸切による切放しが行われている。碗は、やや肥厚して丸くおさまる口縁端部が観察され、回転調整によって生じた内面の凹凸が目立つ。外底部はやはり糸切底であるが、11のように高台を貼付けたものもある。甕あるいは壺と考えられる破片はすべて体部片である。外面は格子目あるいは斜格子状のタタキが見られ、内面は荒い刷毛調整で仕上げられている。これらの勝間田焼片は、いずれも灰青色ないしは淡灰色を示し、極めて良好な焼成で堅緻な仕上りが観察される。時期的には、ほぼ12世紀代の遺跡から出土する勝間田焼と、共通の手法と形状が認められる。11~14は瓦質土器で軟質でもろくなつた破片で、灰色~黒灰色を呈する。羽釜・鍋の破片と考えられる。15は土師器の台付小皿で台の部分がほぼ完存しており、糸切痕がかすかに観察される。もう一枚の小皿をのせて、2枚重ねで用いられた可能性が強い。

1~3は輸入磁器で1は青磁（皿）、2・3は白磁である。1には櫛描き文、2には飛雲文の一部が観察される。3は丁寧に削りだされた高台部は露胎となっており、光沢のある透明な釉が観察され、白磁特有の釉調を示す。4・5はいずれも国産の茶碗と考えられる。4は外底部の中心は露胎となり全体は緑灰色を呈する磁器である。見こみには三叉トチンの圧痕が観察される。5は、全面に暗白黄色の釉がかかり、細かな貫入が看取される。高台は高く、端部は磨滅して釉を失っている。いずれも近世に比定される。

7~12は備前焼で、いずれも播鉢の破片である。7は、鎌倉時代に比定される古い口縁部の特徴を残し、わずかな上下方への拡張が認められる。11は、口縁部の上下方への拡張が顕著で室町時代に比定される。12は、内面のカキ目もかなり細く、近世以降の生産品と考えられる。いずれも備前焼特有の赤褐色を呈しているが、他に出土している甕・壺などの小片には灰色・

上長野A遺跡

灰赤色を呈するものがあり、比較的長い時期巾を示している。

6は、棒状単孔小形土錐で土師質焼成の完形品である。重量は12.66gを量る。時期はやはり奈良時代以降、中世に比定される可能性が強い。

(註)

(註1) 西村琢氏所有の水田が遺跡地で、氏が採集された。すべて、鏡野町歴史資料館におさめられている。

(註2) 県北部では、上房郡北房町の備中平遺跡出土の2例が知られている。岡山県埋蔵文化財発掘調査報告(12)——中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査7——岡山県教育委員会 1976年。

(註3) 現在の勝田郡勝央町で、平安時代から鎌倉時代にかけて生産された須恵器の通称である。主に、椀・皿・壺・甕などが生産されているが、最近では瓦も発見されている。

総括

今回の発掘調査は、トレーナー調査を主眼とした確認調査であり、面的なひろがりをもつ、大規模な発掘調査に移行した部分はない。対象となった上長野A遺跡の中心では、遺構は全く検出できなかったが縄文時代の石器をはじめ、中世を主体とした遺物が得られた。また、調査期間の後半に実施した、西方の調査区での、弥生時代の土壌や竪穴式住居の一部の発見は、地表面や地形の観察からはその存在を全く予想できなかった貴重な収穫があった。また、出土遺物にみられる中世の遺構も、小規模ながらも柱穴群が発見されたことにより、集落の存在を示唆しているといえる。最西端の畠地部分は、北西方の野元遺跡との関わりを意識してトレーナー調査を実施した地域であるが、弥生時代中期に比定される溝を1条検出した。これは、竪穴式住居を囲む馬蹄形状の溝ではなく、異なった性格・用途が考えられる。この発見によって、遺跡の存在する小平野の西側丘陵縁辺部には、弥生時代中期から後期を中心とした、集落のひろがりが推察される。

発掘調査の実施にあたっては、作業員各位はもとより、地元の方々、圃場整備事業の役員各位には、多大なご協力を賜った。また、安藤武夫・西村琢・安藤時子の各氏には、かつて採集された出土遺物や出土状況について、ご教示を賜った。ともに深甚の謝意を表する次第である。

上長野A遺跡

図版1



1. 上長野A遺跡（矢印）・発掘調査区域全景（南西から）



2. 発掘調査区全景（北東から）

上長野A遺跡

図版2



1. 発掘調査区東半部（西から）



2. 発掘調査区西方南辺部（西から）

上長野A遺跡

図版3



1. T-1 (南東から)



2. T-3 (南東から)



3. T-4 (南東から)



4. T-5 (南東から)



5. T-6 (南東から)



6. T-7 (南東から)



7. T-8 (南東から)



8. T-9 (南東から)

上長野A遺跡

図版4



1. T-10 (南東から)



2. T-13 (南東から)



3. T-14 (南東から)



4. T-16 (南東から)



5. T-17 (南東から)



6. T-19 (南東から)



7. T-23 (北東から)



8. T-24 (北東から)

上長野A遺跡

図版5



1. T-26 (南東から)



2. T-29 (南東から)



3. T-30 (南東から)



4. T-33 (南東から)



5. T-38 (南東から)



6. T-39 (南東から)



7. T-41 (南東から)



8. T-42 (南東から)

上長野 A 遺跡

図版 6



1. T-55 壴穴式住居と土層断面（南東から）



2. T-55 壴穴式住居（北から）

上長野 A 遺跡

図版7



1. T-52 (北東から)



2. T-52 溝状遺構と柱穴 (北から)

上長野A遺跡

図版8



1. T-54 土壌(南から)



2. T-53 柱穴群(北東から)

上長野A遺跡

図版9



1. T-43 (南東から)



2. T-44 (南東から)



3. T-45 (南東から)



4. T-48 (南東から)



5. T-49 (南東から)



6. T-50 (北東から)



7. T-51 (南東から)



8. T-56 (北東から)

上長野A遺跡

図版10



1. T-36 溝と土層断面（東から）



2. T-46 柱穴群と土層断面（東から）

上長野A遺跡

図版11



1. T-47 土層断面と溝検出状況（南西から）



2. T-47 溝完掘状況（南西から）

七 長野 A 遺跡

図版12



1. T-12 発掘作業（南から）



2. T-22・25 発掘風景（北東から）



3. T-16 発掘風景（南東から）



4. T-28 発掘風景（東から）



5. T-55 竪穴式住居発掘作業（北から）



6. T-36 溝発掘作業（東から）



7. 埋め戻し作業



8. 埋め戻し・整地作業

上長野A遺跡

図版13



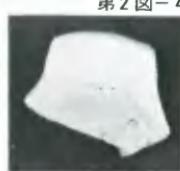
第2図-4



第14図-9



第14図-12



第15図-7



第15図-11



第15図-13



第15図-16



第15図-17



第17図-2



第17図-6



第17図-3



第17図-12



表採



第17図-11



第17図-8

上長野A遺跡

図版14



第2図-1 石錘



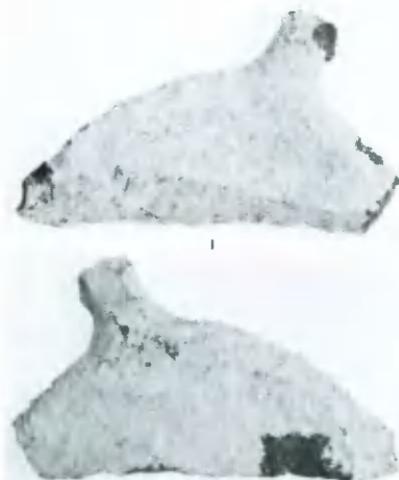
第2図-2 石斧



第13図-1 石匙



第13図-3 剥片



第13図-2 石匙



第13図-4 石斧



岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 60

陣山北山麓遺跡
奥迫遺跡
上長野A遺跡

昭和60年3月15日印刷

昭和60年3月30日発行

編集・発行 岡山県教育委員会
印 刷 柳本印刷株式会社